



TITLE:

箱庭療法に関する研究(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

岡田, 康伸

CITATION:

岡田, 康伸. 箱庭療法に関する研究. 京都大学, 1980, 教育学博士

ISSUE DATE:

1980-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r4151>

RIGHT:

箱庭療法に関する研究

岡田 康 伸

新 制
教育
22 函

箱庭療法に関する研究

岡田 康伸

目 次

はじめに	-----	1
第I部 理論編	-----	5
第1章 箱庭療法とは	-----	6
第1節 箱庭療法の変遷	-----	6
§ 1. 世界技法と世界テスト	----	7
§ 2. カルフの考え	-----	9
§ 3. 日本における箱庭療法の 意味と現状	----	14
第2節 箱庭療法の実際	-----	20
第2章 箱庭療法の理論	-----	26
第1節 治療者の態度及び作品の 見方	----	26
§ 1. 治療者の態度	-----	26
§ 2. 作品の見方	-----	29
第2節 箱庭療法の作品と無意識	----	33
§ 1. 無意識と自己表象	-----	33

§ 2.	イメージとしての箱庭療法 の作品	---	39
§ 3.	治療者の作品に与える影 響について	---	43
第3節	箱庭療法の治療的要因	-----	47
第4節	箱庭療法の特徴	-----	51
第5節	文献研究	-----	63
§ 1.	世界技法に関する文献	----	63
§ 2.	箱庭療法に関する文献	----	68
§ 3.	事例に関する文献	-----	71
§ 4.	基礎的研究に関する文献	---	74
第3章	遊戯療法	-----	76
第1節	遊戯療法について	-----	76
§ 1.	遊戯療法とは	-----	76
§ 2.	遊戯療法の原理	-----	78
§ 3.	治療過程	-----	80
第2節	遊戯療法の発展	-----	82
第3節	遊びについて	-----	85
§ 1.	遊びの学説	-----	85
§ 2.	遊戯療法に現われる遊び	---	87

第Ⅱ部 基礎的研究編	-----	91
第4章 作品の分析—年令差を中心として—	-----	92
第1節 問題と目的	-----	92
第2節 方法	-----	94
第3節 結果と考察	-----	96
§ 1. 作品の種々の分析	-----	96
(1) 時間	-----	96
(2) 立体感	-----	100
(3) 玩具の使用数と種類	-----	104
§ 2. 各群の特徴	-----	109
(1) 幼稚園年長組群	-----	109
(2) 小学3年生群	-----	115
(3) 小学6年生群	-----	118
(4) 中学2年生群	-----	121
(5) 高校生群	-----	125
(6) 大学生群	-----	133
§ 3. 性差	-----	135
§ 4. その他	-----	136
第4節 要約	-----	138

第5章 箱庭療法の診断的側面について --- 142

いゝ—SD法を中心とした ひとつの試み—

第1節 問題と目的 ----- 142

第2節 方法 ----- 144

§ 1. 作品の収集 ----- 144

§ 2. SD法評定の手続き ----- 146

第3節 結果と考察 ----- 148

§ 1. 作品の種々の分析 ----- 148

(1) 所要時間 ----- 148

(2) 立体感 ----- 150

(3) 使用された玩具の数と種 --- 152

類

(4) ほしい玩具の数と種類 ----- 154

(5) テーマ分析 ----- 155

(6) 箱の使い方 ----- 158

§ 2. 作品の類型化及び診断性 -- 160

§ 3. 対形容詞の次元抽出及び -- 170

診断性

第4節 まとめ ----- 178

第6章	イメージに関する研究—動物	180
	物イメージに関する—研究—	
第1節	問題と目的	180
第2節	方法	188
§ 1.	IMQにおける動物イメージの収集	188
§ 2.	SD法の資料収集	189
第3節	結果と考察	191
§ 1.	IMQにおける動物イメージ	191
§ 2.	SD法による動物イメージ	203
第4節	まとめ	223
第7章	作品の左右性について	227
第1節	問題と目的	227
第2節	方法	233
第3節	結果と考察	246
第8章	テーマ分析—道・流れ・川—	265
	の意味—	
第1節	問題と目的	265

第2節 「道・流れ・川」の意味	268
§ 1. 道のイメージ	268
§ 2. 流れのイメージ	274
§ 3. 川のイメージ	279
第3節 まとめ	287
第9章 総括	295
§ 1. 本論文の要約	295
§ 2. 今後の問題	302

参考文献	305
------	-----

付表	336
付表1. 記録用紙の例：治療用	337
付表2. 箱庭療法記録用紙研究用①	338
箱庭療法記録用紙研究用②	339
付表3. 質問紙	340
付表4. S D法調査用紙A	341
S D法調査用紙B	342
S D法調査用紙C	343
S D法調査用紙D	344

付表 5. I M Q 用紙	-----	345
付表 6. 左右性研究の調査用紙	-----	346

はじめに

本論文は、筆者が箱庭療法をテーマに、その基礎的資料を収集した過去10年間の研究をまとめたものである。この間、心理治療に携わり、さまざまの知見と患者から学び、それらに基づき、心理学的な方法で基礎的研究を行ってきた。しかし、実際には、研究と治療との間に大きなギャップを感じ続けている。少しでもこのギャップを埋めようと努力はするが、治療における唯一性の個人、個人の尊厳、個人の自己治癒力などは研究から得られた知識を希薄なものにすら感じさせる時がある。しかし、この10年間の基礎的研究をまとめることは、研究と治療とのギャップを少しでも埋め、新たな研究へのステップとするために、筆者にとって意味があるばかりでなく、臨床心理学のひいては心理学にとって、少しは貢献するのではないかと思う。

心理治療の研究は人間性の研究であり、教育の根本と関わるものである。教育は人間の成長を促すことに関する作用全般であり、心理治療もそのひとつである。人間の成長について考察する時、我々は本能、道徳、文化などの諸問題を人間性や人間の歴史や社会などいろいろな側面から研究する。これらの幅広いテーマが教育に関する研究対象となるのと同様に心理治療も教育のテーマとなる。

筆者は心理治療を行うにあたって人間の内的世界を重視している。特に意識と無意識との関係及び無意識の働きとその意識化を重視している。心理治療とは症状を消去することと目的とするとともに、個人が無意識を意識化しようとする過程である。その過程はその個人が進むべき道であるとさえ言えるのではないかと思う。即ち、心理治療はその個人が授けられた固有の道とそのまま進むように努力することとを促す（見守り、ともに歩む）ことであると理解している。

治療は治療者の人格と極めて密接に関係する。ここでのいう人格とはその人の許容力、理解力、感情などの諸側面をすべて包含したものである。現実の治療的活動は治療技法にもとづいた諸行動であるが、治療は患者と治療者との相互作用であり、二者のぶつかり合いである。それは二者の戦いであるともさえいえる。治療技法とはこのような二者の相互作用の中で治療者を支えるものと思う。その技法は先覚者たちによって理論づけられ、有効性が臨床的に実証されてきている。我々はそのような技法に守られながら治療をしているのであるが、どのような技法をとるかにその人の好み、特徴が出てくる。即ち、どの技法に従っているかはその人の人格と深く関わっているのである。筆者はユングの分析心理学の影響を強く受け、治療を実施している。

本論文で問題にしようとしている箱庭療法は、ユングの分析心理学を背景にもつ心理治療の一技法である。この療法は現在日本で多

く実施され、治療に利用されているが、事例研究が多く、箱庭療法がどのようなものであるかと研究したものが少ない。本論文の目的は、箱庭療法を紹介し、少しでも箱庭療法を科学的に把握するために基礎的資料を得ることである。

第 I 部

理論編

第 1 章 箱庭療法とは

第1節 箱庭療法の変遷

箱庭療法は、1929年に、ローエンフェルト^{165, 166, 167)} (M. Lowenfeld) によって世界技法として生まれた。イギリスにあった床遊び (Floor Games) (H. G. Wells の小説に出てくるとされている) にヒントを得たという。これは二つの流れに分かれていく。ひとつは、ビューラー²²⁾ (C. Bühler) によってアメリカの客観化、数量化の傾向と強く結びつき世界テストと呼ばれ、診断を重視したテストとなる。ボルガー (H. Bolgar)、フィッシャ (L. Fisher) によってその発展が計られていった。一方、スイスのカルフ¹¹³⁾ (D. Kallf) によって、ユング分析心理学と結びつき、診断よりも治療に重点が置かれて、Sandspiel (Sand Play Technique, 箱庭療法)

となった。カルフに手ほどきとうけた河合⁽¹²⁴⁾が1965年にこれをスイスより日本に導入した。日本においては診断テストとしてよりも治療面に重点が置かれている。

以上が箱庭療法の変遷の概略である。箱庭療法は遊戯療法の一技法であり、遊戯療法に関しては、第3章で記述するとして、ここでは、世界技法と世界テスト、カルフの考え及び日本での箱庭療法の位置づけを通して筆者の考えを述べたい。

§1. 世界技法と世界テスト

ローエンフェルトは、A.フロイト (A. Freud)、M.クライン (M. Klein) とともに遊戯治療を心理療法のひとつとして成立させた三大先覚者のひとりである。彼女は、種々のミニチュアの玩具と箱と砂を使用して、箱の中に玩具で何かを作ることを子供に求めた。この作られた作品は子供の心を示した子供の世界であるとし、世界技法と名づけた。彼女の方

法は構成的治療法と呼ばれ、世界が構成されることは、子供の心の投影であり、表現であることと強調している。ローエンフェルト自身は、その後、この技法からモザイクテスト¹⁶⁹⁾へ興味を移していく。モザイクテストでは、砂の使用がなくなり、素材がモザイクの抽象的な図形になり、より象徴的・抽象的な世界の表現となる。抽象的な素材による表現は、より広い、深い意味を示しているかもしれないが、それだけ解釈、意味づけが困難になるといえる。

ビューラーは、世界技法の玩具を限定し、砂の使用を禁止することによって、より診断性の高いものとし、世界テストと名づけた¹⁷⁰⁾。その後、ボルガー、フィッシャラによって世界テストの研究は続けられていたようだが、余り発展したとはいえない。日本においては、山下³¹⁰⁾、岡田²³²⁾洋らが世界テストについて、追試的に研究している。この研究は1980年代の研究であり、その後、発展をみなかった。それ

はこの研究が臨床と結びつかず、心理学研究の観点からのみの研究であったためであろう。この事実は、今後の臨床心理学研究が臨床の実際と結びついた研究にならなければ発展しないことを示しているといえよう。

§ 2. カルフの考え

カルフは、診断よりも治療に重点を置いて、世界技法を発展させた。彼自身はユング派の分析家の資格はもっていなかったが、ユングの考えとこの技法にとり入れ、Sandspiel^{112,113)}とした。彼は Sandspiel に表現された作品は、自己 (Self)^(注1) の表現への過程であると考え、自己を示す作品の典型として、マングラ、宗教玩具による聖域の表現を重視している。カルフ¹¹³⁾は、ユングの言葉を引用して、「古来、円および中心の点は、神の象徴であり、それと受肉化した神の全体性——つまり中心の点と周辺の多くの点——を図示しているのでは

(注1) ユングは「自己とは意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心である」という。

る。さらに、心理学的には、この配置はマンダラと意味し、同時に自己の象徴と意味している」とマンダラ^(註1)を説明している。彼女は自己への過程と E. Neumann⁽²³⁾の考えに基づいて、1. 動植物段階、2. 戦いの段階、3. 統合の段階と仮定している。まず、自己表現があり、それから上記の三段階の過程を経て、再び自己が表現されると考える。カルフの考えを筆者なりに述べてみると、この過程は、自我^(註2)の発

(註1) マンダラ (Mandala, मण्डल) とは、サンスクリット語であり、一般には円を意味する。梅尾⁽²³⁾によると、「秘教では、本質の義、道場の義、壇の義、聚集の義の四つの概念になる。曼荼羅は曼荼 (manḍa) と云う語基と羅 (la) なる後接語とから成立している。その中、曼荼とは、心髄、本質の義で、羅とは梵語の後接語たる mat, vat と等しく、所有の義、成就の義で、つまり曼荼羅とは本質心髄を有しているものという義である」という。ユングは、患者を分析する過程で、円と四角をテーマとするイメージが出現してくるのにつづく。「マンダラは無秩序と混乱の時に生じ、それらと相補して安定を得させる働きがある」と言い、「全体性の元型と呼ぶことが出来る」と言う。河合⁽³³⁾は、「秘教におけるマンダラの意味は、ユングの考えている自己の象徴的表現ということと相当一致度の高いものと思われる」とし、「意識的には分裂の危機を感じ、あるいは強い不統合性を感じて解決策もなく困っているひとが、このマンダラ象徴が生じることによって心の平静を得、新たな統合性へと志向してゆく過程を見ることを経験すると、人間の心の内部にある全体性と統合性へ向かう働きの存在、自己治療の力の存在を感ぜずにはおれないのである」と言う。カルフは、箱庭の作品で、円と四角あるいは円と「4」のテーマが出現してくる時、マンダラ

と言っている。(Fig. 2-3, Fig. 4-3, Fig. 7-2 参照)これをシュレーゲル(L. Schlegel)⁽⁴³⁾は、「カルフは、箱庭の作品で子供が1つの丸い月をつくり、正方形の区域に区別したりする時、その作品に「中心関係性」が形成されたと考える。これはユングのいう曼荼羅と関係がある」と解説している。

(注2) ユング⁽⁴²⁾は、「自我とは、意識の主体であり、意識の中心を形成し、高度の連続性と高度の同一性を備えている。」という。

達過程であるとともに自己と自我との関係の改善であり、社会性の発達でもあり、外界においては両親をはじめ、関係ある人々との関係の改善の過程を示すものである。個々の過程をさらに説明すると次のようになる。

(1) 動・植物段階：この段階は無意識内に閉じ込められた、エネルギーに満ちた、未分化な、本能的、衝動的な生命の動きが現われてきた段階といえる。このような無意識にある本能的なものは、社会生活では道徳や規範や規則のために抑圧されていることが多い。この抑圧を弱め、無意識にあるものと接触していく手段として箱庭療法があり、無意識にある本能的なものが活性化された表現が動・植物段階の作品である。つまり、動・植物段階

の作品は、無意識にあるエネルギーに満ちた、本能的なものが活性化されたことの表現であり、実際には、動物や植物の玩具を使って、ジャングルや原始林や奥深い森などの作品となる。この表現は、自我と自己の関係に亀裂が生じたことを示し、自己の領域に自我が侵入してきたことになり、ここに二者間に新しい均衡が必要となる。新しい均衡を得るために次の段階である「戦い」がある。

（2）戦いの段階：これは、自我と自己の関係が不安定なために、揺れ動き、混乱することと意味している。自我は肥大化されたり、狭小化されたりして不安定である。そして攻撃的になる。しかし、単に攻撃的であるだけでなく、活動的という面も含んでいる。「戦い」は常に何かが動く時には起っているといえる。例えば、新しい記憶が古い記憶から置き換えられる時、（干渉という^{注1}）そこには、「戦い」があったことになる。実際の箱庭の作品では、文字通りの戦いがこれに対応するようである。

（注1）²⁰順向抑制と逆相抑制の二つの場合がある。

戦争場面、インデアンとカウボーイの戦いなどである。この段階が終ると次の統合の段階へと展開する。

(3) 統合の段階：心が揺れ動き、新しいものと古いものの戦い、新たな成長のための痛みなどを越えた段階がこれである。ここでは、自我の亀裂が回復する時であり、自我と自己との間に新しい関係が生じてくる時である。この関係にもとづいてペルソナが出来、新しい社会性の回復をみたことになる。症状は解消され、年齢相応の発達段階に達するなどの外的状態の変化が期待される。カルフはこの段階の作品に全体性の表現が多く、特にマンガラが多いことを指摘している。確かにそういう時期にはマンガラ的な作品や街や渡河といったテーマの作品が多いようである。統合の段階は終結を意味している。終結して治療が終ったとしても、そこでは、ひとつの均衡が生じ、安定しただけであり、以後の人生においては、内的、外的にかかわらず、新

しい刺激が生じ、その安定性を崩していく。治療後は一人でより高い段階の統合性^(注)へと向うのであるが、失敗すると再び治療者のもとへ帰ってくる。また、たとえ一人で統合への努力をするにしても、治療者がその人の中に内化¹⁷⁶⁾されて生きているのである。次に日本における箱庭の位置づけと現状について述べていきたい。

§ 3. 日本における箱庭療法の意味と現状

1965年に、河合が箱庭療法を紹介した当時の日本は、ロジャーズ (C. Rogers) による来談者中心療法のカウンセリングと遊戯療法が栄えた時であった。ロジャーズは患者のあるがままの姿を受けとめ、そのための治療者の三条件 (無条件の積極的関心、共感的理解、自己一致) を守ることを主張していた。このような状況の中へ箱庭療法は導入された。ロジャーズの条件自体は当然のこと

(注) このように絶え間なく、より高い段階の統合性へ向うことを、ユングは個性化の過程という。

であり、箱庭療法はこれを否定するものではなかった。この条件だけでは治療者は何が治療過程でおこっているのか理解できないので、それを補うような形で箱庭療法は導入されたと思う。例えば、遊戯療法にしても、子供とともに遊べばよいと当時は考えられており、日常の遊びとの区別がつかなかった。確かに子供の日常の遊びと遊戯室での遊びそのものに相違があるわけではない。しかし、遊戯療法では治療者がその遊びの意味を把握し、その意味にもとづいて遊びに発展過程があり、流れがあることを知って、子供と遊んでいるのである。箱庭療法はこの遊びの意味と発展過程を理解するため役立ったといえよう。日本においては、箱庭療法が導入されたことは、単に遊戯療法の一技法が入ったというだけでなく、もっと治療活動の意味や意義など、心理治療全体への影響があったといえよう。この点について精神分析の発展との関連からさらに述べていきたい。

日本に精神分析が紹介された1912年以來、大槻、野上、丸井、山村、古沢ら先駆者たちが日本の精神分析を発展させ、彼らの弟子の土居、前田、小此木らの分析医が精神分析家として世界の仲間入りをしてきている。²⁶⁸⁾古沢の「阿闍世コンプレックス」^(注)にみられるように、日本的なものが世界で認められてきている。しかし、精神分析が日本の土壌の中でどのように発展するかは今後の問題であり、箱庭療法はその発展の中のひとつの過渡的現象であるといえよう。これは背景にユング派の分析理論をもち、これ自体、ユングの夢、能動的想像などとともに無意識探求の手段であり、精神分析の一技法である。しかし、日本では、この療法は精神分析的観点と底にちなながらも、むしろあまりそれを強調せず、

(注) 古沢は、仏典の話とともに、母との葛藤をテーマとした「阿闍世コンプレックス」の概念を導入した。これは、小此木²⁶⁹⁾によると、「阿闍世コンプレックス」によって古沢は、罪悪感には、フロイトが指摘したエディプス・コンプレックスの中で発生する、処罰の恐怖に由来するものと、母子関係の中で発生する攻撃を向ける相手(母親)が実は愛の対象であり、愛を与えてくれている事実の自覚(ゆるしを介しての罪悪感)に由来するものが存在すると主張したと解説している。

ロジャーズ的に受容と重視して実施されている。また、こういう施行法をとったことが箱庭療法と日本で発展させることになったと思われる。解釈や転移などの精神分析的な知識、精神分析家としての訓練、資格などの諸条件が完備しない状態で、箱庭療法の存在を主張し、かつ精神分析的条件を整備していくためには、このような施行法が適していた。また、ここにこそ箱庭療法の意味があるといえる。

＜箱庭療法はこういう条件を整備していくための過渡的現象であるとともに、(一般に過渡的現象は消滅していくものだが)精神分析が日本に根づき、心理療法が発展し続ける中でも、これは、存在を主張できると思う。なぜなら、箱庭療法の特徴として「日本的であること」と分析の他の方法にはない「砂」を使用していること及び視覚像(立体像)として現実存在する玩具を使用しているからである。(箱庭療法の特徴については第二章第4節で述べる。)さらにカルフと日本との関係及び日本の

現状について以下で述べていきたい。

カルフは日本へ箱庭療法を指導するために今までに三度来日している。その間、カルフ自身に箱庭療法の扱いに変化がみられる。彼女の初期の考えは、3つの文献^{III, II2, II3)}に見られるが、その後の彼女の動きは、未発表による事例（研究会で示された事例）によるしかない。最近の考えは、一口に言って、日本的になってきたことである。例えば、初期には、動物の象徴的意味を詳しく考察していたが、最近では、全体の流れを重視し、象徴的解釈はあまり強調していない。ただ一貫している点は、作品とユングが主張する元型的な心像とみなし、神話や宗教的体験の過程^(註1)などとの関係をさらに強調していることである。カルフの変化は、カルフから日本へ導入された箱庭療法が逆に日本からカルフに多くの影響を与えたことがうかがえる。日本においては、逆に、分析的な考えの普及によることもあってか象

(註1) チベットの火の意味の過程と治療過程の対応など（1974年3月24日の研究会）

徹的な解釈にたよるものも出てきている。例
 えば、秋山⁵⁾による箱庭療法²³⁵⁾の紹介や大場、森
 田¹⁸⁹⁾などの事例に示される意味づけなどには大
 胆な解釈が示されてきている。

箱庭療法は初期の目的通り臨床場面で実施
 されていった。病院や、教育とも結びついて
 教育研究所などで実施されている。例えば、
 教育研究所の研究紀要とみとみると、豊中研
 究所¹⁸⁷⁾の紀要には、1967年から箱庭療法の研究
 や事例がみられるが、その他は1970年代に入
 ってから急増している。事例研究が中心であ
 るが、秋田教育研究所⁸⁵⁾の紀要とはじめ、四国²⁶⁷⁾、
 九州、北陸⁸⁵⁾、関東⁸⁸⁾などほぼ全国にわたって紀
 要発表がみられる。まだ紀要発表に至らない
 にしても、実際に使用している教育研究所は
 もっとあると思われる。^(注1) 数量的研究発表は学
 会発表^{225, 227~230)} (140, 142~145, 146) ^{2~4)}
 (周田、木村、秋山など) 及び卒論、
 修論の発表が中心になっている。事例だけで
 なく、研究面でも箱庭療法に関する研究が増

(注1) 北海道でも使用しているという私信がある。

えつつあるといえる。

以上ローエンフェルトから始まった箱庭療法が河合によって日本に導入され、河合を中心として普及していった現状までを概観したが次項では具体的な箱庭療法の施行法について紹介していきたい。

第2節 箱庭療法の実際

素材：これはローエンフェルトの世界技法と同様に、砂、玩具、箱からなる。箱はタテ×ヨコ×タカサが57×72×7cmの大きさである。その中に細かい砂を入れる。砂は色の区別、粗さの区別によって二種類用意することもある。^(注1)砂はトンネルや山が作れる程度に湿らせておくのが原則であるが、治療場面では湿った砂は触らない人もおり、臨機応変に対応している。玩具は、家、人、兵士、動物、

(注1) 藤井⁵⁾(1977年 日本心理学会)は2つの箱と高さをはかえておく使用法を公表している。

乗り物（自動車、飛行機、
般など）、木、石などの
ミニチュアである。（Fig
1-1 参照）

教示：「これらのおも
ちゃを使って、ここに何
か作って下さい」と言う。
大体はこれで了解できる
ようである。質問には、



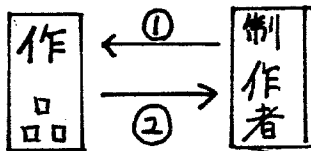
治療者側の指示や意図を Fig 1-1 箱庭療法玩具
表わさないように、「好きなように」と受容的
に答えるのが原則とする。もちろん禁止され
ているようなことは、「だめ」と制限する。我
々は水の使用を認めているが、水を禁止して
いる人もいる。

治療者は制作された作品を受容的に観察し
ている。観察の方法を絵画などの作品を鑑賞
するように味わうと表現してもよいであろう。
もちろん、上手下手などの評価を下すことでは
ない。制作後、若干の質問をする。例えば、

「作ってどんな感じでしたか」、「何か説明はありますか」と軽く制作者に尋ねる。これに對して、いろいろ物語ってくれる人もあれば、「別に」と言葉少なに終る人もいる。前者の場合は、研究に役立つが、筆者の経験では少ない。

さらに、「ここになかったおもちゃでほしいものはありますか」と聞くことがある。これは次回の発展の可能性を読みとろうとしてゐるのである。例えば、「池」と答える人がいる。「池」は砂と堀ることによって出来る。何か始めは池の玩具があると（実際は、今日玩具に噴水的なものや池もあるが）思っているらしい。それが次回などで堀ること気づく。砂を動かすことはそれだけ積極的な動きが出てきたのではないかと解釈したりするが、この動きは、すでに前回の質問の答えの中に内在化されており、今回予測が実証されたと考えられる。このようにこの質問は進行のために重要な役割を果たすことがある。しかも、そ

れ程制作者を当惑させる質問でもない。また、「この作品であなただの好きな場所はどこですか」とか「この作品にあなたがいるとすると、どこにいますか」などの質問をして、作品と制作者との間に制作後も相互作用をおこさせようとする。このような質問は、適宜するので決まった方法とはいえないが、制作者に強制しないように、軽く、かつ治療の発展を期待した方法である。制作者と作品との相互関係を図式化すると Fig 1-2 のようになる。



①は制作者が作品を作る過程である。この時、制作者の心の中には様々な考え、イメージが動いている。その中の集約されたものが作品となる。

②は作られた作品から制作者に働きかけ（反作用）があると思われる。例えば、砂の、気持ちいい、悪いなどの感触、作品からうける印象、自分が置いた玩具からの作用などであ

る。玩具については、例えば、思わず怪獣を置いて、それを見ていて怖ろしくなり、自分のもつ怖ろしい面あるいは母親への攻撃、うらみなどに気づくことなどがある。

こうして作られた作品を写真で記録しておく。真上からと斜上からの写真が便利である。また、スケッチをしておくのも便利である。というのは写真機の故障や隠れて写真ではみえない玩具がある場合もあるため。(付表1参照、記録用紙)これらは制作中に記録するのでなく、制作後、制作者がいなくなつてから写真をとるのを原則としている。これは、治療者が記録を余り気にすると第三者的になつて治療者としての態度が損なわれるからである。^(注)しかし、また、治療に専念しながらどこか客観的に観察しているものでもある。これをサリヴァン(H.S. Sullivan)²⁷⁵⁾は、「関与しつつ観察すること(participant observation)」と言っている。まさにサリヴァンの主張する

²⁷⁵⁾
^(注)山田²⁷⁹⁾は、「少年期のこころ」(中公新書、1978年)で、治療者が記録に気をとられ、敗れた例を示している。

態度であらう。

以上の手続きによって、箱庭療法は実施されるが、次章では、作品の見方、治療者との関係など、この療法の理論的側面について述べる。

第 2 章 箱庭療法の理論

第 1 節 治療者の態度及び作品の見方

§ 1. 治療者の態度

カルプ¹¹³⁾は箱庭療法の根底に、また箱庭を媒介とした患者と治療者との関係に、「母子一体性 (Mutter und Kind Einheit)」があるという。これは、初期の母子関係の重要性を強調したものであり、具体的には、「自由で、保護された空間」を作ることである。確かに子供は母親の暖かな、自分への関心を確認し、それに守られて成長していく。問題をもつ子供はこのような感情を体験することが少なく、まず親に抱かれる体験が必要なことは容易に推測される。ハーローの猿の実験⁷¹⁾で示された感觸の大切さ、毛の大切さがこれを裏づけていよう。こういう感情は、単に子を膝に抱く

ことから直接的に体験されるであろうが、心理療法では、むしろそういう直接性よりも、象徴的な体験及び自我を通しての体験を重視する。箱庭療法は、こういう体験を箱と砂と玩具を利用して可能にするものである。

この点とさらに説明するために、また、筆者の考えをまとめるために図式化したのが Fig 2-1 である。Fig 2-1 は、制作者と治療者と作品の三者関係を示している。

①の内容は治療者が制作者に対して、

母子一体感の場面を
作ろうとする動きで

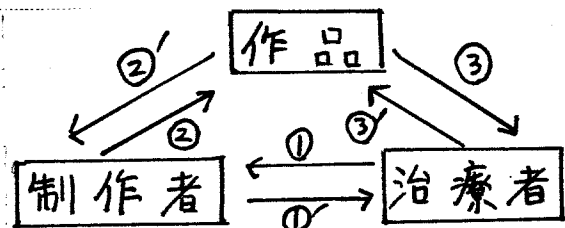


Fig 2-1. 制作者と治療者と作品の関係
ある。また、砂及び枠のある箱を使用する設定が、やはり母子一体感を制作者に働きかけていると思う。制作者からの作用は自己表現として①と②の中に示されている。即ち、①は直接的な治療者に対する甘えや拒否などの諸感情を含み、①の反作用的である。②は作品の制作による自己表現である。②'は Fig

1-2 で示したように、作品から制作者に働きかけてくる作用といえる。③は、作品から受ける治療者の印象、治療者の無意識への作品の働きかけ、コンプレックスの刺激などである。また、③'の内容は、治療者の印象、考え、感情、解釈などであり、これは作品を媒介にして、(②) 制作者への働きかけとなっておりと思う。ここに対面法による面接との違いがみられる。即ち、対面法では患者と治療者との二者関係であるが、箱庭療法は作品を「媒介」とすることで、三者関係になる。作品にとらわれると制作者の方を忘れてしまう否定面もあるが、作品が患者と治療者の関係の潤滑油にもなる。そして、作品の理解を通して、患者の心理状態も理解できる。治療者はこの三者関係全体を支えており、かつ枠をもつ箱という箱庭療法の特徴がそれを補っているといえよう。

カルフの考えから発して、少し大胆な考えを述べたが、要するに、受容的な態度で観察

することが治療者の態度といえよう。

§2. 作品の見方

作品は心像（イメージ）としてとらえる。心像については次節で述べるとして、具体的な作品の見方として、河合⁽²⁷⁾は、①全体的な布置、②主題、③象徴的理解、④系列的理解の4点をあげている。この4点について概説していきたい。

- ＜ 布置は constellation の訳語であり、ユング⁽¹⁰²⁾は「行動化のために外的な状況も、心的な過程も一致すること。ある方法で行動するように位置づけられること」と定義している。この定義にもとづいて、河合が述べる箱庭療法における全体的布置は広い意味で使われており、治療者と患者との出会いとも含んでいると思う。セラピーで患者と治療者が面接を始め、その中で起こってくることは、あたかも何かが生まれてくるようなものである。樋口⁽⁷⁶⁾（1978）は、「それは、卵が孵化するようだ」

と比喻し、「レトルトの中で化学変化がおこる
ようである」と表わしている。このように比
喩される中には、因果的に理解するだけでな
く、「そういう時期である」「そういう風に変
化するよう、エネルギーが注がれてきて、
そのようになりつつある」ことが根底では主
張されていると思う。即ち、共時的にも理解
していこうとする態度がみられる。これらと
大きくまとめて、「そのように布置していた」
＜「そのように配置されていた」となる。例え
ば、セウピーの中では、患者に恋人ができた
り、担任がさまざまな点で担任としての役割
以上のことを援助したりすることがある。こ
れらさまざまな出来ごとが治療の中で治療者
と患者のまわりで布置したと考えるのである。
箱庭療法でも、両者間に同様のことが起こる
が、さらに、箱庭の作品そのものにも同じ現
象が生じており、二重構造になると考えられ
る。実際には、箱の中に置かれた玩具のバラ
ンスと位置の観点からとらえられると思う。

この観点からみると、心理学の研究テーマとして、玩具の置かれた位置や数量や空間象徴の研究などがテーマとしてあげられよう。この研究に関しては、岡田康（1972）²²¹⁾や藤井（1976）⁵⁴⁾の論文がある。

主題の研究とは作品にはテーマがあり、どのようなテーマに基づいて作られているかを調べることである。各国ごとにテーマがある場合もあり、系列的にみると一貫して根底にひとつのテーマがある場合もあり、様々である。一般に、心理療法にはテーマがあるのと同様である。例えば、自我の形成や抑圧からの解放などである。箱庭療法では、エネルギーの流れ、工事中、戦い、死と再生、領域の分断などがある。これに関する研究のひとつとして第8章で「川・流れ・道の意味」ととりあげた。

象徴的理解とは、作品の象徴的な意味をみていこうとすることである。作品を心像としてとらえる以上、多少かれ少なかれ作品は象徴

化されており、象徴的理解が必要である。しかし、カルフとの対比で日本の特徴を述べた時に触れたように、日本では、図式的な象徴的理解におちいらないように注意が払われている。むしろそういう象徴的理解に疑問をもち、それがどの程度普遍性があり、妥当性があるかを確かめようとしている。ここに取組むべき研究課題があるように思う。これに関する研究のひとつとして、第6章で「動物イメージに関する研究を試みた。

系列的理解とは、一回まりの作品だけでなく、何回か連続して作られた作品をシリーズとして検討することである。一回まりの作品だけから、その作品の意味を明確にすることは困難な場合が多く、この時、連続して作られた作品をシリーズでみていくと、テーマが明確になり、作品の意味を把握することができることがある。一回まりの作品では、独断的になり易く、そういう欠点をも補うために、シリーズで検討するのである。

以上4点の作品の見方を概説し、それらと関係のある研究テーマについて述べた。

第2節 箱庭療法の作品と無意識

箱庭療法の作品をどのように考えているかと「無意識と自己表象」「イメージとしての箱庭療法の作品」「治療者の作品に与える影響」の三点から述べていきたい。

§1. 無意識と自己表象

無意識について、ユング⁽¹⁰²⁾は「無意識とは意識的でない、つまり、はっきりとそれと知覚されるような形では自我とつながりを持っていない、あらゆる心的内容ないし心的過程の総称である」と定義する。さらに、^(102, 105)「無意識は意識と相補的であるが、それなりの活動性、自律性もある」と述べている。厳密な意味で無意識のこのような特徴を実証することはできない。実証した時点で、それは意識の領域

に入ってしまうからである。ユングが言うように無意識とは意識されていないものとしか定義できない。すると意識とは何かという問題もあるが、ここではユング⁽¹⁰²⁾の定義に従い。

「意識とはもろもろの心的内容が自我に対してつながりを持ち、かつそれがつながりとして自我に感じられる場合、すなわち、心的内容と自我とのつながりをささえる機能ないしは活動という」と考える。「意識とは」「無意識とは」の問題はこれ以上触れず、むしろ「無意識と呼ばざるを得ないものが、経験上人間の心に存在する。それは夢やヒステリーのケースや催眠などで間接的に示される、意識されていらないもの」と考え、フロイトやユングがいうように、意識の底に無意識があるという心理構造の仮説を認め、実際的に対処していくことにする。ユングは心の構造を Fig 2-2 のように考えていたと思う。ユングはフロイトと異なつて、無意識に個人的無意識と集合的無意識があると仮定する。ユング⁽¹⁰²⁾

によれば個人的無意識とは「個人的存在が取得したもののすべて—忘却されたもの、抑圧されたもの、識関下で知覚され、考えられ、感じられたこと—に関する無意

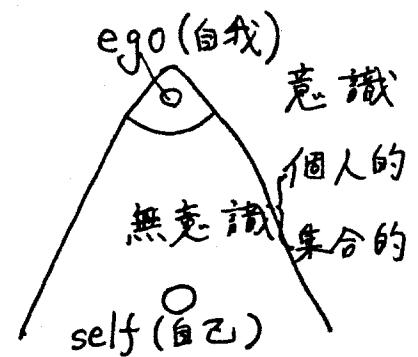


Fig2-2 ユングの心の構造

識」であり、集合的無意識とは「個人が取得したものに由来せず、…遺伝的な頭脳構造に由来している。…もろもろの神話的連関、主題、像」と考えられている。

ところで、箱庭療法の作品が作られてくる過程では次のように意識と無意識との間に、微妙な相互作用があると思う。まず意識的に何を作るか考える。その作るもの（テーマ）に従って制作を始めるが、制作過程で、「池を掘ろうか」「さらに木を加えようか」「人を置こうか」などと作りつつある作品から反作用を受け、意識的にその作品を修飾し、訂正していく。ところが、作り終った時、制作者が意識していなかったものが出てくること

ある。制作過程を意識していたようで、いつの間にか気づかないことがあっていたことになる。例えば、

Fig 2-3 では、制作者は「私はキリスト信者なので、キリストに関係のあるものを作ろう」と思って作り始め



Fig 2-3 ある女性の作品

たが、このようになるとは思っていなかったと言い、治療者の「家が4軒で橋が4個…」の指摘には、「全然気づかなかった」と答えている。この制作者は意識的にこの作品を作っているようで、どこかで無意識からも影響を受けていたと考えるを得ない。これは制作中にいつの間にか無意識からの影響を受けたものであるが、次に無意識にもう少し直接的に働きかけていると思われる例を示す。

Fig 2-4 は、ファンタジーグループ^{76,268)}で試みられているイメージ涌出法の刺激の一例であ

る。これは強烈な刺激を与えたり、もの静かな刺激を与えたりして、その強弱、動静、愉快－不愉快などの組合せにより、無意識に刺激を与え、これによって、無意識から、イメージが湧き出てくるとを期待している。このような操作の底



Fig2-4 イメージ湧出法の刺激

にも治療者を中心としたグループの受容的な雰囲気的地盤があるのはいうまでもない。このように意図的に無意識へ働きかけ



Fig2-4 イメージ湧出法の刺激

ることもある。いずれにせよ、無意識とのかかわりから何かが出てくると思われる。ところで、創造に関するテーマは、一般心理学では、知能との関係から研究されて、報告され

てきている。また、A. ストロー²⁷²⁾は、創造に関する性格特徴や創造のための条件を解明している。しかし、ここでは無意識に創造的なものが内包されているというユングの考え方をとる。「創造」することは、意識をいかに弱め、無意識的なものから、そのエネルギーを意識が把握するかにかかっていると思う。すべての人間が無意識をもっている以上、あらゆる人にこの作業は可能であり、あらゆる人が創造的である。ここでいう「創造」とは、芸術作品とか世のためになる発明、発見といった創造だけでなく、その人なりの創造であり、それは世の中でその個人が唯一であるがために、独創性あるものとして創造的であるということである。「創造」とはその人となりを示すものであり、「自己表象」である。

自己表象は、意識を弱め、無意識とかかわる時に、無意識から生じてくる。「無意識とかかわる時」とは、心理治療が「鳥が卵を孵化させるインキュベーション」や「レトリトで

化学変化をおこさせるために、適当な火で熱し続ける」と比喻されるように、治療者と患者との間に、心的エネルギーが相互に作用し合い、ある期間保存され、その時がくるまで暖められた時である。その時、無意識から自己表象はイメージ化され、意識へ投影されてくる。これこそ無意識からの創造である。箱庭療法の作品は、このような自己表象である。

要するに、各個人は無意識をもち、その無意識から創造的な自己表象が条件が整えば現われてくる。「条件が整えば」とは、意識と無意識との関係と無意識の働きと待つことの二点であり、背後に人間関係が存在することと強調した。

§2. イメージとしての箱庭療法の作品

イメージとは心像と訳され、今日様々の分野で重視され、定義され、使用されている。例えば、岡野²³³⁾は「イメージは様々の研究分野で使われているが、それぞれ違った定義であ

る。… イメージのことばの意味はそれほどは、まじりしていない。“感じ”でとらえることにイメージのことばを使うことが多い」と述べている。ここでは、ユング⁽¹⁰²⁾が言う、「イメージとは、外的客体の心的模像を意味するのではなく、外的客体の知覚とは間接のつながりしか持たない空想像」と定義し、また、「無意識の独立的活動の所産である」に従う。無意識そのものは出現することではなく（出現すれば意識となる）無意識はイメージ化されて何か外的な対象に投影される。このようなイメージは無意識的なことを象徴化している。即ち、イメージは無意識が主張したことを象徴として含んでおり、それを意識が把握した時イメージとなる。換言すれば、イメージとして浮ぶことは意識が無意識の一部分をとらえたことであり、イメージは無意識と意識との接点に生ずるものと言える。ここに、外的な静止した事物とちがう性質があり、イメージの特徴がある。この特徴を河合⁽¹²⁶⁾は、1.具象性

2. 集約性、3. 直接性の三点から考察している。筆者はこれに、4. 力動性を付加したいと思う。以下で、この4点の特徴について説明する。

具象性とは、イメージは言葉よりも具体的な事物によって示されることと意味する。例えば、「渦にのみこまれる」という夢は、自分が身動き出来ない感じや足を引っぱられて何かにのみこまれる感じなどと「渦」で具体的に示したといえる。

集約性とは、イメージはいく重にも重なった意味を含んでいることである。例えば、「赤いブタ」の夢は、「赤い」は感情や本能を示すかもしれない、また、「ブタ」は鈍感さを意味するかもしれない、「赤いブタ」は存在し得ないものであり、何かちぐはぐさを示すかもしれない。ロールシャッハテストの第8図の反応と関係があるかもしれないなどの様々な意味が重なっている。

直接性は、例えば、「父親を殺したい気持」と言葉で説明するよりも、夢の中で「父親を

殺した」夢として、イメージで示した方が、その強烈さ、その破壊性、父親への憎しみなどがより直接的に伝わってくることを意味する。

力動性とは、イメージは常に動いているものであり、変化し続けるものであることを意味する。例えば、「球が燃えている」という夢は、球が燃えている写真のような平面的で静止したものではなく炎がゆれ動き、何かかのみこみ燃やしつくしてしまうなどの動きと変化を意味するのである。箱庭療法の場合、制作し終った作品を記録する。したがって、それまでの過程を重視しているとはいえ、最後の作品にとらわれがちである。そこには、静止感が出てくる。実際は、作品はイメージであり、力動的であることを軽視しないことが重要である。

このようにイメージには、具象性、集約性、直接性、力動性の4特徴がある。従って、箱庭療法の作品もこのような特徴をもったもの

としてとらえていく必要がある。

§3. 治療者の作品に与える影響について
箱庭療法^(注1)の作品が作られる時、それに関与している人（一般には治療者）がいることが重要である。この点に関する研究として、境と渡辺^(注1)の研究がある。境（1977）⁽²⁵⁵⁾は治療者がいることは制作する意欲及び次回^(注1)の制作態度に影響が大きいことを明らかにしている。実際に治療者が作品にどのような影響を与えているかと具体的に把握することは困難であり、不可能とさえいえるぐらいである。しかし、治療である以上治療者の影響が大きいことは明白である。作品に治療者が影響を与えていると思われる点は次の4点である。

第1点は、既述した Fig 2-1 である。これは治療者の一般的な働きが図示され、治療者－制作者の相互関係が示されている。

第2点は、三木⁽¹⁷⁶⁾の「自己へ道」という著書

(注1) 渡辺の1977年度 関西学院大学大学院修士課程論文 未発表

とあげたい。この著書に示された作品は教育分析の夢をもとに、教育分析中に作られた作品である。夢は確かにその人がみるものであり、その人の無意識から出てくるものである。それはその人のものであって、そこに他人が割り込むことは不可能である。しかし、誰がその夢の報告を聞くかで夢の発展の仕方や内容が異なると思われる。三木の報告を他の分析家が聞くことは不可能であり、一回きりのもので、夢の展開の仕方を実証的に比較することはできない。この夢をもとにした作品に分析家の影響を考^(注)えるのは当然であろう。この場合、分析家は大部分制作中にそこには居なかったようである。境の研究と少し矛盾するようだが、これは人間関係ができあがっているからで、制作の場に分析家がいるかいないかは問題にならなかったためである。治療

(注) 分析家が夢を患者にみせたとさえ言いたくなるような場合もある。この点こそ、分析家の力量が問われるところでもある。もっとも、お利にも治療者の要因が入ると害も大きくなり、この辺のかねあいが心理療法の一番むづかしいところといえよう。逆転移の問題になる。

中にはまれにこういうことが起こる。例えば、母親と面接している時、子供に箱庭の作品を作ってもらう場合は、治療者がその場に居なくとも、居るのと同じ関係が維持できると考えている。このように、作品は治療者との相互作用の中で作られているものである。三木⁽⁷⁶⁾は、「私が一人で箱庭を作った時には、箱庭の箱そのものが既に『自由であると同時に保護された一つのある空間』だったことを感じます。たしかに、セラピストの存在はその場になかった。私の箱庭を見る他者はどこにいたのか？それは、離れている分析者の存在がその場にまで働いていたというならそうでしょう。しかし、なお、私の心の深みで独自に働いていたものがあつたのだと思います。」^(注)と述べている。

第3点は、秋山²⁾と岡田²³⁰⁾の幼稚園児の玩具の使用数の報告が相当異なることである。これ

(注) 三木自身の自己の働きを言っているのだろう。分析家が内在化されているといってもいいと思う。

は場面設定などの他の要因の影響もあるかもしれないが、秋山と岡田の人格の影響もあるのではないだろうか。

第4点は、作品によって表現されたものが治療者にどの程度理解されているかに関してである。治療者はすべてを理解できるわけではない。特に精神薄弱児や器質障害児や自閉的な子供の作品は理解が困難な場合が多い。このように治療者は作品と制作者の意図通りそのまま全部を理解しているわけではない。そこには二者間に「ずれ」がある。むしろ、「ずれる」のが当然ともいえよう。その「ずれ」をお互いに意識して、それをどのように少なくするか、即ち、その「ずれ」を少しでも少なくしようと治療者がいろいろ試みるところに治療の推進力があるともいえる。「ずれ」の程度や治療者の「ずれ」を少なくしようとする具体的な動きが、何人とかの影響を制作者に、作品に与えているのではないだろうか。

このように箱庭療法の作品は、治療者との

人間関係に支えられ、共同作品であると言いたい程である。しかし、直接的関与を避けており、制作者の独自性は失なわれない。

第3節 箱庭療法の治療的要因

箱庭療法も遊戯療法の一技法である以上、遊戯療法の原理に基づいて治療がすすむのであり、他の遊びと箱庭療法が並用されることもある。ここでは箱庭療法の治療要因を考察する。このテーマは大きな問題であり、本論文すべてが多かれ少なかれこのテーマと関係しており、すでにいろいろ述べてきたものであり、重複することもあるが、まとめる意味からも次の4点を特に問題とした。これらは相互に関連しており、独立しているものではない。

第1は、治療的人間関係である。心理療法は、暖かな、信頼できる人間関係（ラポール）

の基に成り立っている。箱庭療法も例外でなく、治療者と患者との治療的人間関係が根底に横たわっている。カルフはこの関係を母・子一体性という。「母・子一体性」という治療者と患者の関係が箱庭を作る原動力にもなるし、作品を作ることによって、母・子一体性がさらに深化され、この感情が患者に体験されるという相互関係になっている。問題を持つ子供に限らず大人の患者も母親との関係に何らかの障害をもち、成長を阻害されてきたのであるから、母親との関係の改善、すなわち、暖かな母性性と患者に再体験させることが心理治療の大きな目的になっている。箱庭療法では、箱という枠と砂と治療的人間関係によって、他の心理療法よりもより安定した、暖かい母性の体験が可能であると思う。

第二は、カタルシス（浄化）である。箱庭療法では、砂という素材と上述した母子一体性という治療者の暖かい態度から、今まで抑圧されていたものが発散されるようになる。

この時、無意識内に抑圧されていたものがイメージを通して、外界へ表現され、意識化されてくる。ここにひとつの治療的働きがある。

第3は、自己表現である。箱庭を制作することは無意識にある創造性を發揮していくことであり、それは自己表象である。自分を十分に表現できることは心理的な障害を克服することである。なぜなら、心理的障害があることは、自分を表現できない、發揮できないことと深い関係があるから。箱庭療法では一回きり、一度だけ自己表現するのではなく、連続して制作していくその過程が大切な治療への歩みである。ユングがいう個性化の過程と段階を追って表現していくことである。カルフがこの過程を三段階に分け、解説していることはすでに述べた。その過程とどのように考えようとも、無意識を含めて自分を表現し続けることは治療が可能であり、その人が十分に生かされ、その人固有の道を進むことになる。このためには、すでに述べた治療者

の絶え間のない、暖かい患者への関心が必要なのである。この関心の中で自己表現が可能となる。

第4は、自己治癒力である。これは成長力とか自己実現への力とも呼ばれているものである。「自己」を表現できることは、人間が誰しも持っている自己治癒力の働きを促すことである。人間には、よりよい状態へ回復する力、成長する力がそなわっていると考える。「この力を信じることができるか否か」は心理治療者の根本である。それは単に樂觀主義になることではない。この力を実感として体験的に知ることが必要である。なぜなら、治療していると、「この成長力、自己治癒力は幻にすぎないのではないか」と疑わざるを得ないことが多々起こり、治療者がそれに耐えられるか否かが、治療がすすむか否かを決定するようなものだからである。箱庭療法では、カルフのいう「自由で、保護された空間」の中で、制作していくにつれて、自己治癒力が

發揮されてくると思う。

箱庭療法は心理療法のひとつの技法であり、構成的遊戯療法のひとつであり、治癒機制は根本的には、他の心理療法と同じものである。ただ、箱庭療法のもつ特徴（砂と箱という枠）がより効果的な面をもつといえよう。

第4節 箱庭療法の特徴

非言語的コミュニケーション：心理療法は無意識的なものと意識化することと定義してもよいと思う。この意識化の過程は言語化することによって可能であるとされてきた。確かに言語化することは大切な心理療法の方法であり、過程である。しかし、思春期の中・高校生などには、言葉で表現することが非常に困難なことが多い。このような場合、言語によらず、イメージやゼスチュアや表情で伝達することがしばしばおこなわれる。この点箱

庭の作品はすでに述べたようにイメージとして考えられており、言葉で示し得ないことと作品によって、イメージとして示すとともに、その作品を視覚でとらえることによって意識化が可能になり得るのである。言葉が余り発達していない子どもや問題が複雑で言語化の困難な中、高校生の治療に箱庭療法は利用できるといえよう。

対象：箱庭療法の対象年令の低限は3才といわれている。もっとも実際には2才7ヶ月の子が制作した例もあるが^(注)、概して、3才以上の子供に制作は可能である。上限は北沢⁽¹⁹⁷⁷⁾⁽¹⁹⁹⁾の9才であろう。また、箱庭療法はどのような子供を対象にするのが特に有効であろうか。今までの経験では症状を特定することはできず、あらゆる子に適用し得ると思う。内的なものを表現しようとするすべての人に適しているといえる。教育研究所の紀要は事例が多いが、示された事例ではあらゆる児童

(注) 岡田康の発表ケースの男が何度も制作した。

が対象になり得ることがうかがえる。「抑圧された子供の事例」「不振児」「特殊学級に入るこ
とをすすめられた子」「緘黙児」などである。
今までに研究会などでも様々の事例が報告さ
れており、特定の対象はない。しかし、「言葉
を話さない子」「おとなしい子」「緘黙児」「言語
障害児」などの子は、自分自身と十分に外的
世界で発揮できていないために、この箱庭と
作ることによって自己表現ができ、何か劇的な展開
と起こすことがある。また、Bowyer²⁰⁾や Gillie-
s^{21,62)}らは言語障害児への適用例を報告している
ことから、強いていえば、このような子供に
適しているといえよう。

日本人の特性との関係：河合¹²⁹⁾は日本へ箱庭
療法を導入する時、「日本人の直観性と感覚と
に適している」と考えたと述べている。確か
に箱庭療法が10年余りで驚異的に普及したの
は日本人に合ったものだったからであろう。
内的に豊かなものを持ちながら、それを言語
化せず、非言語的に伝達し、また、言語化す

る時も、「わび」とか「さび」などと枯れた表現をするところにも日本人の特性がある。この特性のひとつの現われとして、いわゆる「箱庭」があった。この「箱庭」は、室町時代の庭園文化の発達とともに「箱の中に庭を作る」遊びとして庶民の中に定着していった歴史をもつ。²¹⁸⁾このような地盤のもとに、この技法は広く受け入れられていったと考えられる。この「箱庭」は、「日本玩具集」(1917)²⁸¹⁾の中

にみられる。これは1910年にドイツで開催された万国衛生展覧会に紹介された日本玩具について説明したものであり、「箱庭」が



Fig2-5 日本古来の箱庭道具

昔からの日本の玩具であり、日本の特性を示すもののひとつとして西洋に紹介されていたことを示している。また、ローエンフェルトは世界技法を説明する時、「日本の庭園を思い浮

べて下さい」と言ったという。これは外国人にとってどこかで箱庭療法と日本の庭園とは一致していた表われであろう。この療法は日本的であるといえる。

治療関係確立の媒介としての役割：制作者と作品、制作者と治療者と作品の関係については、Fig 1-2とFig 2-1で説明した。作品を作ることで自身体にこのような働きがあり、作品を作ることで治療が進むと考えている。一方、作っていくうちに、制作者と治療者の治療的人間関係が促進されたり、確立されたりする。この療法はこのように治療関係を確立する媒介となる面もある。治療的人間関係が出来て、それに基づいて作品が制作されるのが前提であり、一見主客転倒するようだが、治療的人間関係に層があると考えるとこの矛盾は解決される。ある関係で作品が作られるとその作ることとを（作品をも）媒介として、さらに深い人間関係へとすすむと考えている。一例をあげて、治療的人間関係確立のための

媒介としての意味を明らかにしたい。荒井^(注1)のケースで次のようなことがあった。「中学二年生の学校恐怖症の男子生徒とのカウンセリングで、患者があまり話をしないで、沈黙が続いた時、箱庭に誘った。患者は一人で箱庭の作品を作るのも抵抗するような生徒であった。しかも、弟がついて来ており、弟も一緒に面接室に入室を許可していたので、^(注2)患者一人で作品を作ることができないと治療者は考え、三人がひとつづつ玩具を置くことを提案した。そして玩具を置く順番をジャンケンで決める。たまたま①弟→治療者→患者の順と②弟→患者→治療者の順で玩具を置いて、2個の作品を作った。ここで、治療者は少し意識的だが、患者が置いたゾウに対してカメを対面に置いて、患者の様子を見た。」これは、治療者が意

(注1) 堺市教育研究所所員の事例 未発表。

(注2) たまたまこういうことがおこる。断身として弟を拒否するのでもひとつの方法である。学校恐怖症など家の力動性全体を問題にしなければならぬ時などに、弟の入室を認めている。この場合も家族全員の問題と考えたため弟の入室を許可したのであろう。

図的に患者に話しかけることとゾウとカメの対面を示そうとしたのである。言葉で「関係としましょう」と話しかけても萎縮させてしまうような感じの患者に、玩具同志で対面させたのである。これも患者をドキりとさせるものではあろうが、患者は知らぬ顔もできる自由とがまだある点で話しかけるよりも患者への圧力は少ないと思われる。また、分裂病の治療の場合、枠づけが必要であり、治療¹⁹⁾の舞台として箱庭が役立つことと加藤・吉本が指摘している。このように治療関係を作っていくための媒介として、箱庭療法は利用できる。

グループでの利用：ここではこの療法のグループでの利用法を示したい。例えば、インテークの時、親子間の力動性とみるために、親子で箱庭の作品を作ってもらうのである。親子間の日常の関係がそのまま示されることがある。いつも子供に指図している母親は、「これを置きなさい」と指示して、子供に玩具

と手渡し、置き場所まで指定する。子供の自発的な動きや発想は殺されてしまっている。また、前述の荒井の例では、患者と弟と治療者がお互いに他の人が置いた玩具を意識しながら置いていた。このことはグループの力動性を調べるために利用できそうである。また、荒井のケースで患者は二回とも枯木を置き、弟は二回ともへびを置いたことは、各メンバーの特徴もグループの作品の中にでも出現してくることを示しており、興味深い。さらに七名のメンバーでひとつの作品を作ったのが

Fig 2-6 と Fig 2-7 である。^(注) 各メンバーは少なくとも一個以上の玩具を置くことを教示され、すでに置かれた玩具を大切にす



Fig 2-6 グループでの箱庭の作品

(注) 各メンバーは一回だけ制作するチャンスが与えられる。荒井の方は三人が順々に何度も置くことができた。

ることが条件であ
った。これはお互
いを尊重し、受容
とは何かなどを体
験すること、治
療者の訓練に役立
つのではないだろ



Fig 2-7 グループでの箱庭の作品

うか。このようなグループでの利用も可能で
ある。

玩具の使用：箱庭療法は素材にミニチュアの玩具を使用しているのが特徴のひとつである。これは、子供の興味を呼び起こし、制作しやすくしている。子供にとって玩具は一番好ましい仲間であるからである。ローエンフェルトが指摘したように、この作品が子供の内的世界を投影しているのも玩具の働きによるからであろう。既製の玩具を置くことで作品を制作していくことは、絵画、粘土創作などとちがって、上手下手の能力差が入りにくい利点がある。これは防衛を少なくし、制作

し易くしていると思われる。学生が治療者としての訓練のために作った後の感想で、「だんだんひきずり込まれ、童話的な世界に夢中になった」と言っていることなども、玩具が制作者を空想的な世界へ誘い込んでいるのだろう。また、玩具は象徴的意味が投影されやすいと思われる⁴⁴⁾。このような玩具で作られた作品は、三次元の立体像であり、視覚像としてとらえられる。自分が制作した作品を見ることによつて、そこから制作者は反作用的に刺激を受ける。夢や遊びとちがつてそこに作品として残るためにその刺激は強烈である。作品が残ることは、治療後それを分析すること、遊戯療法の過程研究にも役立つ。

砂：遊戯療法の砂場遊びや粘土遊び以外に、心理療法で実際に砂を使用する技法はない。夢分析、自由連想、イメージ療法などどれも実際に、直接に接触感に訴えるものではない。箱庭療法ではこの点砂を使用し、触覚に働きかけ、砂の感触を生に体験できる。これは身

体に直接働きかけているといえる。心と身体は相互に関係があり、心理療法は心から働きかける面が強いが砂によって身体の方からも働きかけることが出来るのは大きな利点である。砂に関する研究には、Bowyer¹⁹⁾の論文がある。彼女が砂に触れることはホールシャッフハのM反応（平面的な、静止した図版に運動をみる反応）と関係深いこと、施設児は砂に触れることが少ないこととを指摘している。M反応は、与えられた場面に変化をつけ、積極的に動き、内的な豊かさを持っていることを意味しており、砂に触れることは、そのような基盤があることを意味するのだろう。また、ウォルトマン²³⁾は「砂は安定していて、子供の身体をささえ、砂の中に置かれたもののささえになっている」と言っているのもこれらと裏づけるようである。

その他：箱庭療法を治療的に実施するか、診断的に使用するかによって二つの流れができたことはすでに述べた。治療的に使用した

場合も、その診断性はある程度認められることは岡田康（1969）^{219）}が明らかにしている。また、系列的に理解するとか、ビューラー的に使用すれば診断性は高まろう。しかし、やはり診断とか人格構造を明らかにするためには、ロールシャッハ・テスト、TAT、P-Fスタディなどの人格検査の方がより有効である。箱庭療法は一回きりの作品では余り診断的なことを明らかにできない、また、その人格構造などと説明することは困難である。

箱庭療法の作品が制作者の内的な世界のイメージとして把握されることはすでに述べた。しかし、既製の玩具を使用するために、意識的にも作ることは可能である。岡田康（1972）^{222）}で示した例のように、「お寺の伽藍配置を作りました」という作品は意識的、模倣的に制作されたものであり、それがその人独自のイメージであるとはいえない。そうすること自体にも自分を出したくない防衛的なその人自身の特徴が出ているともいえるが、それはやは

り意識的な作品であり、歪められたものである。ひとつの技法は万能ではなく欠点もある。この欠点を補ういくことが必要であり、長所をのばすことが大切である。日本ではやはり箱庭療法¹⁶⁶⁾の長所である治療面を重点的に生かしていく方法がよいであろう。

第5節 文献研究

§1. 世界技法に関する文献：日本の箱庭療法は、カルフの流れとくんでいるが、その発端である世界技法に関する論文を概説する。

ローエンフェルト¹⁶⁶⁾は、1939年に世界技法に関する論文を発表した。ここでは、彼女自身が世界技法を遊戯療法の一技法として使用し始めたのは、1929年以來であること、彼女もウェルズの小説の中に出てくるという床遊びからヒントを得たことなど世界技法ができてきたまでの歴史的背景を示している。さらに

「転移や解釈を必要とせず、こども自身が情緒や精神の状態を表現し、直接に子どもの精神に接触し得、記録をとり得るもの」として創作したことを作品の例を示しながら解説している。また、カルヴァ (G. Calver) やクラインらがこの方法に対して質疑討論を行っている。これをさらに具体的に、わかりやすく紹介したのが1950年の論文である。

クレッチマー (E. Kretschmer)⁽¹⁵⁸⁾ は、「体格と性格」の中で、男性は外の世界へ志向し、女性は内の世界へ志向することと、世界技法の作品を示して分析している。

ビューラーの1952年の論文⁽²²⁾は、世界技法がアメリカでは、検査法のひとつとして使用されていることを示すものである。この論文は、世界テストを五か国の子供に実施し、その国民性を明らかにしている。例えば、オーストリアは作品では攻撃性が高く、図式的、萎縮的であり、実際は非攻撃的で、親切な国民である。英国は空虚的で、閉鎖的で内的一貫性

(inner coherence) がみられる。ノルウエーは空虚的、非攻撃的などとあげている。

アレン (R. M. Allen)⁷⁾ は、世界技法と他の人格検査と同じように紹介し、ビューラーのサイン、世界テストの発展について記述している。それによると、表現された世界と攻撃性 (A)、空虚性 (E)、歪曲性 (CDR)、象徴性 (S) の4個のサインに分けて記号化し、それぞれに三段階と設定している^(注)。例えば、戦争場面は 1A, 動物の噛み合いは A, 砂嵐、自然界の猛威は A の順で攻撃性が高いとした。また、玩具使用数5以下を 1E、玩具使用数が5種類以下を E などと記号化した。またビューラーから、ボルガー、フィッシャーによる世界技法の変遷について記述している。

(注) 各サインは A: Aggressive worlds 攻撃的世界, E: Empty worlds 空虚な世界, S: Symbolic Arrangements 象徴的配列, CDR: Distorted worlds 歪曲した世界を示し CDR は C: Closed worlds 閉じられた世界, D: Disarranged worlds 無秩序な世界, R: Rigid worlds 著縮した世界に分けられる。

アイクロフ (L. F. W. Eickloff 1952)³⁸⁾ は「Dreams in Sand」の論文で、夢との関係及び砂の上に夢的な空想的な世界が展開されることと紹介している。言葉が十分でない子供にとって、内的世界を投影でき、自己表現ができ、カタルシス効果があるなどの砂箱の重要性と指摘している。また、人格神経症的な13才の男性の事例を示し、作品を6つあげている。

バウヤー (R. Bowyer)²⁰⁾ は1970年に世界技法の紹介から人格診断の側面、治療的側面、リサーチの側面など多方面での利用法を示している著書と監修した。これで見ると世界技法と箱庭療法は大差がないことがわかる。

ギルス (J. Gills 1975)⁶²⁾ の論文は、紹介的であり、言葉の不自由な子に世界技法の有効性を強調しているだけである。

アイクロフ、ギルス、バウヤーらのやり方は、ビューラーと違って、治療的な面にも重点をおきながら、また、カルフとは趣を異に

しながら実施されていることがうかがえる。

日本においては、岡田洋²³²⁾(1962)が、正常者の作品を攻撃的世界、空虚な世界、閉鎖的世界、無秩序な世界に分類し、これらの世界の年齢別出現頻度、知能程度からみた世界構成の種類を示し、発達的な変化を明らかにしている。さらに、情緒障害児の特徴を各サインによって得ようとする診断的な面を調べている。山下³¹⁰⁾(1964)の論文では、ビューラーの分析に含まれている主観的な面を除くべく、分析基準確立の過程を中心に、症例、教示の差異などから人格診断テストとしての効用性を探究している。即ち、岡田洋よりも、より基礎的な面から資料を積重ねようとしているといえる。箱庭療法よりも早くからこのような論文があったことは注目すべきことである。大石²³⁸⁾(1977)は、精神遅滞児の箱庭の表現とビューラー的方法で主観を導入してとらえようとしている。

§2. 箱庭療法に関する文献：ここでは世界技法から発展した箱庭療法に関する論文をレビューする。

箱庭療法は、河合⁽¹²⁴⁾(1966)によって、京都市のカウンセリングセンター紀要で紹介されたのが始まりである。ここでは、河合は箱庭療法をスイスでカルフより教えるを受け、1965年に日本に導入したことを述べ、この技法を実際に治療に使って得た経験と見通しを中心に、一般的な方法なども紹介しており、これは文字どおりの入門書である。この中で、治療的な面に重点を置いて、箱庭療法を利用していくことが強調されている。世界技法の研究がすでに日本でも1960年頃から始まっていたのにもかかわらず、あまり発展をみなかった点がここで補われたといえよう。さらに、世界技法が発展しなかったのは、この技法において作られた作品が制作者の内的な世界を示すものとして把握するという取組みが日本ではまだできていなかったためであろう。そ

の点、河合が正式の分析家の資格をもって、ユング分析心理学の考えと徐々にはあるが明確にしていったことが、世界技法とちがって箱庭療法を発展させた大きな原因である。また、この論文は、遊戯療法の発展、心理治療の発展をみるに際しても、日本流に解釈されてしまっていた心理治療の基礎を明らかにし、さらにイメージの導入のきっかけとなったといえよう。

カルフは、1966年に彼女の経験をもとにして、二つの論文を発表している。一つは、“Sandspiel”¹¹³⁾として、彼女の施行法と事例をまとめた本であり、箱庭療法の第一の基本文献といえよう。今ひとつは、“The Archetype as a Healing Factor”¹¹²⁾である。ここにおいてカルフは、治療的要因の決定的なものとして、自己と元型を考え、さらに心の自己と自我の関係があることを明確にしようとしている。彼女の著書が出版された時、日本においてすでに箱庭療法が紹介されていたことは、

箱庭が級女自身の活躍を追いぬく勢いで日本では普及していたことを示すといえよう。なお、カルフの1957年の論文¹¹⁾は、ウサギとキツネの象徴的意味づけを述べたものであり、級女が象徴的理解を重視していたことを示す論文である。しかし、前述したように、級女自身も変化して、現在では象徴解釈には余りこだわらなくなっている。

河合¹²⁾は1969年に、4年間の経験とまとめ、入門書として監修した著書と出版している。この中では、一般的な技法の紹介、理論的背景、経験的に得られた箱庭の諸相のまとめ、さらに事例によって、実際に利用されている様子と示した。

さらに、森田、武田¹³⁾が、1969年にカルフの理論の紹介と兼ねながら、箱庭療法について言及している。

秋山⁵⁾(1970)は、ユング派の観点から箱庭を紹介している。級女は、象徴的解釈や意味づけを大胆に述べ、ユングの考えに忠実であ

ろうとしている。箱庭療法の作品と神話やお伽話との関連などと少々突飛に思われるほど関係づけながら説明している。この表徴的な意味づけの妥当性と普遍性がどこまで確かめられるかは、箱庭の今後の発展にかかわっている。

河合⁽¹³⁰⁾ (1971) は、再び入門講座として箱庭を紹介している。この論文では、質問と応答という形式で、実際にこの技法を実施するに際してぶつかる諸問題を理屈抜きで、明解に示している。反面、理論的な裏づけをより深く試みようとし、イメージ論、自己治癒の力に関しても論議を展開している。

教育研究所の研究紀要による箱庭の紹介と事例は、名古屋⁽⁸⁹⁾、徳島⁽²⁶⁷⁾などにみられる。

§3. 事例に関する文献：箱庭療法は、この技法だけによる治療というより、遊戯療法の中で、絵画療法などと並行して治療に使用され、こうした事例の発表は増加してきてい

る。箱庭療法は、治療との関係から考えられてきたために、病院、教育研究所、児童相談所などの実際の治療機関で実施されることが多い。したがって、正式に発表されていない事例は多数にのぼっている。^(注1)事例発表から判断して、特定の症例に対してだけ適用されているというより、あらゆる症例に対して実施されている。

山^{306,307,308)}中は、精神科医の立場から、精神分裂病をはじめ、小児神経症、情緒障害、ダウン症候群に適用した事例を示している。また、西²¹⁵⁾村、中村、浪花^{200,201)}らは、京都市カウンセリングセンター紀要の中で、登校拒否児を中心に事例を示している。森田、武田¹⁸⁷⁾らは、緘黙児や登校拒否児の事例を通して、カイロス^(注2)(Kairos)とか、カルフが箱庭の作品にみようと
する自己像、マンガラなどが治療過程の大切なできごとを示すものとして実証しようと試

(注1) 箱庭セミナー、研究会での事例提供者は増加している。

(注2) 時計によって測定できる時間と区別して、思いがけない「時」や自然にふと思い浮んだ「時」などの「時」という。

みている。安村^{312, 313)}は精神薄弱児に箱庭と実施した事例を報告している。

教育研究所の紀要を調べると、横浜市教育センター研究紀要100号⁵⁸⁾、1974年には登校拒否児の小6男子の事例が、新潟県立教育センター研究報告6号²⁵⁹⁾、1976年には緘黙の小1男子の事例や登校拒否児の小6男子の事例などがある。ほぼ全国的に発表されており、1970年代から増えてきている。

加藤、吉本¹¹⁹⁾(1975)は、思春期の分裂病の事例を発表し、この年代の子及び分裂病によって箱庭の箱の枠の大切さを強調している。木村¹⁴⁵⁾(1975)は、自閉症児に、箱庭と実施した例を報告している。坪内²⁹²⁾(1976)は、少年院の家出少女の事例を報告している。非行の少年たちにも箱庭が実施されていることがわかる。青木⁸⁾(1976)は、強迫神経症の子供のケースを報告し、作品の見方として鳥瞰図的態度と虫瞰図的態度が必要だと主張している。

このような事例報告は、治療が進んでいく

様子を示し、治療過程の反芻に利用され、治療者の成長と過程研究に貢献している。

§4. 基礎的研究に関する文献：箱庭療法の基礎的な資料を集めるための研究は数少ない。

岡田康 (1969)²¹⁹⁾ は、作品の印象を重視し、SD法を使って、作品の類型化を試み、6類型を抽出している。それらの類型と異常群との関係から診断性にも言及している。三宅 (1969)¹⁸⁰⁾ は、家族像と動物のイメージによってとらえようとして、ライオンは父親像、ウマは兄像、ネズミは妹像などの結果を示している。岩堂、奈比川 (1970)⁹⁶⁾ は、普通児と精神薄弱児との作品の表現の諸相を所要時間、玩具数、テーマなどの側面から考察し、その差違を明らかにしている。例えば、IQ 60以上から明確なテーマにもとづく作品となり、またIQ 50~60のものでもCAが11才以上なら、明確なテーマが出てくることなどを報告して

いる。さらに、木村 (1971)¹³⁸⁾ は、知的優秀児の作品の分析し、知的な要因が作品にどのように現われるかと、たとえば、独創的な、豊かな作品が多いことなどを報告している。岡田康 (1972)²²¹⁾ は、領域に焦点をあて、空間象徴理論として知られている空間象徴図式と箱庭との対応を考察している。木村 (1972)¹³⁹⁾ は、幼児の箱庭の作品を分析して、幼児の作品は、3才～4才は砂遊び的な傾向があり、5才からまとまりをみせることなどを明らかにした。

秋山による幼児の作品の分析、藤井 (1976)⁵³ による子供の箱庭表現とその変化 (修論)、境 (1977)²⁵⁴⁾ の治療者に関する研究など数多く発表されてきている。

第 3 章 遊 戲 療 法

第 1 節 遊戯療法について

§ 1. 遊戯療法とは：遊戯療法とは遊ぶを媒介として治療する心理療法の一様である。すなわち、遊ぶのもつ特性を生かし、子供の性格の歪みや問題行動を治療する技法と定義づけられる。児童精神分析とか児童心理分析などとよばれる場合もあるが、遊戯療法はこれらの総称である。

遊戯療法は原則として1週間に1回、45分～60分のペースで実施される。必要に応じて、2回、3回と行なうこともあるが、子供の集中度や緊張の持続度を考えると、1回の時間は60分が限度である。遊戯療法には子供が遊ぶ遊戯治療室と玩具が必要である。遊戯室は普通20m²ぐらいの大きさで、明るく、快的な

感じと与える部屋がよい。窓がラスは少々の力では割れない硬質のものがよく、床は、砂、水などの掃除に便利のように、水はけのよい素材が望ましい。必要な設備は、玩具を入れる収納棚、砂場、水道（流し）、絵を書くための机と椅子、黒（白）板などである。日本では畳のあるコーナーを設けることも必要である。また、一方視鏡（one side mirror）で観察できるようにしておくとも便利である。玩具は、子供が自由に使用し、いろいろの目的に使用されるもので、危険のない、丈夫なものがよい。玩具はさまざまな目的のために多くの種類が用意されるのが望ましい。たとえば、可塑性ある粘土、積木、砂、自己表現のために絵具、画用紙、クレヨン、楽器、箱庭療法一式、攻撃的な感情表現に鉄砲、ピストル、刀、パンチキック、体を動かすためにランボリン、ジャンピング、野球用具、大きなトラック、汽車、関係づけのために電話、ボール、家族関係や対人関係を表現しやすい

人形類、おもちゃと道具、また、トランプ、将棋、ゲーム類などである。しかし、あまりにも多すぎる玩具は、かえって子供を混乱させ、目移りさせることにもなるので配慮が必要である。また、子供の年令や障害の程度に応じて、玩具を増減させたり、ある特定の子供にその子供のための玩具を加えるなど、子供が自分をより上手に表現できるような自由度が必要とされる。この遊戯室と玩具を使って、治療がどうして可能なのかも次に述べる。

§2. 遊戯療法 of 原理：遊戯療法 of 原理は「遊びのもつ特性、及び子供と治療者との人間関係によつて、子供の自己治療力が発揮される」という考えに集約される。遊びを治療の媒介にするが、遊ぶこと自体も治療になっている。それは、遊びが浄化作用 (catharsis) を持ち、退行を起しやすく、自己表現の手段となりうるなどの特徴を持っているからである。

遊戯療法では、遊びを見守っている治療者の存在が大切である。子供は、大人の治療者の前で遊ぶことによって、日頃口やかましく注意され、怖い人と思っていた大人に意外と友好的な面もあることを知る。こうした中で子供と治療者の間に交流が起こる。大人が暖かく見守ってくれているという体験を通して、子供は抑圧していた感情を発散し、社会や大人に対して抱いていた不信感を和らげる。そのとき、子供が持っている自から成長していく力が発揮されてくる。これを自己治癒の力という。遊びはそのための媒介であり、潤滑油であるともいえる。

治療者の立場から考えると、治療者の仕事は、つぎの4点に要約される。①遊ぶ場を提供すること。しかもそこは自由に保護された、暖かい雰囲気のある空間であるように構成すること、②子供と一緒に遊び、子供を受容すること、③子供の遊びの意味を確認し、それを伝えること、④子供の自己治癒力を信じること

である。遊びの意味の確認は、遊戯室での遊びと日常場面での遊びとの違いを示すために大切である。

子供が大人に遊んでもらうことは、遊戯室以外でも経験していることである。その場合でも、自然に子供は癒され、成長する。しかし、それは治療とはいえない。治療という以上は、そうした遊びの意味を治療者が知り、子供に伝える過程が必要である。その手段は必ずしも言語化によるとは限らない。子供の遊びの発展過程を、見通し、その意味を伝えるところに専門としての遊戯療法があるといえる。遊戯療法は、一般に次のような過程を経ると考えられている。

§3. 治療過程：治療過程をどのように理解するかは人によって異なるが、大体3期に分けて考えられている。(1)初期：この時期は、治療への導入と治療的人間関係の成立とが重要な仕事である。治療者の助けとなるのは、

玩具と遊戯室の魅力である。子供は玩具には目がないし、自由な保護された遊戯室は魅力ある場である。これらによって、治療への動機づけがなされ、治療者との間にラポールが確立されるのである。(2)中期：この時期は種々の出来事が起こり、千差万別である。発散、攻撃、対決、創造的作品などの遊びを通して、否定的な感情の表出、攻撃、アンビバレント、創造と再構成などがなされる時期である。(3)後期：治療が終結へと収束していく時期である。問題行動が解消されたかどうかと確かめながら別れていく時である。子供は、自分が元気になったことを示し、感謝の気持ちと治療者に示す遊びをするものである。この三段階を経て治療はすすむが次に遊戯療法の歴史をみておきたい。

第2節 遊戯療法の発展

遊びは大昔から何らかの形で成長のために利用されてきたが、それらはここでいう遊戯療法ではない。遊戯療法の始まりはS.フロイト⁴⁹⁾が精神分析を唱え、A.フロイト、M.クライン、M.ローエンフェルトらによって、子供のための心理治療として独自の形が整い、専門性をもった時点からである。1909年に、フロイト⁵¹⁾は「ハンス少年」^{183, 287)}の事例で、精神分析的接近が子供にも可能であることを示した。同じ頃、ユング¹⁰⁶⁾も1910年に、アンナという少女の事例で子供への精神分析的接近の可能なことを示していた。しかし、二つの事例はともに父親を通して治療がなされており、精神分析の理論をそのまま子供に應用しただけであった。その後、1930年前後に、A.フロイト、クライン、ローエンフェルトらは、問題が意識化されておらず、言語表現が十分でない子

供と対象とする場合の課題を克服して、遊戯療法を確立させた。A.フロイト^(47, 48)は技法上精神分析を子供用に変形して、応用しようとし、^(151, 152, 153)クラインは、A.フロイトと同じ立場に立ちながら遊びを重視し、遊びを自由連想と同じように扱っていった。この二人が精神分析の枠から抜け切れないのに対して、ローエンフェルト^(115, 116)は、構成的遊戯療法と名づけて、子供の創造性に注目し、「何かを作らせる」ことにより治療を行なおうとした。これは世界技法として発展し、二つの流れに分離した。一つは、アメリカでビューラーによって診断を重視した世界テストとなり、今一つは、スイスでM.カルフによって、ユング心理学が加味され、箱庭療法となった。箱庭療法はわが国には河合によって1965年に導入された。一方、患者の成長の力を信頼することと強調したロジャーズのクライエント中心療法の考えのもとに、遊戯療法を実践しているのはアクスラインらである。また治療者と患者の治療

的人間関係と重視した関係療法の考えと子供の治療に実施したのはアレン、ムスターカスらである。なお、遊戯療法の変遷をまとめるために、²⁸⁶⁾ 鑑による児童心理療法の系譜を転載したのが Fig 3-1 である。

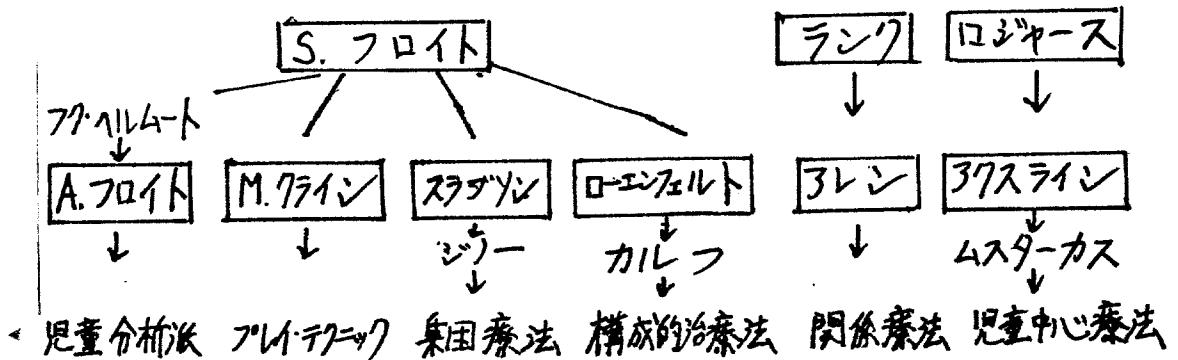


Fig 3-1. 児童心理療法の系譜 (鑑 幹八郎より転載)

なお、わが国の遊戯療法の現状は、児童中心療法および関係療法的接近法をとるものが大半であり、分析的な考えを加味しながら、独自の方法を模索しつつあるといえる。次に少し遊びについて述べる。

第3節 遊びについて

§1. 遊びの学説

遊戯療法は遊びを媒介にして治療することであると定義したが、遊びについては古来からいろいろな人びとによって学説が展開されている。これらの学説は遊びを完全にいい尽くしているとはいえない。例えば、梅本³⁰⁰⁾は、ピアジェ (J. Piaget) とサットン・スミス (B. Sutton-Smith) との遊びに関する論争を示し、特定の学説によらず、遊びは子供の成長に大切であることを強調する。^(注)

これらの学説は遊びのもつ一面はいい当てあり、遊びの特徴を種々の面から浮彫りに

(注) 梅本³⁰⁰⁾は、遊びが子供の成長に役立つ条件として、①自己の強さと②自我の統制の限界の学習をあげる。遊びは既知化してしまった環境の中で、自発的変化を求め、小混乱をおこすものである。しかし、その時、小混乱を収めるだけの自己の強さが必要であり、自我の統制の限界を知る学習が必要であって、「限界の学習」を子供が学べるように親や教育者が環境を整えることを強調している。

してくれろので、それらの説を簡単に紹介する。

(a) 余剰勢力説：H. スペンサーによって唱えられたもので、遊びは生活のための活動に要した残りの力が注がれるとするもの。確かに余力がないときには遊びはあまり発展しないが、いくら余力がなくとも、そうした生活の中で遊びが生まれてくることがある。また逆に遊びがそうした生活を支えるエネルギーを供給しているとも考えることもできる。

(b) 生活準備説：K. グロースによって唱えられたもので、人間は不完全なので、成長のために遊びを通して生活形態を学ぶとした。

(c) 浄化説：H. A. カークの説で、遊びによって日常生活に不必要なものを発散させると主張した。

(d) 休養説：S. M. ラザルスが唱え、仕事の緊張からの解放と遊びの目的と考えた。

その他、E. D. ミチエルの自己表現説や W. マクドゥーガルの競争本能説などがある。また

J. ホイジンガー⁸²⁾は人間を「ホモ・ルーデンス」としてとらえ、遊びこそ人間の本質であると主張した。ピアジェ²⁴³⁾は子供の発達に合わせて遊び論を展開した。

これらのくびとによって遊びの特徴は言いつくされている。子供は遊びによって緊張を解消し、休養し、創造し、成長の糧を得、エネルギー源をえる。これらの遊びの特徴を生かして、遊戯療法が行なわれるのである。つぎに遊戯療法に出現する遊びについて述べる。

⑤ 遊戯療法に現われる遊び

遊びの分類は子供の発達を考慮しながらいろいろ試みられている。たとえば、機能的遊び、構成的遊び、感覚的遊び、想像的遊びなどである。ここでは、遊戯療法で実際に出現しやすい具体的な遊びについて説明する。

(a) ボール遊び：これはキャッチボールやボール当てなどボールを使つての遊びである。バトミントン、スカイピンポン、卓球などの形をとることもある。この遊びの意味は子供

と治療者との関係づけに加えて、合理的かつ統制された攻撃性の表現であると思われる。⁽⁴⁴⁾ これらによって、身体的エネルギーの発散がおのずから行なわれることも見逃せない。また勝つことによる優越感の満足もあろう。

(b)粘土遊び：これは粘土で何か創造的なものを作る事が目的であるが、その創造過程も重要である。すなわち、粘土を柔らかくするために、ちぎったり、まるめたり、たたいたり、こねたりする。こうした中で、攻撃性が十分発揮され、粘土の感触が味わわれる。⁽⁷³⁾ 粘土はこねると柔らかくなるとともに暖かくなる。暖かみと味わい、感触を楽しみ、想像力を働かせて何かを作り、自己表現してゆくのである。

(c)フィンガー・ペインティング⁽²¹⁰⁾：これは筆を使うのではなく、絵具を直接に指につけて絵を描く指絵である。この特徴はR.F.ショウによると禁止の強い子の持を和らげ、よごしたい欲求の満足をかなえ、空想を刺激する

という。抑圧していた感情の発散のために最も効果のある一技法である。

(d) 絵・箱庭：これは絵を描いたり、箱庭を作ったりすることである。これらは遊戯療法の一技法であるが、絵画療法、箱庭療法として独立して考えられることもある。これらに類似のものとしては、情景テスト、村テスト、モザイク・テストなどがあげられる。これらの作品は作る人の内的なイメージの表現であり、無意識的なものの投影であると考えられる。すなわち、作品が作られることは、無意識的なものがイメージとして把握されることであり、それが意識化されることに治療的効果があると考えられるのである。さらに、治療者は内的世界のイメージである作品を媒介にして、エネルギーの流れを考える。すなわち、作品が作られることによって、エネルギーは内から外へ流出し、作られた作品から刺激を受けて、外から内へ流入するエネルギーのフィードバックが子供の成長のために役立つ。

つことも見逃せぬ点であると考えらる。

(e)その他：遊戯治療室でなされる遊びは、水まき、砂遊び、ままごと遊び、積木、レール遊び、チャンバラ、ボクシングなど種々さまざまである。遊戯療法ではこれらの意味を知ることが大切である。

第1部理論編の第1章～3章では、箱庭療法の理論的側面について述べてきた。第2部では、箱庭療法とはどういうものであるかと確かめるための研究について述べていく。

第 II 部

基礎的研究編

第 4 章 作品の分析 — 一年令差を中心として —

第 1 節 問題と目的

箱庭療法は本来、心理治療の一技法として治療的效果を求めて実施される技法であるが、箱庭療法の作品がどういうものであるかを明確にするために、本章では正常な群の 1 回限りの作品を年令差に焦点づけながら分析する。

箱庭の作品は個人の作品であり、個人的な面が強く出てくるために、「個」を重視して系列的に分析していくのが本質である。しかし、個人的なニュアンスの強いものであり、個性が強調されればされる程、その基に基礎的、典型的な作品を踏えておく必要がある。また、箱庭療法を理解し、心理療法の手段として、科学性の高いものにするためには、そ

の個人に共通したものと見い出すことも大切である。各個人の作品となんらかの基準に照らすことができれば、治療者にとっても心強いであろうし、治療を進める力にもなるだろう。

箱庭療法⁽¹³⁹⁾の作品の基礎的資料は、最近漸々に増えてきてはいるが、数少ない。例えば、木村らは、幼児（3～5才児）と知能遅滞児との比較、小学生（4～6年生）と高知能児との比較⁽¹³⁸⁾などを通して、正常児の作品の特徴を明らかにしている。また、秋山^(33,4)は幼稚園児の作品の特徴を詳しく分析し、報告している。藤井⁽⁵³⁾は、非行少年と施設収容児と正常な小学生（6年生）と中学生（1、2年生）の作品を比較分析し、例えば、小学校群は砂を掘る、中学校群は砂に触れない、空白領域が少ない、非行少年は左下隅の領域へ固執し、空白領域が多い、施設児は左側の領域を多く使うなどの特徴を明らかにしている。これらの研究と重複するところもあるが、対象は幼児から大

学生まで広げて、横断的に基礎的資料を収集した。具体的な方法は次の通りである。

第2節 方法

主なる実施方法は次の通りである。

(1) 制作者：制作者の内訳は Table 4-1 に示す 253 名である。幼群は T 幼稚園年長組 (5才～6才)、小3群は T 小学校3年生^(注) (8才～9才)、小6群は T 小学校6年生 (11才～12才)、中2群は T 中学校2年生 (13才～14才)、高群は T 高校生 (15才～18才)、大群は K 大学生 (18才～28才) と示す。なお大群の女子は人数が少なく、分析対象から除いた。

Table 4-1. 被験者

性別 群	男	女	計
幼群	17	12	29
小3群	17	12	29
小6群	18	13	31
中2群	23	18	41
高群	37	45	82
大群	41		41
計	153	100	253

数が少なく、分析対象から除いた。

(注) 小学校3年生、6年生、中学校2年生としたのは特に理由があるわけではない。一応幼児から大人までの代表と考えている。ただ発達加速現象で、女子の初潮が3～4年生になってきていること、ロレシャッハで、3年生が特異な存在になっている飯田の報告などは考慮しなければならない。

(2)実施場所：幼群はT幼稚園の職員室の片隅、小3、小6、中2、高群はT大学の遊戯室及び面接室、大群はK大学の遊戯室で制作した。

(3)用具：箱庭療法の用具一式（砂箱、玩具、多数など）

(4)日時：1968年6月～8月、1974年7月～9月、1975年7月～9月

(5)治療者：K（女性、小3群、中2群、高群の一部）、O（男性）の二名が治療者として制作に立ち合った。^(注1)大部分はO（筆者）が担当した。

(6)教示：緊張を和らげながら、「この箱に、これらのおもちゃを使て、何か作ててください」と言う。質問については、「好きなように」と受容的に答えるのを原則とする。

(7)記録：付表2の記録用紙^(注2)に記入する。初登時間（教示してから作り始めるまでに要し

(注1) 制作者の都合などにより、一部筆者以外の治療者が立ち合わざるを得なかった。

(注2) 記録用紙は少しづつ変化したため、高群・大群の初登時間は記録漏れとなった。

に時間)。所要時間(制作し終るまでに要した時間)。高さ(平らな地面から最高の玩具までの高さ)。低さ(どれくらい砂を掘ったかの深さ)などを記入する。制作後、作者に感想をきいたり、「どの辺が好きか」「もし作品中に自分がいるとしたら、どこに思うか」などの若干の質問をする。また、作品は写真にとり、カラスライドにして、保存する。

第3節 結果と考察

§1. 作品の種々の分析

(1) 時間: Table 4-2は所要時間と初発時間とを示している。所要時間は高群が一番

Table 4-2 所要時間と初発時間

時間 \ 群	幼群	小3群	小6群	中2群	高群	大群
	男, 女	男, 女	男, 女	男, 女	男, 女	男, 女
所要時間	18.88'	18.68	12.00	16.55	23.74	23.34
	20.06', 17.48'	16.73, 21.46	11.43, 12.78	14.41, 19.29	24.86, 22.81	23.34
初発時間	48.66"	41.83	33.61	39.37		
	35.65", 62.08"	44.41, 38.17	34.56, 32.31	33.44, 46.94		

長く、24分程かかり、以下大群、幼群、小3

群、中2群、小6群と時間がかかっている。大体20分前後の所要時間で制作されることが明らかになった。また、小6群が他群と比べて12分と非常に短いのが特徴的である。t-検定で所要時間の群間の有意差を調べたところ、Table 4-3を得た。小6群が各群と有意に所要時間が短い。また高群が、幼群、小3群、中2群と比べ、有意に所要時間が長かった。大群は中2群に比べ有意に大群の方が所要時間が長い。小6群の例外はあるにしても、中2群と高群の間で、所要時間に変化があり、中2群より年令が高くなると、所要時間の平均は23分程である。

(22.132/143)

木村、岩堂によると、所要時間は、中学生(23.2') > 大学生(22.7') > 幼児(22.5') > 小学生(18.2') の順である。今回の結果より、全体に所要時間は

Table 4-3 所要時間のt-検定の結果

幼群	>	小6群
	**	
小3群	>	小6群
	**	
中2群	>	小6群
	*	
高群	>	小6群

大群	>	小6群

高群	>	幼群
	*	
高群	>	小3群
	*	
高群	>	中2群
	**	
大群	>	中2群
	**	
* 5% ** 1% *** 0.1%水準		

やや長くなっており、中学生群が長い。概して同じ傾向といえる。

初発時間とみると、幼群が49秒程と一番長く、以下、小3群、中2群、小6群と続く。(Table 4-2参照) 中2群は小6群より長い。大体年令とともに初発時間は短くなってきているようだ。一番短い小6群の女子が32秒かかっており、作り始めるのに30秒以上必要であることがわかる。有意差検定では群間に差はみられなかった。

ロールシャッハ・テストでは、初発反応時間や総反応時間が記録され、反応数との関係から意味づけられている。^(注1) 片口(1960)⁽¹¹⁾ は「初発反応時間は、正常成人の場合、普通30秒以下であり、これがあまり大になるときは心的機能の低下、防衛的、警戒的態度、情緒的抑制やうつ状態などと疑って見る必要がある。」と述べている。箱庭療法の初発時間は制

(注1) 箱庭療法では $\frac{\text{所要時間}}{\text{使用玩具数}}$ がこれに対応するかもしれないが、今回は触れない。

作への心の準備、構想のための時間などとも意味するであろうから、30秒以上は必要と思われる。しかし余りに長い初発時間は、片口が指摘するロールシャッハの意味と共通するかもしれない。

Table 4-3は平均値を示したが、分散が大きいので、レンジ Table 4-4 所要時間と初発時間のレンジ

を示すと Table 4-4 になる。年令がいく
程、所要時間のレ
ンジは大きくなる感
じであり、これは個
人差が年令とともに
顕著になっていくこ
とのひとつのサイン
であろう。所要時間
の短い作品は玩具数
も少なく、簡単に作
られた感じである。
この単調さは知的水

時間		所要時間	初発時間
幼 群	男	7'54" - 33'55"	3" - 3'35"
	女	5'41" - 28'37"	3" - 4'30"
小 3 群	男	3'55" - 30'10"	1" - 2'50"
	女	8'57" - 44'20"	3" - 1'50"
小 6 群	男	2'25" - 34'45"	5" - 2'30"
	女	2'50" - 35'40"	4" - 1'25"
中 2 群	男	2' - 37'22"	1" - 2'30"
	女	6'26" - 33'34"	7" - 2'30"
高 群	男	11' - 54'25"	
	女	7'15" - 64'20"	
大 群	男	5' - 60'	
	女		

準が低いただけではなく、むしろ担任によ
って高知能と判断されたものもあった。例え
ば Fig 4-1 は中エ群の男子の作品で、初発時
間5秒、所要時間
は4分5秒、玩具
数13個である。担
任の話では、「積
極性はなく、自分
を出してこない子



であるが、知能は Fig 4-1 所要時間の短い作品
高い」ということである。初発時間は早く、
機敏さを示し、作品からうける感じは、こじ
んまりと、まとまりすぎており、萎縮してい
る感じで、緊張が高そうである。担任の話と
印象とは一致しており、思春期に入っている
中学生らしい作品ともいえる。

(エ) 立体感: Table 4-5 は高さとは、
砂に接触した人数を示している。高群が 24.72
cm で最高で、以下大群、中エ群、小6群、小

Table 4-5 立体感の高さ及び低さと砂接触

群	幼群	小3群	小6群	中2群	高群	大群
立体感	男, 女	男, 女	男, 女	男, 女	男, 女	男, 女
高さ	15.14	17.79	19.82	20.80	24.72	21.15
cm	15.59, 14.50	13.53, 23.83	18.94, 21.04	22.30, 18.89	23.92, 25.38	21.15
低さ	0.57	0.38	1.10	0.59	1.26	2.55
cm	0.35, 0.88	0.59, 0.08	1.89, 0	0.67, 0.47	1.54, 1.02	2.55
砂	10人(34.5%)	7(24.1)	11(35.5)	8(19.5)	29(35.4)	21(51.2)
人数	5 5	5 2	9 2	4 4	16 13	21
(%)	(29.4), (41.7)	(29.4), (16.7)	(50.0), (5.4)	(17.4), (22.2)	(43.2), (28.9)	(51.2)

3群、幼群の順になっている。高群と大群が逆転しているだけで、年令とともに高く上へ盛りあがった作品になることがわかる。t検定で群間の有意差検定をしたところ、Table 4-6を得た。幼群は小3群以外の群と有意に低い作品を制作している。また、高群は大群以外の群と比べ、有意に高い作品を作っている。

性差をみると、小3群の男子と女子の間に1%水準($t=3.43$)で有意に女子の方が高い作品を作り、他群では、男女間に有意

小6群	>	幼群
中2群	>	幼群
高群	>	幼群
大群	>	幼群
高群	>	小3群
高群	>	小6群
高群	>	中2群
*5% **1% ***0.1%水準		

差はないことがわかった。発達のみにみても、小3群の3年生は、身長、体重などの身体面でも男女差が出てくる時であり、また、初潮の年令も今日、3年生へ4年生に下がってきており、小3群の女子は思春期に入っているといえる。高さの点で、これらと対応するかのようになり、男女差があり、小3群の女子が小6群の女子に似ているのは興味深い。

堀り下げる程度は、大群が2.55cmが一番深く、以下高群、小6群、中2群、幼群、小3群となっている。概して、年令が進む程堀り下げる感じであるが、中2群と小3群が堀らないのが特徴的である。最低でも7cmの堀り下げなので、砂に触れたか否かで整理してみると、大群が21人(51.2%)で半数以上が砂に触れており、以下、小6群、高群、幼群、小3群、中2群の順である。なお、砂に触れる人数に差があるかどうかを検定した結果($df=5$, $\chi^2=9.236$)で、10%水準で傾向はみられるが、有意差はなかった。群間と比べると、大群と

小3群が5%水準 ($\chi^2=5.191$) で、大群と中2群が1%水準 ($\chi^2=9.016$) で、大群が有意に多く砂に触れる。中群と高群は10%水準 ($\chi^2=3.266$) で、高群が砂に触れるのが多い傾向があった。他の群間の比較では有意な差はなかった。

性差をみると、小6群では、男子が9人 (50.0%) で女子が2人 (15.4%) であり、中2群では、男子が4人 (17.4%) で女子が4人 (22.2%) であり、この間で男女の砂に触れる比率が逆転している。中2群が砂に触れなくなるのは男子が砂に触れなくなるからである。女子の砂接触の減少は、小6群にみられ、女子の方が早い時期に砂に触れなくなっている。高群の男子が16人 (43.2%) と急増しているのも特徴的である。

Bowyer (1970)¹⁹⁾ は、「砂に触れることはロールシャッハのM反応 (静止した図版に運動をみる) と好応し、内的な豊かさを示す」と述べている。小6群の女子、中2群の男子は、内的な豊かさが示し得ないのかもしれない。

たしかに Bowyer が述べるように、砂に触れ、
堀ること、与えられた場面を、変化させて
いることになるが、砂は「暖かさ」とも関係
していると思う。高群男子の作品（Fig 4-26 参
照）では、砂を丁寧に堀り、砂を愛撫してい
るような感じもあった。この制作者は、写真
部で活躍しており、芸術家的なところがあり、
創造的で内的豊かさを示すともいえるが、「暖
かさ」を求めていたようにも思えた。治療が
すすんで砂に初めて触れられた例もあり、暖
かさ、即ち母性性との関係を考えざるを得な
いのである。もちろん、もっと事例を集積し
なければ断定的なことはいえない。

(3) 玩具の使用数と種類：Table 4-7 は
玩具の使用数と種類を示している。玩具の種
類は5種類に分類した。使用数の最も多い群
は大群（45.3 個）であった。以下、幼群、高
群、中2群、小3群、小6群となっている。
小6群が（22.9 個）と他群より相当少なくな

Table 4-7 玩具の使用数と種類

群 玩具	幼群	小3群	小6群	中2群	高群	大群
総数	41.2	35.8	22.9	36.3	41.1	45.3
人間類	4.6 (11.2%)	11.0 (30.7)	5.5 (23.8)	2.7 (7.5)	5.4 (13.2)	5.8 (12.9)
動物類	13.1 (31.9%)	4.9 (13.8)	6.2 (27.1)	10.6 (29.1)	8.6 (20.8)	6.4 (14.1)
植物類	2.2 (5.4%)	4.2 (11.8)	5.4 (23.4)	10.9 (29.9)	13.6 (33.0)	17.0 (37.6)
建造物類	7.6 (18.5%)	8.0 (22.3)	4.1 (17.8)	10.1 (27.9)	12.4 (30.2)	12.6 (27.9)
乗り物類	13.6 (33.0%)	7.6 (21.3)	1.8 (7.8)	2.0 (5.6)	1.2 (2.8)	3.4 (7.5)

くなっている。群間のt検定をした結果、Table 4-8を得た。小6群が他群と比べ有意に使用玩具数が少ない。他群間には有意差はみられず、小6群が他群と比べ玩具の使用数で特異的である。ビューラー²²⁾(1952)の世界テストの研究では、正常群は50個以上と述べられているが、大群の結果はその値に近く、他群は相当少なくなっている。幼児については、木村¹⁴⁰⁾(1972)は40.7個と報告しており、本結果と一致するが、秋山²⁾(1974)は男子52.

幼群 > 小6群	**
小3群 > 小6群	**
中2群 > 小6群	**
高群 > 小6群	***
大群 > 小6群	**
*5% **1% ***0.1% 水準	

7個、女子47.2個と少し多い結果を報告している。また、小学生、中学生、大学生については、木村(1971、^{138, 143}1974)が49.8個、52.8個、48個とやや多い結果を報告している。

使用玩具の種類の変化を図式化したのが、Fig 4-2である。人間類は7.5%~20.7%の

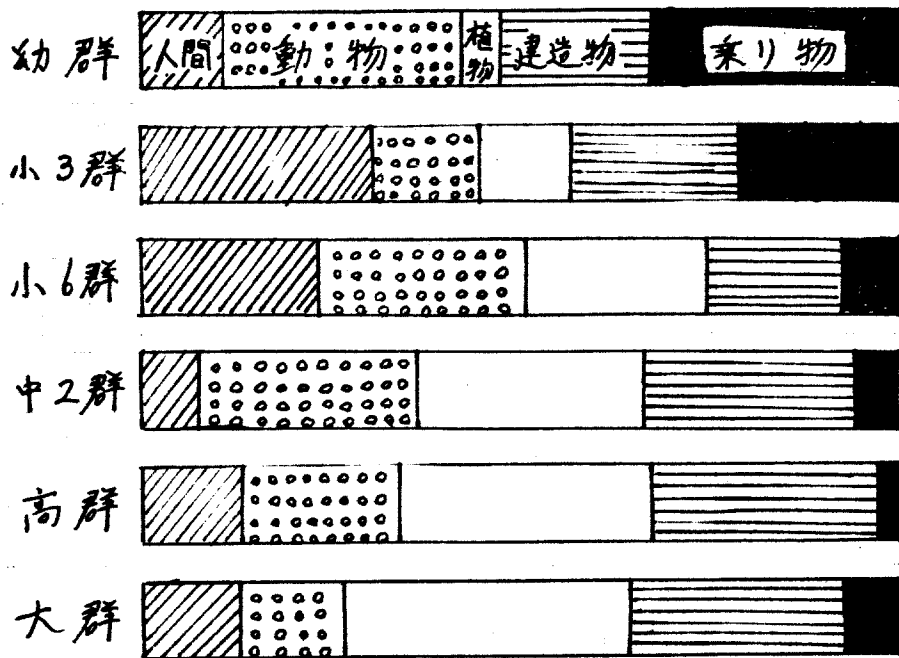


Fig 4-2. 玩具の種類

間で使用されており、小3群、小6群で増え、中2群で減るが、高群と大群は10%強でほぼ同じである。群間での変化は著しい。動物類

は13.8%～31.9%の間で使用されており、幼群⁽¹⁴³⁾と中ス群と小6群が多い。木村(1974)は中学生の動物類が10.5%に減ずると報告しているが、本研究では、29.1%と増加しており、くい違う結果であった。中ス群の男女の内訳をみると、男子が非常に多く使用しており、(男子38.1%、女子12.2%、Table 4-9 参照)このために、中ス群全体の動物使用が多くなったと思われる。本研究で動物を多く使用した作品の一例を示したのがFig 4-3 (26'13"、117個^(注))である。この作品は、箱の中央に家置き、その周りを動物がとりまいている動物マングラになっている。この制作者について、担任は「知的に高く、人と交わりにくい子」と話している。



動物が衝動的、

Fig 4-3 動物を多く使用した作品

(注) (26'13", 117個)は所定時間が26分13秒で、使用玩具数が117個を示す。

本能的なものを示すと考えるなら、動物が使用されるのは、本能的なものが表面に現われてきているためかもしれない。また、使用されないことは抑圧されていることと意味するのかもしれないと考えられる。いずれにせよ、本能的なものを問題にしていることになる。抑圧するか否かは治療者によるのだろうか。地域差だろうか。動物は、本能的なものを示し、活動性、生命力などとも示すものと筆者は考えている。Fig 4-3の制作者は、担仕が考えている以上に内的に活動しており、そのために、外的な交流ができていないのかもしれないと解釈したい。

植物類は、5.4%~37.6%の間で使用されており、年令とともに増えている。大群では37.6%までが植物類になる。

建造物類は、17.8%~30.2%の間で使用されており、中々群以後増える傾向にあるが、一番変動の少ない使われ方である。

乗り物類は、2.8%~22.0%の間で使用されて

あり、大群を除いて、年令とともに減る傾向を示し、植物類と反対である。幼群の使用は、33.0%で高く、小3群も21.3%だが、小6群から7.8%に急減している。次に各群の特徴をみていく。

§ 2. 各群の特徴

(1) 幼群：幼群は、乗り物類が多く、次いで動物類が続く。植物類が5.4%と非常に少ない。性差をみると、(Table 4-9, Fig 4-4 参照) 男子では、乗り物類が41.7%と多いのに対して女子では建造物類が30.4%と多くなり、乗り物類と建造物類の使用が対称的になっている。テーマを考慮しながら、作品をみると、整理された作品という感じは非常に少なく、雑然とした感じで、玩具が羅列的に置かれているのが多いようである。これは、幼稚園児の絵画と対応している⁽⁶⁹⁾。男子の中核的な、整理されていない例として Fig 4-5 と Fig 4-6 があげられる。Fig 4-5 (33'55", 68個)は

Table 4-9 男女差の玩具の使用数と種類

玩具		総数	人間類	動物類	植物類	建造物類	乗り物類
幼 群	男	50.8	4.2 (8.2%)	16.7 (32.9%)	1.7 (3.4%)	7.1 (13.9%)	21.2 (41.7%)
	女	27.7	5.3 (19.0%)	8.1 (29.2%)	3.0 (10.8%)	8.4 (30.4%)	2.9 (10.5%)
小 3 群	男	35.5	10.7 (30.1)	4.4 (12.3)	2.2 (6.1)	6.4 (17.9)	11.9 (33.6)
	女	36.1	11.4 (31.6)	5.8 (15.9)	7.1 (19.6)	10.3 (28.6)	1.5 (4.2)
小 6 群	男	25.3	6.8 (27.0)	8.5 (33.6)	5.5 (21.7)	1.8 (7.0)	2.7 (10.5)
	女	19.5	3.5 (18.2)	3.0 (15.4)	5.2 (26.5)	7.2 (37.2)	0.5 (2.8)
中 2 群	男	42.3	3.4 (8.1)	16.1 (38.1)	11.8 (28.0)	8.4 (19.9)	2.5 (6.0)
	女	28.7	1.8 (6.2)	3.5 (12.2)	9.6 (33.5)	12.4 (43.1)	1.4 (5.0)
高 群	男	42.4	6.2 (14.6)	10.8 (25.5)	13.2 (31.3)	10.8 (25.5)	1.3 (3.1)
	女	40.1	4.8 (11.9)	6.7 (16.7)	13.8 (34.5)	13.8 (34.3)	1.0 (2.6)
大 群	男	45.3	5.8 (12.9)	6.4 (14.1)	17.0 (37.6)	12.6 (27.9)	3.4 (7.5)
	女						

乗り物を中心に、雑然と建造物類が置かれ、わずかに中央に柵で囲まれた部分と左上および右上の家を中心とした場所にまとまりがでかかっている。担任の語では、「この制作者は幼稚園で元気に遊んでおり、今までのところ特に目立ったことはない」とのことであ

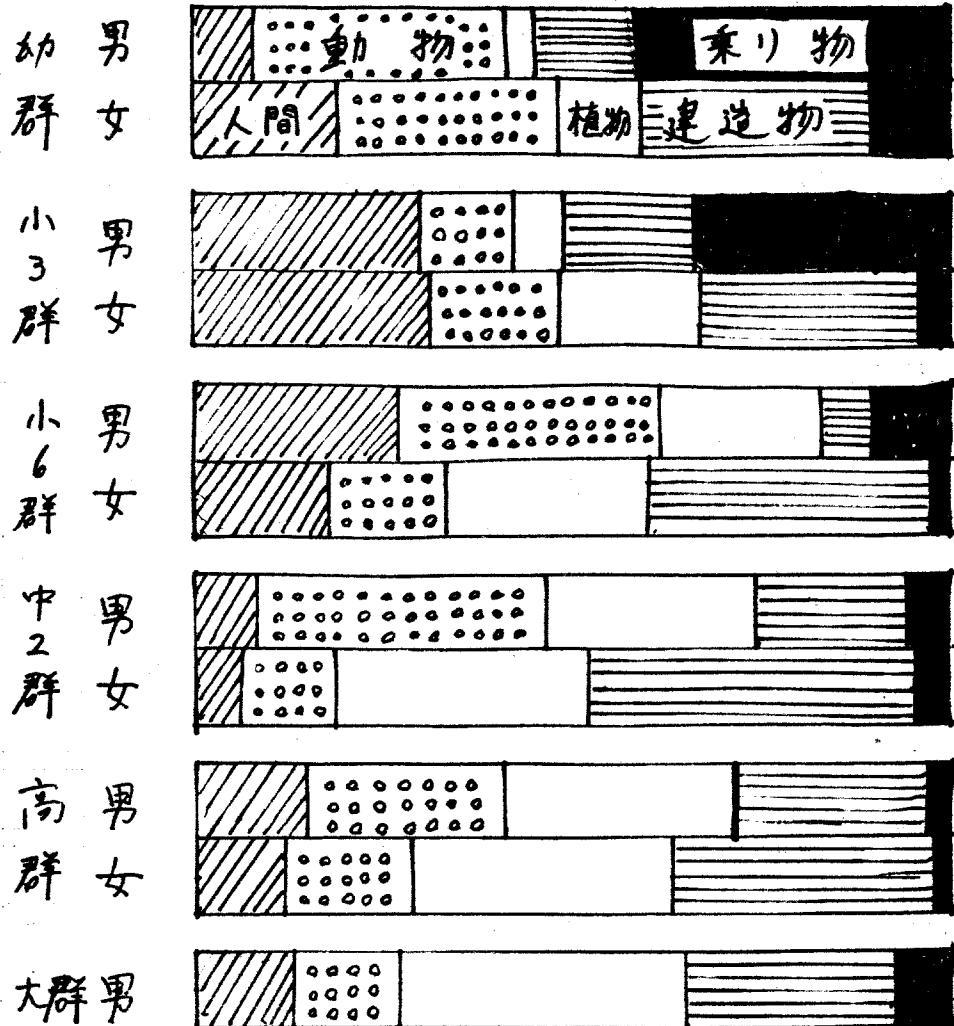


Fig 4-4. 男女差の玩具の種類

た。Fig 4-6 (16'40", 45個) は、上側に舟が集まり、電車は右へ向っており、少し方向性もあるが、乗り物が雑然とおかれている作品である。

女子の中核的な作品としては、テーマが家

の Fig 4-7 (10' 25" 26個) のようなものが考えられる。これは、家の内部を示した作品になっており、しかも花壇や家が、ソファやピアノと一緒に置かれるなど、屋外のものと家具とが混然としてゐる。しかし、柵でひとつの団いを作り、屋内と屋外と



Fig 4-5 幼群男子の整理されていかり作品



Fig 4-6 幼群男子の整理されていない作品

は区別しようとしている部分もみられる。また、ピアノやソファを庭に置いているので、見た目には奇妙なところもあるが、これは男子の作品で船や自動車が入りまじると同じ傾向ではないかと思う。男子より柵を使っているだけ、少しはまとまりをみせているのか

もしれない。この作品は箱の $\frac{3}{4}$ 程度まで使っているが、箱の $\frac{1}{4}$ 程度の左下隅に同じテーマで作った作品が3個あった。この3人



Fig4-7 幼群女子の家の作品

に2回目も制作してもらったところ、箱の $\frac{3}{4}$ 程までに使用された領域は拡大した。正常な子の成長力を示していると思う。なぜなら、^(注1)西村の緘黙症のケースでは、使用される領域が広がるには長時間が必要であった。真田の集団不適応の高校生^(注2)のケースでは順調に使用領域は広がったが、やはり幼群よりも少し多くの時間を必要とした。



Fig4-8 幼群男子の整理された作品

(注1) 河合隼雄 著「箱庭療法入門」94ページから103ページまで。

(注2) Sand Play Technique に関する研究 (1969) 筆者の修論で示したケース。

整理された作品としては、Fig 4-8、Fig 4-9 があげられる。Fig 4-8 (28/30", 25個) は、使用玩具数は平均よりかなり少なく作られたものである。左上に家が置かれ、その前にはシャベルカー、リフトカーが置かれ、何か耕やしているようである。また、中央では怪獣と動物の相撲が行われ、右の方では囲の中に馬がおり、魚が泳いでいるという作品である。必要のないものを取り除き、さっぱりした作品という感じがする。この制作者のこゝとを担任は、「何をするのにも緻密な子供」と評価している。Fig 4-9 (12/30", 27個) は、女子の作品である。これは、動物が放牧されており、花が咲き、楽しい田園風景である。動物の中には家畜以外の象、キリンがはいっており、奇異な感じもするが、まとまっ



Fig 4-9 幼群女子の整理された作品

たのどかな作品である。この制作者について担任は、「幼稚園では、しっかりもので、知的にも高い」ということである。この2個の作品は幼稚園児としては、知的に高い子供のものといえよう。

また、幼稚園児の中には、玩具を使用せず、砂だけで作品を制作したり、制作せず、自動車を動かして遊ぶだけの子もいた。

(2) 小3群：小3群は、幼群に比べ、人間類が30.7%と急増し、動物類が減っている。建造物類、乗り物類が20%強で、動物類、植物類が10%強の使用率になっている。性差をみると、男子は乗り物類が33.6%と多く、植物類が6.1%と少ない。女子は植物類が19.6%で、建造物類が28.6%と多く、乗り物類が4.2%と非常に少ない。これは、幼群の性差とほぼ同じ傾向である。

テーマを中心に作品の傾向をみると、幼群に比べ、雑然とした感じはなくなり、ひとつのテーマで作品が作られている感じである。

男子は戦いのテーマが増え、女子では町のテーマが多くなる。Fig 4-10 (7'17", 22個) はインディアンとカウボーイの戦いで人間ばかりが使われている。この制作者について、担任は、「少し甘えん坊で、幼稚、成績は



Fig 4-10 小3群男子の戦いの作品



Fig 4-10 小3群男子の戦いの作品

下の方」といっている。なお近代兵器を使用した戦車の戦いもある。Fig 4-11 (26'22". 47個) は男子の町のテーマの作品である。これは、上側に自動車走り、左側は花壇で、右側に飛行機が置かれている。飛行機



Fig 4-11 小3群男子の町の作品



Fig 4-11 小3群男子の町の作品

が侵入している感じで、領域の区分がもうい
とっはっきりせず、整理ができていない感じ

のする作品である。担任の話では、「この子は成績が悪く、めだたない子」とのことであつた。作品からみた筆者の推測では、適度に幼なさを備えた、やさしい子ではないかと思う。

小3群の女子の作品は Fig 4-12 (32'02", 76個) のように、町や村

のテーマが 66% と占める。これは村の通りには、人と動物とが置かれ、左側には柵で囲まれたウシがいる。



Fig 4-12 小3群女子の町の作品

動物が通りにいるのは、何かもうひとつ整理しきれないものが残る感じを受ける。なお、この作品で、屋根の上にニワトリがいるのが目につく。人や動物の大半は、このニワトリを見ているようであり、ニワトリが全体を見下ろしているようでもある。

制作中の観察から、小3群は、幼群に比べ、玩具を一度置いてから場所を移動させたり、

玩具を取り変えたりするのが多く、吟味して玩具を探している印象を強く感じた。

(3) 小6群：小6群では、乗り物類が7.8%と急減し、動物が27.1%と増えている。他の玩具は20%前後である。性差をみると、人間類、動物類、乗り物類で、男子が女子より多く、植物類、建造物類で、女子が男子より多くなっている。特に、女子の建造物類が37.2%で男子(7.0%)より大幅に多く、男子の動物類が33.6%で女子(15.4%)より多くなり、幼群と小3群の性差傾向と少し異なってきている。

次に、テーマを中心に、作品の例を示しながら小6群の特徴を調べていく。男子のテーマは、「ジャングル(アフリカ)」が8個(44%)と「戦い」が5個(28%)で多数を



Fig 4-13 小6群男子のジャングルの作品

占めている。Fig 4-13 (10'10", 28個) と Fig 4-14 (2'25", 8個) はジャングルを示している。前者は、木が茂り、動物がいてジャングルらしく、後者は、木といく匹かの動物で、簡単にジャングルを表現している。担



Fig 4-14 小6群男子のジャングルの作品
任の話では、Fig 4-13の制作者は、「知的には、中の上で、子どもっぽく、自分勝手なところがある」とのことであり、Fig 4-14の制作者は、「おとなしい子」ということであった。戦いのテーマの作品は、小3群と余り変わらない。

小6群の女子のテーマは「家」が5個(38%)、「町」が4個(31%)、「公園、動物園」が3個(23%)などである。町のテーマの作品は、小3群の女子より、玩具数が少なく、淋しく、貧弱な感じを受ける。例えば、Fig 4-15 (21'

、12個)の作品である。これは、左側が空白で、置かれている人も小さくめだたない。また、はなやかさがなく、家と木だけの殺風景な作品になっている。



る。担任は、この Fig 4-15 小6群女子の町の作品

制作者を、「内向的で、依存心の強い子、知能は中ぐらい」と評している。Fig 4-16 (9'15",

20個)は家のテーマである。家の中には花が咲き、豊かなものを感じさせるが、人(2人)や動物(1匹)が



少なく、空白部が Fig 4-16 小6群の女子の家の作品

めだち、全体としては、さびしい感じをうける。小6群の「家」の作品はこのような感じであった。担任によれば、この制作者は、「閉

じこもりがちな子で、知能は中の下だ」ということである。

小6群の作品は、概して貧弱で、さびしい感じのものが多かった。また、木の上にサルが置かれた Fig 4-14 のようなものが3個あった。サルは箱庭も見渡しており、内的、外的両世界を客観視していこうとする小6群の特徴を示しているのかもしれない。

(4) 中2群：中2群は、植物類、動物類、建造物類が30%近く、人間類、乗り物類が少なく、アンバランスな玩具の使われ方である。性差をみると、男子は動物類(29.1%)が多く、女子は建造物類(42.1%)が多く、小6群の性差に似ている。

テーマを中心に作品をみていくと、中2群の男子では、動物がよく使用されている。テーマとしては、「ジャングル、猛獣狩り、動物マングラ、牧場」といったものである。例えば、Fig 4-17 (10'25", 23個)は、猛獣狩りである。中央に人がおり、自動車が左下隅にあ

って、動物の世界に入りこんできた感じである。担任は、この制作者を「チャレンジしない性格」だと言っ



ている。この作品 Fig 4-17 中2群男子の猛獣狩りの作品をみて、今、内的な面でチャレンジしていて、外的には何もチャレンジしていないようにみえるのではないかと思った。動物マングラは Fig 4-3 に示した作品が一例である。牧場の例としては、Fig 4-18 (37'22", 49個) がある。

これは、ブタ、ヒツジが飼われている牧場と家の作品である。この制作者は「運動を一生懸命する子で、成績は悪い」という



Fig 4-18 中2群男子の牧場の作品
ことである。小6群と比較して、中2群には

動物を統制しようとする動きがみられる。理由としては、中二群の「動物」の作品の牧場 (Fig 4-18) は、動物を飼っていることであり、動物マンガラ (Fig 4-3) は、動物が中心に向って、統一されているようであり、猛獣狩り (Fig 4-17) は、動物を狩り、飼い慣らそうとする動きと考えられる。

他のテーマとしては、「町や村」が8個 (35%) と「戦い」が2個 (9%) であった。「町」の例としては、Fig 4-19がある。Fig 4-19 (15'55"、50個) は、斜上への通りと川があり、左側に家がある。この制作者については、「出来るのに、リーダーシップをとらない、内向的な子」ということである。



女子のテーマは、小6群と似ており、「家」が4 Fig 4-19 中二群男子の町の作品 個 (22%) と「町」が10個 (56%) とで大半

と占め、他には、「公園」が2個(11%)、「牧場」が1個(6%)、「ジャングル」が1個(6%)であった。「町」の例としては、Fig 4-20 (19'55"、47個)



がある。この作品は、人がおろり、箱は4分され、右上に自動車を押しこまれており、少

し固い感じがする。Fig 4-20 中2群女子の町の作品

この制作者について担任は、「見識は抜群で、まだ力が出せていない」と評価している。この閉じこめられた自動車が動き出すことが力を出すことと対応するのだろう。Fig

4-21 (28'15"、31個)は、「家」がテーマの作品である。これは、こじんまりした家で、柵で



Fig 4-21 中2群女子の家の作品

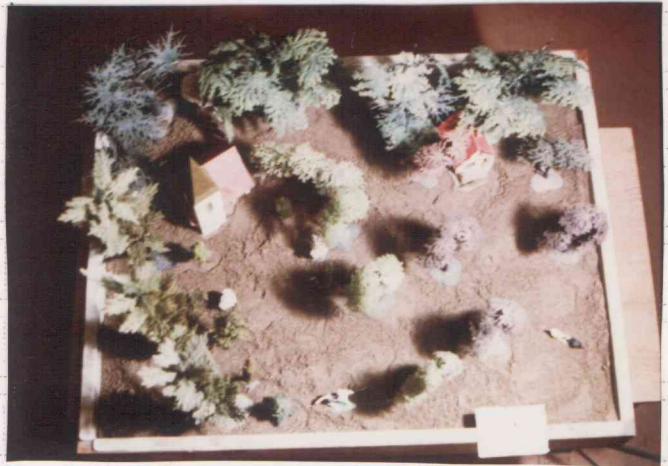
囲われすぎている感じもある。中央下側の柵が少し開き、そこへ男の子が来ているのが興味深い。生きものは、犬と男の子だけで少しさびしいが、花や池がうるおいを与えている。今後、この家の領域が広がるのだろうか。担任は、この制作者を、「能力のある子」としている。

(5)高群：高群では、植物類、建造物類が約 $\frac{1}{3}$ づつを占め、乗り物類が2.8%と非常に少ない。人間類が中2群より増加し、動物類が減っている。性差をみると、(Fig 4-4 参照)他の群と比較して、玩具の種類では、男女差がみられなくなっている。テーマ分類では、森、町が大半であり、動物、戦いが続いている。結婚式が多いのも特徴的である。ここでは、男女を区別せず、少し視点を変えて、テーマも考慮しながら、次の3群に分けて考察する。

第1グループは、「森」を中心としたグループである。森の開拓の程度に応じて、「森に囲

まれて家がある。」「森が開拓されて、開かれてきたが、まだ未耕のところがある。」「森の中に道や川ができ、森は分割され、開拓されたが、まだ未知なる世界が残っている。」「森が相当開かれているが、野性の動物がいたり、未知なるものがある。」さらに、「森が開かれて、町や村となっている」などである。

Fig 4-22 (12', 32個) は、男子の作品である。これは、森の中に家と教会があり、それぞれに白馬とニワトリが一匹ずついる。木は教会と家とを囲ん



でおり、まだ開拓されていない。家と教会を中心に、これからこの森を開拓していくのではないだろうか。

Fig 4-23 (38', 12個) は、女子の作品である。これは、森の真中に道があり、道には、兵士がいる。上側の森の中にはヘビが3匹お

り、大石もある。
森と道の境には、
多数の柵と棒が立
てられている。(少
し多すぎる感じも
ある) 森を開拓す



ると、ヘビのよう Fig 4-23 高群女子の森の作品
な怖い、危険なものが出てくるので、これら
の柵や棒は、それを防ぐために作られている
ようである。制作者の説明は、「森の奥深いと
ころに、一軒家がある。そこへ行く道は変ん
なもの(ヘビ)が出てきて、怖くて外へ出ら
れず、教会へも行けない。それでヘビをや、
つけに兵隊がきている。不気味な感じにした
とのことである。感想として、「こんなものを
作るつもりはなかった。もっと楽しい感じの
ものを作りたいかった。」と言っている。まさし
く、高校生には、このような不気味なものが
あり、防衛せざるを得ない面があるのだろう。

Fig 4-24 (24', 40個) は、男子の作品であ

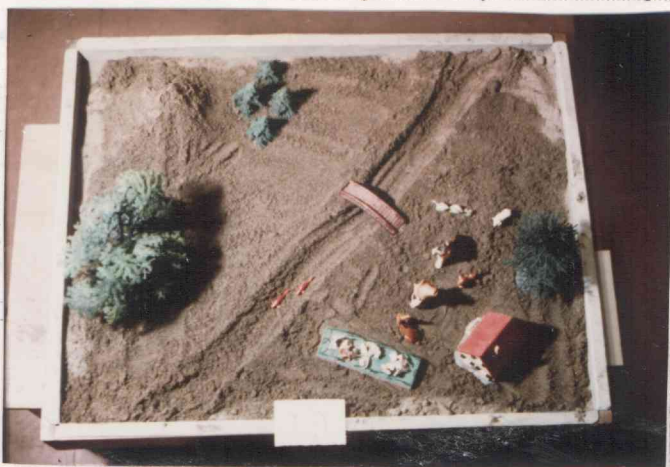
る。これは、ジャ
ングルの中に一軒
家があり、ライオ
ン、ゾウなどがい
る。家の前には、
火とトーテムポー
ルがあり、家を守



Fig 4-24 高群男子の森の作品

っているようである。動物の中に人が二人い
るが、左上の家は、危険な時には逃げ帰る家
のようであり、安心して、動物と何かしてい
るのだろう。

Fig 4-25 (26'10", 17個) は、女子の作品であ
る。これは、全体
が川によつて分割
され、右下は家と
中心に小人、うさ
ぎ、犬があり、花
壇や木があり、開



かれてゐる。左上 Fig 4-25 高群女子の未開の森が残った作品
は、山と木だけで未開拓のままである。ここ

から何かが出てくるのではないかと不安をもっている感じである。

Fig 4-26 (32', 62個) は、男子の作品である。テーマは村であり、相当開拓されている感じである。左上の神社と右側の家に対して、下側にある石の重



みか、何かもうひとつ統合できないものを示しているようで、意味深長なもののように思われる。全体に平坦な感じであるが、川が急入りに掘られているのが印象的である。

Fig 4-27 (30'15", 46個) は、女子の作品である。これは、森の中に村ができ、教会の前



Fig 4-27 高群女子の村の作品

で結婚式が行われている。右上にある古い城はとり残された感じがして、何かがまだ残っているのを示しているのかもしれない。あるいは、これは古い状態の中心であって、もう必要のないものを示しているのだろうか。なお、本調査では、この作品のような結婚のテーマが9個(11%) (女子7個、男子2個)出ており、特徴的であった。高校生の結婚のテーマは、相対立する男性性と女性性の結合としてよりも、むしろ、男性性、女性性の分化をおこす前段階として、両性性を示すために結婚式が出てきたのではないだろうか。即ち、性のアイデンティティを確立するため、もう一度両性性を確かめるためではないかと考えるのである。今回の分析対象でないが、大学生の女子には、『お待ちのテーマ』といわれるような、女性が1人ベンチに坐って待っている」作品があり、高校生の結婚のテーマと対応するのではないかと考えられる。このテーマは、大学生では男性性と女性性、精

神と肉体などの対立するものも示すために使用されたと思うのである。

「森」は、解釈的になるが、「無意識」を示し、「未知なもの」「混沌としたもの」「思春期の衝動的なもの、本能的なもの」と意味すると考えると、その開拓されている程度は、その制作者が、これらと統制している程度ということになろう。また、外界に対して開かれている程度を示しているといえるかもしれない。

第スグループは、未統合なものが中心となっており、未熟な感じのする作品である。例えば、「動物ばかりでまともがない」、「家とテーマにしているが幼稚である」、「戦い」などである。

Fig 4-28 (お', 56個) は、男子の作品である。これ



は、インディアンと Fig 4-28 高群男子の戦いの作品

カウボーイが戦っており、それと避けるように、ゾウ、水牛などが右方向へ逃げている。また、左下ではライオンが戯れており、戦いのテーマであるが、動物が加わっている点が、小3群、小6群の戦いと異なっている。これは動物的なもの、即ち、本能と統合するための戦いとも考えられるのではないかと思う。

第3グループは、「町と村」と中心としたその他のグループである。

Fig 4-29 (32'30", 93個) は、女子の作品である。これは、通りには自動車が走り、右側の柵で囲まれた広い領域には、二軒の家があり、庭はテーブル、池などで飾られている。左上の野菜、果物が何かこの風景に



Fig 4-29 高群女子の町の作品
調和せず、気になるものである。

Fig 4-30 (54'25", 58個) は、男子の作品で

ある。これは、の
どかな田舎を1台
の自動車が進んで
いる。ある目標が
でき、そこへ進ん
でいる感じで、混
頓とした思春期の



Fig 4-30 高群男子の作品

状態とある程度克服出来たのではないかと思
われる。

- (6) 大群：大群は、植物類が37.6%と多く、
乗り物類が少なくなっている。高群と似た玩
具の種類の使用率である。性差は女性の作品
と分析対象にできなかったのでも明らかにでき
ない。テーマを中心に作品をみていくが、次
章のSD法による分類基準と対応するようだ。
テーマは、「町や村」が14個（34.2%）と多い。
「戦い」が7個（17.1%）、「公園、動物園」
が5個（12.2%）、「家」が4個（9.8%）、「森」
が3個（7.3%）、「学校」が3個（7.3%）と多
彩である。「町」の例としては、Fig 4-31（

25', 57個) がある。

(第Iグループ)

これは、道路がやや右上に通っており、その上を自動車が走っている。



左上と右下が道路 Fig 4-31 大群の町の商品

によって分けられている。Fig 5-1 (30', 56個) も町のテーマである。これは、通りには自動車が走り、右上と右下に家がある。下側で、猿吾空がベンチに寝ているのが気になるが、ユーモアのある作品ともいえる。

Fig 5-9 (23', 51個) は、村のテーマである。これは、日本の庭園がそのまま写し出された感じで、静かな感じの作品である。(第Vグループ)。

テーマが「戦い」の例としては、Fig 5-8 (40', 47個) がある。(第Ⅲグループ)

Fig 4-32 (25', 30個) は、雑然と玩具が置かれた作品である。一見まとまりのないもの

だが、色彩を中心
にとらえた感
覚的な作品で、抽象化
されたものとも考
えられる。



Fig 4-32 大群の感覚的な作品

§ 3. 性差

性差については、各群ごとにすでに少し触れてきたが、ここで、要約しておきたい。(Table 4-9, Fig 4-4 参照) 女子は、建造物類が各群とも多く、植物類が年齢とともに増加し、小6群から25%以上を占める。動物類は小3群で減少し、それ以後は同じぐらいの使用率である。乗り物類は全体に少ない。一方男性では、乗り物類は小3群まで多く、以後は急減する。動物類は概して多く、高群、大群で減っていく。男子と比べ女子の玩具の使用は各群でそれ程変化はしない。男子は年齢

によつて、相当使用される玩具の種類は変化する。従つて作品自身も変化に富むといえる。一方女子は、町や家が中心となつて、それ程作品は変化しないといえる。

§ 4. その他

Table 4-10は、各群の柵（アーチと門も加える）の使用人数及び百分率を示したものである。個々の玩具について調べるべきであるが、今回柵をとりあげたのは、柵は箱の中での一つの領域を示すために最も都合のよいものであり、自我の発達と関係づけられるかもしれない。自我の発達に応じて、柵の使用が

Table 4-10 柵の使用

群 柵	幼群		小3群		小6群		中2群		高群		大群	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
柵を使用した人数	15人	7人	13人	9人	8人	7人	24人	14人	50人	30人	22人	22人
百分率	(47.1%)	(57.3%)	(23.5%)	(25.0%)	(5.6%)	(52.8%)	(43.5%)	(77.8%)	(54.1%)	(66.7%)	(53.7%)	—
一人当たりの柵の使用	1.9	1.9	2.3	3.7	0.3	2.8	2.6	4.1	2.1	3.5	2.8	—
使用した人の一人当たりの柵の使用	3.7	3.2	6.4	4.9	5.1	5.1	5.5	5.2	4.7	5.3	5.2	—

多くなるのではないか。また、棚の使い方で自我に関して何か資料が得られるのではないかと思う。

棚を使用した人が多いのは、高群 (61.0%) であり、中ス群、大群と続き、小6群で 25.8% と少なくなっている。棚を使用した人数が各群で有意に差があるかどうかを検定したところ、5% 水準 ($df=5$, $\chi^2=11.070$) で有意に各群で棚を使用した人数に差があることがわかった。また、各群ごとと比較すると、小6群と幼群が 5% 水準 ($\chi^2=4.258$) で、小6群と中ス群が 1% 水準 ($\chi^2=7.659$) で、小6群と高群が 1% 水準 ($\chi^2=11.137$) で、小6群と大群が 5% 水準 ($\chi^2=5.634$) で有意に、小6群の棚の使用人数が少ないことがわかった。他群間では有意差は出なかった。

性差をみると、女子は棚を 50% 以上の人が使用しているのに対して、男子は、各群で変動が激しく、特に、小6群で 5.6% と少なくなっている。また、1人当たりの棚の使用(

平均)は1.3~3.2個の間にあり、小6群を除いて、各群は2~3個である。

作品の中に使われた柵の数によって使用の傾向がわかるかもしれないと思い、使用した人の1人当たりの平均を出すと、3.7~6.4個であり、小3群(6.4個)が多い。中2群は使用する人数は少ないが、柵を使用すると5.1個となり、他群と似てくる。少くとも3個の柵でひとつの領域が作られることから、各群とも、箱の中に、柵で囲まれたひとつ以上の部分を作っていることになる。多くの場合、柵は家を囲んでいるようだがそれぞれにとつての大事な部分を囲んでいるのだろう。

第4節 要約

箱庭療法の作品は実際にどういうものであるかと年齢別に6群に分けて調べた。以下で簡易書きで明白になった点を示す。

(1) 所要時間の平均は12分から23.74分までであり、小6群が一番短かく、高群が一番長かった。概して、制作に要する時間は20分程度である。

(2) 初発時間に群間で差はなく、30秒程で制作を始めることが明らかになった。

(3) 作品の高さは年令とともに高くなり、砂に触れる人数も年令とともに多くなるといえる。高さに関して、小3群の男女間に有意な差がみられ、女子が男子に比べ有意に高い作品を制作する。

(4) 乗り物類の使用は小3群まで多いが、小6群から少なくなる。

(5) 女子は建造物類、男子は乗り物類と動物類の使用が多い。

(6) 植物類は5.4%~27.6%間で使用されており、年令とともに使用率が増える傾向にある。

(7) 性差は、年令が低い程、使用玩具、テーマなどに差が認められるが、年令が高くなると差が認められなくなる。箱庭が内的

な作品であることの表われと考えられるかもしれない。

(8) 幼群の作品はまとまりなく、雑然としている。

(9) 小3群の作品は幼群と似ているが、玩具が吟味して置かれており、テーマに基づいて制作されている感じであり、まとまりがある。

(10) 小6群では男子がジャングルと戦い、女子が家と町(村)のテーマになり、作品の感じは固く、豊かさが無い。

(11) 中3群では男子は動物類が多く使用され、テーマが猛獣狩りや牧場のように動物をいかに飼い慣らすかが課題のようである。女子は家と町のテーマが小6群同様大半を占める。

(12) 高群では「森」を中心としたグループと未熟な感じのする作品のグループとその他のグループの3グループに分けられた。「森」とテーマにする作品が多かった。

(13) 大群は町や村、戦い、公園や動物園などテーマが多彩になる。

(14) 棚の使用は群間に有意差がみられる。小6群が棚を使用するのが少ない。

以上が第4章で明白になった事柄である。今後の課題としては制作者数をもっと増やすこと、分析対象にならなかった年令層の作品の収集などがある。また、今回の研究は横断的であるが、縦断的に、長期間にわたって個人の作品の変化の資料も積み重ねることが重要である。

箱庭療法の作品の種々の事柄が明白になったが、さらに、次章では、診断性についての研究を記述する。

第 5 章

箱庭療法の診断的側面について — S D法を中心としたひとつの試み —

第1節 問題と目的

前章では、箱庭療法の作品と年齢差を中心にして分析したが、本章では、作品の見方のうち「全体的な感じ」を中心にして作品を分析し、箱庭療法の診断性についても考察する。

人は一般に同じような感じ、印象をもつ。この点に注目し、共感覚を研究し、発展させる。対形容詞で概念の意味を調べたのが Osgood²⁴⁾である。それは Semantic Differential 法（以下 S D法と略す）と呼ばれる。芳賀⁷⁹⁾（1959）によると「S D法とは、意味と呼ばれてきたものと操作的な手段を用いて、数量的に測定する一方法である。これは、意味測定のための一つの用具であり、本質的には、制限連想法と尺度法との組合わせであり、それは

次の三つの仮定に基づいて構成された。

(1) 概念 (concept) は実験的に設定された両極に対称容詞 (polar pair) と記した尺度の上で判定される。

(2) 概念をこのように判定する尺度 (対形容詞) は一概念について無数にある。しかし、それぞれお互いに相関があって、判定の結果は本質的には同等になる。このような尺度を幾つかまとめると意味の一つの次元 (dimension) に所属させることができる。

(3) このような次元を示す尺度を幾つか用いることによって、意味空間 (Semantic Space) と定義し、この意味空間の中で特定の概念の意味を決定することができる」と説明している。

人々は箱庭療法の作品に様々な印象を持つが、その印象をこのSD法で数量的にとらえ、印象の共通性や差異を明確にし、作品の内包的な意味を調べようとした。したがって、SD法によって作品の意味内容をとらえ、作品

を類型化しようとするのがひとつの目的となる。

また、箱庭療法は治療を中心に考えることと強調したが、どの程度診断に有効であるかを確かめるために、正常群と異常群とを比べる。

具体的には次の二点を目的とする。

1. 作品を類型化すること：人と「人間のタイプ」としていくつかに分類することができるよう、SD法によって、作品を類型化する。

2. 診断性を調べること：正常な人の作品と病的な人の作品とは、その人格構造が作品に反映されて、両群の差異を示す指標が得られるであろう。

第2節 方法

§1. 作品の収集

1) 器材：箱庭療法用具一式、時計、SD法用紙、質問紙、巻尺、カメラ、ストロボ。

2) 場所；A. K大学遊戯室. B. K病院

3) 日時；1968年6月～8月

4) 被験者；正常群（以下N群と略す）—41名（18才～28才，男性，独身）（なお第4章の大群と同一である。）異常群（以下S群と略す）—27名（19才～28才，男性，独身）S群の内訳は分裂病18名，躁うつ病3名，非定型精神病または境界例6名である。

5) 教示は「ここにあるおもちゃを便って、この箱に何か作って下さい。」である。

6) 治療者（テスター）；治療者は大切であると思われるので，すべての作品を通じて，筆者になる。制作者に好面で，砂箱に好して左側に位置した。

7) 作るのに要した時間を計る。

8) 高さ，低さなどを調べる。

9) 質問紙を施行する。（付表3参照）

①「ここにはないが，ほしいと思ったおもちゃがあれば書いて下さい」，②「作品のテーマを書いて下さい。また，作っているときの感

じなど内観があれば、なんでも書いて下さい。」

注意すべき手続きは以上であり、これらに基づいて作品を収集した。

§2. SD法評定の手続き

1) SD法評定の被験者；心理療法に従事している人で、実際にケースを持っている人18名（経験は1年～10年と幅がある）。

2) 場所；A. K大学研究室 B. Kカウンセリングセンター面接室

3) 日時；1968年9月2日～9月20日

4) Projector；MasterおよびCanon Camera size 35 mmを使用する。映写距離は約3mである。

5) 用意されたスライド68枚（N群41、S群27）をランダムに3群に分ける。評定されるべきスライドが多すぎるので、初めと終わりでは評定が、疲れなどで歪むことを恐れた。このために、短期間（約1週間）後にくぎ

るほうが、歪みが少なく、最善の策と考えたために3群に分けた。^(注1)

6) S D法のscaleの決定; ①予備のスライド14枚を提示し、Osgood²⁴⁾の3因子と相良²⁵³⁾の4因子から選ばれた16個のscaleで評定させ、この中で正規分布に近いもの、②箱庭療法を使用して治療をしている人に、経験上重要と思われる形容詞も制限連想させた形容詞、③安定性、統合性、動き、明暗などの観点から、また、Osgoodの3因子と相良の4因子が含まれるように考慮した形容詞、の3点から20 scaleを選んだ。それらをTable 5-1に示す。

この20 scaleを順序をランダムにして、左右を入れかえて、4種類を用意した。(付表4参照)

(注1) ある1枚のスライド(H)を3回ともに共通に提示した。この評定の各scaleについて、分散分析をした結果、17個のscaleは有意差がなかったが、3個のscaleに有意差が生じた。そのscaleは「浅い—深い」「小さい—大きい」「暗い—明るい」であった。この点はさらに詳しく調べる必要があろう。

7) 提示時間
は1分30秒
～2分とした。
若scale 4
～5秒の割合
として考えた。

Table 5-1 使用したscale

1. まとまった—雑然とした	11. 安定した—不安定な
2. かたい—柔らかい	12. 暗い—明るい
3. 貧弱な—豊かな	13. 弱い—強い
4. 女性的—男性的	14. 充実した—空虚な
5. 深い—浅い	15. 不調和な—調和した
6. こせこせした—のびのびした	16. 積極的—消極的
7. 動的—静的	17. アブノーマルな—ノーマルな
8. 未熟な—成熟した	18. にぎやかな—さびしい
9. 開放的—閉鎖的	19. 緊張した—くつろいだ
10. 小さい—大きい	20. 愉快な—不愉快な

8) 教示は「これから20才前後の人の箱庭の作品を映写します。このスライドを見て、第一印象で、20個のscaleに評定して下さい。scaleはとばさないように注意して下さい。深く考えず、第一印象で評定して下さい。」

今回は、①作品の種々の分析、②SD法による作品の類型化および診断性を報告する。

第3節 結果と考察

§1. 作品の種々の分析

1) 作品を仕上げるのに要した時間；N群とS群の使用した時間の平均はTable 5-2である。

これは、 t 検定の結果、 N 群では S 群よりも5%水準で有意に多

Table 5-2 N 群と S 群の平均(時間、高さ、低さ、玩具)の比較

群	項 目				
	時間(分)	高さ(cm)	低さ(cm)	おもちゃの数	ほしいおもちゃの数
N	23.34	21.15	2.55	45.27	2.00
S	16.52	20.96	.56	32.52	1.37
t 検 定	*	ナ シ	**	*	ナ シ

* 5%, ** 1% 水準で有意 (第3位4捨5入)

く時間を使っていることを示している。ほとんどの被験者はすぐに作品を作りはじめ、両群に差はなかった。この差異は与えられた作業に対する対処の仕方、および、それに集中できるエネルギーの量との関係から考えられる。両群とも平均16分以上を要したこと、および、その間の様子などは、いずれも課題にとりくんでいることを示し、「真剣味の無い状態」ではないと考える。 N 群では、与えられた状況のなかで、豊かに対処し、反応するだけのエネルギーを示すが、 S 群では、その状況は疎遠なものであり、回避されていると思う。

Dorken (1956)³⁶⁾ は Mosaic Test では、Psychotic はより多くの時間を使うという結果の

Martinの研究を示している。これは本研究の結果とくい違う。Martinの研究は、Mosaic Testであり、タイルを使い、色彩と中心に考えている違いと抽象的であるという違いはあるが、さらに詳しく調べなければならぬだろう。

一般に、S群とは関係がつきにくく、S群は排他的であるといわれていることから、テスターとの関係も影響しているであろう。標準化されたテスト状況よりも、自由な雰囲気を持つ箱庭療法ではあるが、要した時間の範囲が両群とも5分～60分であること、主治医との関係などからテスターと被験者との関係は特に考えていかなければならない重要な問題である。

2) 立体感について；素材自身すでに立体の物質であるが、これを箱の砂の上におくことによって、立体感が出てくる。掘り下げられた低さと上に述べている高さの両群の平均は、Table 5-2である。高さは両群で有意の

差はなく同じ程度である。これは木と家が高さを示す主なものであり、両群に使っている木と家に差がないことからもうなずける。したがって、3)で述べるように、木と家の意味内容が問題となろう。高さに関しては、N群がS群よりも堀り下げており、t検定の結果、1%水準で有意であった。また、堀り下げる人数はS群では4名(14.8%)であり、N群では21名(51.2%)であった。χ²検定の結果、5%水準でN群の方がS群よりも堀り下げる者が有意に多かった。N群では、砂を堀り下げる者と、そうでない者とに二分されたが、堀り下げて深みを出すことは、作品をより立体的にすることであり、状況と自ら変化させ、新しいものと作ろうとするN群の積極性のあらわれであると考えられる。S群ではほとんど砂に触れず、与えられた状況に忠実であるが、積極性がうかがえず、受動的である。堀り下げることは、N群とS群の区別のひとつのサインであり、状況を変えること、砂の感触

を楽しむことなど何か重大な意味を持っているのかもしれない。治療が進んで、好転し、18日めで砂にさわったという事例もある。

3) 使用されたおもちゃの数と種類

a. 数 使用されたおもちゃの数の平均は Table 5-2 である。N群のほうがS群よりも検定の結果、5%水準で有意に多い。これは、World Testでは、正常者が50個以上のおもちゃを使用するというビューラー(1952)²²⁾の研究の結果と一致している。使用している箱の領域とも関係してくるであろうが、それだけの構成力と豊かさと生産性などを示している。N群では、それらの豊かさを示しており、S群では、乏しさを示している。すなわち、S群の日常生活での無気力さと関係し、エネルギーの向けられる範囲の狭さと心的機能の萎縮性 (constrict) を示すと考えられる。また非常に多くのおもちゃを使用するものが両群に、1、2名ずつみられた。これは構成力の点で少し乱れており、統制できない力を

感じさせる。

b. 種類 N群の使用したおもちゃの種類
の頻度の多いものからあげると、木、家、動
物、サク、人、ベンチ、イス、芝生の順になる。

Table 5-3 使用された玩具の種類と人数

玩具の種類	群		χ^2 検定
	N	S	
木	38人	25人	ナ シ
家	37	26	ナ シ
人 形	36	11	* *
動 物	34	7	* *
兵 士	24	2	* *
自 動 車	23	18	ナ シ
サ ク	22	13	ナ シ
ベンチ, イス	15	10	ナ シ
芝 生	15	6	ナ シ
石	13	10	ナ シ

* 5%, ** 1% 水準で有意

S群では、家、木、自
動車、サク、石、ベン
チ、イスの順である。
多いものを上位から10
種類とり出した結果は
Table 5-3である。

χ^2 検定の結果、N群はS群より動物と人形
と兵士を1%水準で有意に多く使う。これは
S群の作品の中に、生物がないことと関連
しており、「さびしい」感じを与えるとともに、
生々とした活力がないことを示している。
S群の非活動性と孤立傾向などとも深い関係
があると思う。

家は人間の基本的な安定の場であり、木は
生命の木 (Lebens Baum¹²⁶⁾) といわれるように、

植物的活力を示すとも考えられる。人物において有意差が認められたが、家や木では両群に差が認められないことは興味深い。S群においても、これらがなくなる程荒廃していないことを示すのかもしれない。あるいは、両群で、木と家が意味する内容が違うかもしれないが、いずれにせよ、ここでははっきりと結論を出せないむづかしい問題である。

4) ほしいおもちゃの数と種類；本研究にはほしいおもちゃで、ほしいおもちゃを質問した。これは、おもちゃに制限なくあることを前提にしているがそれは実際には不可能であるので、ほしいおもちゃを聞くことによって、少しでも補おうとして試みたものである。また、治療場面においては、予測的な意味も出てくることがある。ほしいおもちゃの数の平均では、両群に差がみられなかった。その種類も両群で比較すると、「人」を要求しているものが、N群ではS群より、 χ^2 検定の結果、1%水準で有意に多かった。他のおもち

やについては、両群では、差がみられなかった。本研究で使用された人形を示す玩具は若干の日常生活を示す人と、少しふざけた人形類、赤ちゃん、婦人などであった。他の要求した玩具は、ほとんど用意したものであった。

5) テーマ分析；筆者によって分類されたテーマはTable 5-4である。

Table 5-4 テーマ分類

テ　　マ	群					
	N		S		合　計	
	人数	%	人数	%	人数	%
街	14	34.2	13	48.2	27	39.7
戦　い	7	17.1	0	0	7	10.3
公園・動物園	5	12.2	0	0	5	7.4
家	4	9.8	9	33.3	13	19.1
森	3	7.3	1	3.7	4	5.9
牧　場	3	7.3	1	3.7	4	5.9
学　校	2	4.9	0	0	2	2.9
庭	1	2.4	1	3.7	2	2.9
砂　漠	1	2.4	0	0	1	1.5
そ　の　他	1	2.4	2	7.4	3	4.4

テーマの両群の傾向を χ^2 検定した結果、有意差はなかった。N群とS群ともに、「街」

がテーマの中心となっているのは変わりがな
い。これは作り易いテーマであったからであ
ろう。N群では数多くのテーマに分かれるが、
S群では、家と街に77.8%まで集中している。
N群とS群との「家と街」のテーマの割合を
 χ^2 検定で比べた結果、1%水準で有意にS群
がN群よりも多いことがわかった。ここにも

S群の興味の中の狭さが考えられる。

また、両群では「家や街」の意味する内容の違いも考えられ、質的な面での研究が必要となろう。Stewart et. al. (1961)²⁷¹⁾のMosaic Testによる研究では、対象が精神病患者でなく、11才～15才の男女であるが、男性と女性で作るものがちがうと述べている。たとえば、女性は花と人と子どもを多く作り、男性は家や建物を作る。それらは、女性の思春期の自己愛と家族や人間に対する興味を示し、男性の作品は、家からの独立を示すと解釈している。

「戦い」のテーマがN群では7例あるが、S群では0である。「戦い」といったaggressiveなエネルギーを必要とするものは、S群では作りえないようである。TAT¹⁴⁷⁾にはaggression回避という反応型がある。この反応はaggressionを統制できないから、無意識に回避していると考えられる反応である。TATのこの反応型とどのような関係があるか

明らかではないが、なんらかの共通点を感じさせるものである。種々の aggression の研究 (Lovaas¹⁶²⁾、Moylan¹⁷⁴⁾ など) がなされており、戦いには、破壊と対決を意味する二面性があり、その重要性が認められてきているが、いっ

そうの研究が望まれる。

Table 5-5 本人によるテーマ分類

テ ー マ	群					
	N		S		合 計	
	人数	%	人数	%	人数	%
家	8	19.5	14	51.9	22	32.4
戦 い	6	14.6	0	0	6	8.8
街	5	12.2	6	22.2	11	16.2
公園・動物園	5	12.2	0	0	5	7.4
田 舎	4	9.8	0	0	4	5.9
風 景	1	2.4	5	18.5	6	8.8
牧 場	3	7.3	0	0	3	4.4
学 校	2	4.9	0	0	2	2.9
アフリカの草原	2	4.9	0	0	2	2.9
庭	0	0	1	3.7	1	1.5
映画のセット	0	0	1	3.7	1	1.5
そ の 他	5	12.2	0	0	5	7.4

被験者にテーマを尋ねたところ Table 5-5 の結果を得た。これらは筆者と似た分類になっている。N群ではテーマの中に、「平和」、「子どもの思い出」といった内容を含ませており、豊かな反応であった。S群では説明も少なく、「家」、「セット」といった答えが多く、その意味づけは明らかでない。また、S群の作品には理解できないものが部分的に置かれることが多かった。

作品を作った後、内観を尋ねたところ、「おもしろかった」、「スーッとする感じ」、「自

分と見つめられた」などとあげていた。これらの感想は、箱庭療法がカタルシスと自己探求に役立つことを示している。

6) 箱の使い方；タテに箱を使用するか、ヨコに使用するかを調べた結果は Table 5-6 である。

Table 5-6 箱の使い方

使 い 方	群			
	N		S	
	人 数	%	人 数	%
ヨ コ	32	78.0	18	66.7
タ テ	9	22.0	9	33.3

有意差なし

χ^2 検定の結果、両群に有意な差はなかった。

箱をタテに使用することは、奥行きが示せるために、通景の作品が多かった。この通景の作品（たとえば作品19、34、68）は「かたい」という感じと対称性を特徴としている。N群のタテに箱を使用した9名中8名のY-G検査の判定は、不安型である。

タテに箱を使用して通景を示すことと、堀り下げることとは「立体感」という点で何か共通点が考えられる。ロールシャッハテストと関係づけるならば、ロールシャッハテストの記号「K」と「f」との関係に類似して

いるようである。

「^{117, 123)}Kは不安、愛情欲求不満を示し、defenceと関係する。FKはそれに耐える力を示す。」また、「KはFKを失敗して、知的なdefenceとした結果として出てきたもので、三次元を二次元に置き変えたものである。」堀り下げることは、立体感をそのまま示したものである(K的)。一方、堀り下げないで、通景にすることによって、立体感を出したのが、タテに箱を使用した場合であるとも考えられる(長的)。たとえば、作品68を作った被験者は、診断は境界例であるが、強迫的で未成熟で、子どもっぽいという特徴を持っている。ロールシャッハテストでは、KFを2個とFKを1個と長F1個を示しており、K(長)反応が多い。

推測の域を出ないが、以上より、箱をタテに使用した通景の作品はロールシャッハテストの長的であり、抑圧された未発達な面がうかがえ、あまり効果的でないdefenceを示

していると考えられる。

このように、箱庭療法の作品の種々の特徴と両群で比較したが、これらが意味するところは、今後、さらに Ego Psychology や他のテスト理論と関係づけながら、理論を展開していく必要がある。筆者が注目するのは Klopfer⁽¹⁵⁴⁾ の理論であり、今後の課題として残しておく。

以上の分析の結果、N群とS群とを弁別しうる有意差のある指標（要する時間、おもちゃの使用数及び種類など）を見い出した。これらは、S群の特徴である非活動性、受動性、関心の狭さ、心的機能の萎縮性（constrict）などとするものであると思われる。今回はN群とS群の比較に終始したが、今後、これらの指標の相互関係をみていくことによって、個人の総合的な面、人格の力動性を調べることができるであろう。

§2. 作品の類型化および診断性

N群とS群とを含めた合計68個の作品を、

18名の治療家のS D法評定の結果から、OsgoodのD-Methodにより、次元抽出を行なった。Table 5-7はその結果である。残余が0に近づき、各作品の負荷量も小さくなったので、第6次元まで抽出した。

Table 5-7 D-Methodによる作品の次元

作品 番号	次 元						作品 番号	次 元					
	I	II	III	IV	V	VI		I	II	III	IV	V	VI
1	17.194	-.795	.701	1.008	.702	.381	35	22.688	.359	1.334	.818	-.410	-.054
2	20.884	-.664	.595	.220	.780	.139	36	20.713	.747	1.702	-.386	-1.161	-.185
3	21.159	.183	.747	-1.123	.007	.206	37	20.738	-.599	.989	1.146	.850	.279
4	18.188	-1.051	.867	1.017	1.469	.523	38	21.103	-1.244	2.223	.315	2.378	-.000
5	17.538	-.823	1.831	-.142	-.166	.607	39	19.979	1.238	1.510	-.114	-.499	.450
6	15.861	1.457	2.069	1.872	-.813	.195	40	19.418	1.431	.916	-1.193	-.259	.344
7	17.166	1.625	2.268	2.641	-.818	-.329	41	15.859	.486	1.443	2.185	1.506	.519
8	21.359	.949	.398	.264	-.505	.131	42	17.732	.485	1.458	1.208	.122	.365
9	17.911	.114	.830	.321	.151	.619	43	21.261	.869	1.735	-.031	.691	-.318
10	15.667	1.433	2.310	3.567	-.000	-.000	44	15.612	-.354	2.201	.796	-.033	.711
11	16.231	4.934	.000	-.000	.000	-.000	45	13.325	.330	2.069	1.981	1.201	.921
12	19.249	.233	-.890	-.454	.555	.154	46	17.418	-.505	1.609	.207	.561	.734
13	20.574	.409	.816	-.185	-.258	-.119	47	14.038	.798	1.739	.927	.830	.747
14	19.016	2.070	2.054	1.438	-.778	-.383	48	15.460	-1.089	1.643	.621	.195	1.103
15	19.029	4.031	1.058	-.141	-.547	-1.002	49	13.383	.110	1.271	2.716	.876	1.443
16	17.456	-.748	2.163	.565	.414	.699	50	14.275	-.845	2.477	.380	.235	1.160
17	16.541	2.603	.368	.246	.155	.269	51	20.341	.162	-.290	-.192	-.083	.128
18	12.925	-.401	2.160	1.184	.800	.970	52	20.785	-1.480	2.891	.140	2.024	.308
19	17.913	-2.151	4.359	-.000	.000	-.000	53	16.396	.056	.935	1.963	-.031	.231
20	21.546	-.404	.506	.478	-.248	.385	54	15.588	1.375	2.690	.650	.141	.488
21	23.511	-.000	-.000	-.000	.000	-.000	55	19.564	.933	.808	.548	.129	-.024
22	19.994	-.479	2.309	1.011	.080	.198	56	19.585	1.845	.533	.102	-.197	-.048
23	22.536	-.618	1.472	-.443	-.066	.102	57	15.346	1.955	1.235	.756	-1.181	.843
24	20.741	.677	.858	.537	.035	-.051	58	18.242	-.129	1.189	1.050	.808	.327
25	20.758	2.182	.843	.671	.111	-.364	59	15.373	-.146	.494	.839	.743	.869
26	19.439	-.434	2.871	.343	1.312	-.143	60	17.588	1.552	2.239	-1.095	-1.075	.551
27	17.280	1.723	2.767	2.250	-.385	-.224	61	14.594	-.224	1.544	1.605	.974	.637
28	13.856	.233	.952	1.023	1.014	1.402	62	11.911	-.045	2.317	1.497	.520	1.969
29	16.393	-.443	2.811	1.721	1.054	.338	63	15.440	-.580	1.179	.172	.278	.828
30	19.996	1.368	.942	.654	-.169	-.261	64	15.412	3.017	.079	.787	.503	-.045
31	18.806	.219	3.129	.138	.476	-.126	65	17.185	-.667	1.735	1.177	.679	.823
32	20.066	-.206	.661	-.295	.770	.301	66	16.252	-.283	2.809	-.774	-.531	.686
33	22.140	-.229	1.053	.357	1.044	.039	67	15.733	.940	.706	.899	.595	.394
34	17.404	-.790	2.979	.709	.405	.780	68	17.840	-.599	3.691	.906	.721	.584

4 位 4 捨 5 入

第1次元は、作品21 (Fig 5-1) に軸 (pivot) とし2、作品23、33、35などから構成

されている次元である。これらは、色彩豊かであり、箱全体が使用されており、構成力も豊かで、立体感も出ている。

これをプロフィールで見ると、Fig 5-2となる。Fig 5-2は作品21、20、23、33、35のプロフィールを平均したものである。

この特徴は「まとまった、女性的、豊かな、のびのびした、開放的、明るい、ノーマルな、にぎやかな、愉快的」の感じがいだかれていることである。

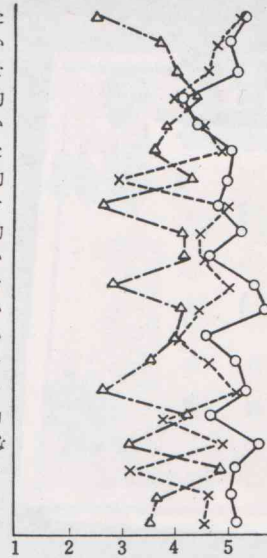
これらと考え合わせ、この第Ⅰ次元の作品群と動的統合性次元のグループと呼ぶ。



第Ⅱ次元は、作 Fig 5-1 オI次元の作品(Nr 21) 品11 (Fig 5-3) を軸として、作品15、17、57、64などから構成されている。この特徴としては、構成力がなく、ばらばらであり、力強く湧き上がってくるエネルギーを感じさせ

るが、acting out 的な、統制力のない力としてであり、統合性が期待されるものである。これらの点から、現実吟味 (reality testing) の弱さが推測され、内的世界的動揺が押えられないように感じられる。

雑然とした
かたいた
貧弱な
女性性的
浅い
こせこせした
静的な
未熟な
閉鎖的
小きい
不安定
暗い
弱しい
空虚な
不調和な
消極的
アブノーマルな
きびしい
緊張した
不愉快な



まとまった
柔らかい
豊かな
男性的
深い
のびのびした
動的
成熟した
開放的
大きい
安定した
明るい
強い
充実した
調和した
積極的
ノーマルな
にぎやかな
くつろいだ
愉快な

○—○ 第I次元 △---△ 第II次元 ×---× 第V次元

Fig 5-2 第I次元 (作品 20, 21, 23, 33, 35) と第II次元 (作品 11, 15, 17, 57, 64) と第V次元 (作品 4, 38, 52) のプロフィール

これをプロフィールで見ると Fig 5-2 となる。この Fig 5-2 は作品 11, 15, 17, 57, 64 のプロフィールを平均したものである。この特徴は「雑然とした、未熟な、不安定な、アブノーマルな、不愉快な」と感じられ、また、「動的、にぎやかな」



Fig 5-3 オエ次元 の作品 (No. 11)

と感じられていることである。前者の印象は否定的であり、後者の印象は肯定的である。これらと考へ合わせて、強いて名づければ、動的であるが、十分統合されておらず、将来の発展が期待される意味で、第Ⅱ次元と動的・非統合可能型グループと呼ぶ。



Fig 5-4 Ⅱ次元の作品(Nr19)

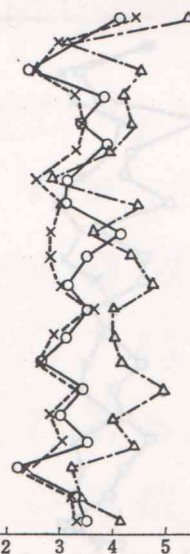
第Ⅲ次元は、作品19 (Fig 5-4) を軸として、作品29、31、34、68などより構成されている。これらはかたく、動きがなく、植物が中心で生物がおらず、また、奥行きが特徴として考えられる。

これをプロフィールでみると Fig 5-5 となる。

Fig 5-5 は作品19、26、31、34、68のプロフィールを平均したものである。これらの特

徴は「まとまった、か
たい、静的な、安定し
た、成熟した、調和し
た、消極的、さびしい
感じがいだかれている
ことである。この次元
は、作品6、7、10の
ように「戦い」の場面
と、作品18、50、54の
ように、かたくて動き

雄然とした
かた弱
貧女性
浅い
こせこせした
静的な
未成熟
閉鎖的
小さい
不安定
暗い
弱虚
空虚
不調和
消極的
アノーマルな
さびしい
緊張した
不愉快な



まとまった
柔らかな
豊か性
深い
のびのびした
動的
成熟した
開放的
開き
大安定
明るい
強い
充実した
調和した
積極的
ノーマルな
にぎやかな
くつろいだ
愉快な

△---△ 第Ⅲ次元 ○---○ 第Ⅳ次元 ×---× 第Ⅵ次元

Fig 5-5 第Ⅲ次元 (作品 19, 26, 31, 34, 68) と第Ⅳ次元 (49, 53, 61) と第Ⅵ次元 (28, 48, 62) の平均プロフィール

がなく「中央にかたまって
いるもの」(Fig 5-6)と、
作品19、34、68のように「対
称性のある通景」との
3つに分けられる。

戦いとして、作品
6、7、10、14、
27も中央にかたま
ったものとして、



作品18、50、54を Fig 5-6 中央にかたまって
いる作品(Nr 54)と
とり出し、これらの7°プロフィールを平均して

Fig 5-7 を得た。

これらは相当異なっており、一つの次元に入れてしまうのは危険である。特に、戦いのほうが「男性的、動的」であることがわかる。また、この戦いは第IV次元とも重なり、特別な意味がありそうである。

これらと強いて名づければ、かたさに注目して、第III次元を硬直型グループと呼ぶ。

第IV次元は作品10 (Fig 5-8) を中心として、作品7、27、

49、53などより構成されている。これらはエネルギーの低下と自閉性が感じられ、リジッドであり、病的で

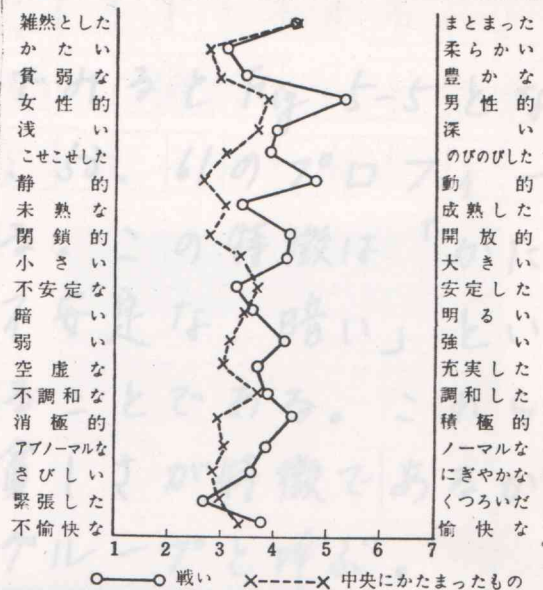


Fig 5-7 戦い (作品 6, 7, 10, 14, 27) と中央 (18, 50, 54) の平均のプロフィール



Fig 5-8 第IV次元の作品 (Nr 10)

ある。

これをプロフィールで見ると Fig 5-5 となる。Fig 5-5 は作品 49、53、61 のプロフィールを平均したものである。この特徴は「かたい、貧弱な、男性的、不安定な、暗い」という印象がいだかれていることである。これらと強いて名づければ、貧しさが特徴であるから、第Ⅳ次元を貧困型グループと呼ぶ。

第Ⅴ次元は、作品 38 (Fig 5-9) 軸として、作品 4、52 などより構成されている。これは植物的であり、静的で、おちついて



Fig 5-9 Ⅴ次元の作品 (Nr 38) あり、いわゆる日本風の感じがする。

これをプロフィールで見ると Fig 5-2 となる。Fig 5-2 は作品 4、38、52 のプロフィールを平均したものである。この特徴は「静的、さびしい」と感じられていることであり、第

I次元のグループと類似するところが多い。これらと強いて名づければ、静的という意味で第V次元と静的統合型グループと呼ぶ。

第VI次元は、作品62 (Fig 5-10) を軸として、作品28、48などより構成されている。これは隅にサクを用いて、囲んでいるかたい防衛型である。



これをプロフィールで見ると Fig 5-5 となる。

この Fig 5-5 は作品28、

48、62 のプロフィールを Fig 5-10 のVI次元の作品 (Nr 62)

平均したものである。この特徴は「貧弱な、静的、さびしい、空虚な」と感じられていることである。これと強いて名づければ第VI次元と積極的防衛型グループと呼ぶ。

以上の第6次元までのグループにはいろいろな作品が残された。これらとまとめて、第VII次元とも考えられる。SD法ではとらえられ

ない範ちゅうにはいるのだろうか。

得られた6次元とN群とS群の関係を調べていく。Table 5-8は各次元の平均負荷量を示したものである。

IV次元以下は小数点以下で負荷量も少ないが、両群と比較するた

めに、IV次元以下も使用したいと思う。

各平均とt検定した結果、第I次元ではN群のほうがS群よりも1%水準で有意に多く負荷しており、第VI次元ではS群のほうがN群よりも、1%水準で有意に多く負荷している。他の次元には有意な差はみられなかった。N群とS群との診断性の手がかりとして、N群は第I次元グループであり、S群は第VI次元グループという指標を得た。しかしN群で作品18、28は第I次元に負荷が少なく、第III, IV次元と関係している。これらの作品は、生物のいない、さびしいものであり、地面

Table 5-8 各次元の平均と標準偏差

次 元	群				t 検定	
	N		S			
	平 均	S.D.	平 均	S.D.		
I	18.947	3.692	16.507	2.334	*	*
II	.454	1.378	.277	1.015	ナ	シ
III	1.438	1.015	1.592	.900	ナ	シ
IV	.591	.959	.735	.806	ナ	シ
V	.219	.728	.349	.656	ナ	シ
VI	.166	.412	.608	.480	*	*

* 5%, ** 1% 水準で有意

にへばりついたような平板な感じがする。これが何を意味するかは、さらに他のテストとの関係などから調べ、診断性を高める必要がある。またS群で、第1次元に負荷のある作品は、43と51と52である。作品43は診断が躁うつ病(MDI)であり、作品を作ったときは回復直前の元気な状態で、一時的な軽ソウであった。これが反映されたためか、使ったおもちゃの数は多く、にぎやかで、感じのよいものとなった。また、作品51は非定型精神病患者の作品であり、ほとんど回復している。作品52は妄想型分裂病患者の作品であったが、現在は非常に落ちついている。これらの事例は回復力があると考えられているものである。さらにS群、N群の区分のしかた、箱庭療法の作品の示す内容なども考慮しなければならない。わずかの診断性は得られたが、もっと他の要素、たとえばテーマなどを加味すれば、各次元で診断性が高くなるのではないだろうか。

§3. 対形容詞の次元抽出および診断性

N群とS群のグループ分けがかなり可能であることを示したが、次に、これらがどのscaleと関係が深いかを調べるために、OsgoodのD-Methodによって、18名の被験者の結果から、対形容詞の次元抽出を行なった。負荷量も少なくなり、残余も0に近づいたので、第4次元までとめた。その結果はTable 5-9である。

第I次元は

Table 5-9 対形容詞の次元

「雑然とした

—まとまった

を軸として、

「不安定な—

安定した」

「不調和な—調

和した」など

から構成され

ている。これ

らはまとまり

安定性、調和性を示しており、Integration

scale		次 元			
		I	II	III	IV
雑然とした	—まとまった	37.003	-.000	-.000	-.000
不調和な	—調和した	34.708	2.296	-.687	1.310
不安定な	—安定した	34.144	3.352	-1.447	1.161
暗い	—明るい	35.886	7.240	-.752	2.132
アブノーマルな	—ノーマルな	34.660	4.658	-.837	2.126
さびしい	—にぎやかな	31.044	11.446	.000	.000
貧弱な	—豊かな	32.917	7.653	-.602	.491
空虚な	—充実した	32.480	6.611	-.605	.964
静的	—動的	30.362	9.038	2.790	2.064
消極的	—積極的	31.978	6.932	2.134	1.232
女性的	—男性的	33.210	4.314	6.823	-.000
浅い	—深い	32.371	4.326	2.582	.712
小さい	—大きい	33.790	5.698	2.323	1.949
弱い	—強い	31.264	5.954	2.165	.738
閉鎖的	—開放的	33.738	6.008	2.104	5.992
こせこせした	—のびのびした	33.646	4.163	1.271	4.059
緊張した	—くつろいだ	31.949	5.663	-.767	4.014
かたい	—柔らかい	30.869	6.187	-.158	3.905
不愉快な	—愉快的な	33.937	5.057	-.067	2.271
未熟な	—成熟した	31.934	3.115	-.468	1.416

小数第4位4捨5入

Dimension (統合性次元) と名づける。

第Ⅱ次元は、「さびしい—にぎやかな」を軸として、「貧弱な—豊かな」、「空虚な—充実した」などから構成されている。これは豊かさ、充実性、量、動きなどを示しており、Abundant Dimension (充実性次元) と名づける。

第Ⅲ次元は、「女性的—男性的」を軸として、「浅い—深い」、「小さい—大きい」、「弱い—強い」などから構成されている。これは、大きさ、強さなどを示しており、Magnitude Dimension (力量性次元) と名づける。

第Ⅳ次元は「閉鎖的—開放的」を軸として、「かたい—柔らかい」、「こせこせした—のびのびした」、「緊張した—くつろいだ」、「不愉快な—愉快的な」などから構成されている。これは、感情、態度などを示しており、Flexibility Dimension (柔軟性次元) と名づける。

「未熟な—成熟した」の scale がどの次元

にも負荷しなかった。また、「暗い—明るい」は第Ⅰ, Ⅱ, Ⅳ次元に重複して負荷していた。前者の scale は内的世界の投影である箱庭療法の作品には適していなかったのかもしれない。また、後者の scale は写真のとり方によって、明暗が左右されたり、その材料の色彩によっても、左右されるという面があったことはみのがせない。これらの scale の妥当性などをさらに研究して、箱庭療法の評定の S-D 法をより科学性の高いものにしていきたい。

これらの次元と作品のグループとを対応させるために、Table 5-10 を求めた。

これは、グループの Table 5-10 次元間の関係

代表的な作品の次元を平均したものである。動的統合型グループ(第Ⅰ次元)は各次元の肯定的な面を持つものである。他と比べて、少し力量次元の負荷は少ないが、すべての次

作 品	対 形 容 詞			
	I	II	III	IV
I	5.39	5.17	4.44	5.06
II	2.69	4.19	3.65	4.21
III	5.05	3.98	4.25	3.48
IV	3.91	2.43	3.51	3.49
V	5.17	4.14	4.23	4.82
VI	3.60	2.59	3.05	3.18

対形容詞Ⅰは(1)(11)(15) scale, Ⅱは(3)(14)(18), Ⅲは(4)(10)(13), Ⅳは(2)(6)(19) scale を平均した。作品Ⅰは作品番号(20)(21)(23)(33)(35), Ⅱは(11)(15)(17)(57)(64), Ⅲは(19)(26)(31)(34)(68), Ⅳは(49)(53)(61), Ⅴは(4)(52)(38), Ⅵは(28)(48)(62)を平均した。

元と関係している。これは、まとまった、にぎやかな、豊かな、やや大きい、開放的な、柔らかい感じのいだかれるグループであり、N群の作品が有意に多く属している。動的非統合可能型グループ（第Ⅱ次元）は統合性次元が低く、力量性も他と比べれば少し低い。これは、雑然とした、不調和な、やや小さい感じがいだかれている。多くのおもちゃを使用している作品が多いことなどから、統合性はないが、柔らかさや、豊かさが感じられ、まだ統合されていない可能性がある。成長期の子どもなどはこのような状態ではないだろうか。したがって、どちらかというと、N群の作品がはいっておかしくないグループだと思う。硬直型グループ（第Ⅲ次元）は統合性の負荷は高く、まとまった感じは与えるが、柔軟性次元で低く、閉鎖的な、こせこせした、かたい、緊張したものが感じられる。この次元は「戦い」と「中央に集まるもの」と「通景」との3テーマに分かれる。N群には「通

景」と「戦い」の作品が多い。たとえば、この「かたい、緊張した」感じは、「通景」においては、左右対称であり、幾何学的で、がちりした感じから出てきたものであり、ロールシャッハテストの知的なdefenceと対応するかもしれない。一方、「戦い」においては、力を出そうとする対決における緊張であり、そのかたさをも思わせるともいえる。一方、S群の作品は「中央にサクで囲まれた」ものが多く、こせこせした、かたい、緊張した感じは、そのまゝ心的な緊張とかたさをも思わせる。このように考えると硬直型グループの診断性も高いものにしていけよう。貧困型グループ（第IV次元）は、統合性次元で中央に近いが、あとの各次元の負荷は、低いことがわかる。特に、充実性次元は低く、さびしい、貧弱な、小さい、閉鎖的な感じがいだかれる。作品は、さのようにN群の内容とS群の内容とはよく似ているのもあり、N群にもS群的なものがあることを示す。これは、S、N群の区別の

基準の問題も含んでおり、内的世界を示すテストバッテリーと組み合わせることによって、箱庭療法の内容を明らかにしていかなければならない。またこれは積極的防衛型グループと似ており、S群の作品の多い次元と考えられる。静的統合型グループ（第V次元）は統合性次元で高く、他の次元も高いが、動的統合型と比べると充実性が低い。即ち、「さびしく、静かに」感じられている。これは、生物がおらず、そういった意味での否定的なさびしさと、日本的な肯定的な静けさを示していると思う。積極的防衛型グループ（第VI次元）は各次元の負荷が低く、特に、充実性が低い。さびしい、空虚な、小さい、閉鎖的な感じのものであり、S群の作品のはいるグループであると思う。

第II、III、IV、V次元は平均では両群で有意な差がみられなかったが、その次元の示している多元性のためであり、内容とか次元の負荷量の動きで診断がかなり可能である。

対形容詞の負荷量の平均をN群とS群で比

較した。Table 5-11はその結果である。

第I次元の統合性と Table 5-11 対形容詞の次元の平均と標準偏差

第IV次元の柔軟性とは
t検定の結果、5%水
準で有意にN群のほう
がS群よりもより高い

次 元	群				t 検定
	N		S		
	平 均	S.D.	平 均	S.D.	
I	4.40	.77	3.95	.62	*
II	4.24	.84	3.51	.82	**
III	4.18	.45	3.78	.45	**
IV	4.13	.69	3.67	.57	*

* 5%, ** 1% 水準で有意

負荷である。また、第II次元の充実性次元と
第III次元の力量性次元とは、t検定の結果、
1%水準で有意にN群のほうがS群よりもよ
り高い負荷である。これらの各次元は両群で
有意な差があり、各次元の診断性の高いこと
がうかがえる。S群の作品は統合性がなく、
空虚で、萎縮しており、柔軟性がないと思わ
れる。

要約すると、対形容詞の4つの次元におい
て、低い値をとるものは、S群の作品である
が、すべての次元で低いのではなく、どれか
の次元で高くなる。これは、たとえば、エネ
ルギーの低下によって、かたく感じられても
、それはまとまった感じを与えることなど

のためである。診断のためには、充実性と力量性と柔軟性が有効であるが、特に、「貧弱な—豊かな、空虚な—充実した、さびしい—にぎやかな」の柔軟性次元が、診断の焦点となる。

第4節 まとめ

本研究で明らかになったことと箇条書に示すと次の通りである。

(1) 作品を制作する所要時間はN群の方がS群より長い。

(2) 立体感を示す高さはN群とS群では差がないが、N群の方がS群より掘り下げる程度はより深く、砂に接触する人数はより多い。

(3) 使用された玩具の数はN群の方がS群より多い。

(4) 攻撃性を直接的に示す作品はN群に7個あったが、S群にはなかった。

(5) SD法評定によって6次元（動的統合型、動的非統合可能型、硬直型、貧困型、静的統合型、静的非統合可能型）

合型、積極的防衛型次元)が抽出された。

(6) N群は動的統合型次元のグループに、S群は積極的防衛型次元のグループにほいる作品が多い。

(7) 対形容詞の4次元(統合性、充実性、力量性、柔軟性次元)が抽出された。

(8) N群は対形容詞の各次元にS群より高い値を示す。

以上、N群とS群とを区別する若干の診断的側面の手がかりが得られた。また、テーマや玩具の象徴的意味を考慮すれば、さらに診断性は高まろう。

第 6 章

イメージに関する研究
—動物イメージに関する—研究—

第 1 節 問題と目的

心理療法において患者が話すことには、日常的にみえる話の内容でさえ、そこに深い意味が含まれていることがある。例えば、「昨日、皿を割りました」と言った時、文字通りにとれば、患者の昨日の出来ごとの一つを述べているだけである。しかし、わざわざ、今、治療者の前で、その話をしたこと、患者にとって、言語表現をしたこと以上の意味を表現しているかもしれない。また、青年期の高校生や大学生の場合、青年期特有のほろかしさ、話しにくさなどから、彼らは言葉で直接訴えるよりも、多様な表現を用いて、彼らの気持を伝達しようとする。例えば、ある大学生は、

「鳩を飼っている。大学にも行かず、鳩を飼って、毎日と過している。」鳩を飼っていることは、経済的利益を得るためにしているのではない。むしろ、親から愛情をうけたい願望、あるいは、親と彼との関係の改善の要求を表現していたと思われる。このように、まったく個人的、主観的であっても、そこで使われた言葉には事柄を表象する記号としての役割だけにとどまらない働きが認められる。このような働きは浅いレベルでの象徴と考えられる。

S.フロイトは、⁵⁰⁾夢において、顕在化されたものと夢の中に含まれる潜在化されたものと対比が問題であることを指摘して、潜在化された内容を示すための手段として象徴を考えた。これは深いレベルでの象徴と考えられる。

筆者は、浅いレベルから深いレベルまでの間に、象徴の層を仮定、その層から出現してくる象徴の様相も研究しようとする。

象徴の定義として、C.G.ユング⁽¹⁰²⁾は、「象徴は、比較的未知ではあるが、その存在が認められているか、もしくは存在すべきものとされているある事態の呼称ないしは、形式としては最上であることを前提とし、心理的な段階にあるため、言葉ではどうにもうまく表現し得ないような事態を表現するもの」と述べている。ここではこの定義に従う。また、大学生の鳩のように、象徴化された個々の像、即ち、無意識にあるものを意識化する過程で、象徴化されて現われてくる像をイメージと考える。

イメージの定義として、40ページで述べたように、C.G.ユング⁽¹⁰²⁾の言う「外的客体の知覚とは間接のつながりしか持たない、無意識的活動にもとづく像」としておく。河合⁽¹²⁹⁾は、イメージについて、「無意識の心の動きが意識によつて、ある程度把握されるとき、それはイメージとして示される」とし、その働きは、「イメージは心の潜在的な動きを示している。

それは無意識内に蓄積されていた心的エネルギーが、イメージというものと通じて、自我の支配可能なエネルギーとなって変遷してくることを示す。」と述べ、心理療法との関係においては、「このような心的エネルギーの表現と秩序づけが心理療法であり、イメージは意識に対して、その意味づけと体系化も可能にし、体験させる作用をもつ」と考えている。イメージの定義、働きは上記の引用で説明されるが、イメージの研究は数少ない。D.カル¹¹⁾フは、心の表現としてのイメージの意味、内容が、神話や伝説などで表わされるものと類似していることから、歴史的視野から研究している。例えば、動物イメージの研究の中でキツネをとり上げ、ウサギとの対比において、キツネのイメージが人々の心にどのように位置づけられていたかを東洋と西洋との違い、時代差などから考察している。彼女の研究は史料に基づく研究であるので、イメージの一面を説明しているが、例えば、「何故、キツネ

が超自然の力を持つものとして、人間の心にイメージ化されたか」を説明し得ていない。即ちイメージ化されていく過程が説明されていない。ここでは、この過程を重視して、問題とする。

記憶の研究テーマの1つとして把持印象の質的変容がある。その中で「フクロウの再生図」にみられるように「不規則なものは規則的に単純化され、図形の特徴的なところはより一層強調される。」などの法則性が主張されている。このような変容過程と筆者は、イメージが作成されていく過程に見い出そうとする。即ち、外的客体のいかなる特徴が強調されるか、無視されるかを調べることによって、イメージの内容を明らかにしようとする。D. カルフは、歴史的にイメージの内容を示しているが、筆者は、横断的に、SD法による動物の印象と、IMQに用いられる動物の理由づけをもとにして、動物本来の生物学的特徴と象徴理論による意味づけとの関連を明確に

しつづ、両投影的質問紙の次元での動物イメージを考察する。

筆者が動物ととりあげたのは次の理由による。(1)本研究のテーマである箱庭療法において、動物のミニチュアは重要な役割をはたしてきている。その意味を理解するために個々の動物のイメージを明らかにしなければならない。D.カルフは箱庭療法において、「動、植物段階」という段階を仮定し、その段階は本能的、衝動的な内容を示すと考えている。この段階を検討し、それが果たす役割を理解するためにも、動物イメージについて考察していかなければならない。(2)象徴の媒体となるものは、無生物、植物、動物の3つに大別して考えられる。無生物、植物は、たとえ生命活動を営んでいても、静止したものであり、活動性に欠ける。一方動物は動きがあり、活動性は豊かで感情表現も可能である。このため、動物は人間の内界を投影するものとして、Projective Testにもよく使用されてきており、

重要な研究対象である。(3)動物は人間の属性を象徴するのに適し、擬人化されている。例えば、日本昔話の中の動物昔話の中に示される動物は喜び、悲しみ、語り合うなどの特徴を持っており、ことなどから人間と動物の関係の深さに着目し、動物の象徴を重視し、本研究でとりあげた。

S D法^(注1)はSemantic Differential法として、Osgood²⁴⁾によって、共感の研究から発達させられた。内包的意味をも測定し得る測定法である。これは、対形容詞によって、量的に示し得る利点をもっている。また、S D法は対形容詞の尺度空間に各概念を位置づけることによって、概念間の関係をも調べ得るものである。これは表面的な意味内容だけでなく、一歩イメージ化された概念の意味を示すと考えられる。従って、S D法レベルでのイメージ化された動物を測定することが出来るだろう。

IMQ^{296~299)}はImage Questionの略である。これは連想、自己像、象徴の3つの点に注目し、

なお、心理療法との関係も加味して、心理療法の効果判定と自己像の変化によってとらえようとして作られた Paper Pencil Projective Test である。自己像、両親像と連想機制によってとらえ、無意識的な反応を得、その理由づけをさせることによって意識化させようとしたものである。このように仮定された反応機制は、実際には指定項目、個人などにより異なっているようだ。むしろ、自己像の意識的な理由づけが先行して、それに見合う動物名が考えられたのではないかと推論されるような結果も出てきている。さらに基本的には、IMQ が何を示しているかの考察も必要であり、IMQ のデータの集積もしていかなければならない。しかし、ここでは、それらに触れず、IMQ レベルでの動物イメージをとらえようとする。

従って目的は IMQ と SD 法の両投影法的質問紙における動物イメージの特徴をとらえ、その差違を明確にすることである。

第2節 方法

§1. IMQにおける動物イメージの収集

a. 実施方法：自由記述の方法でIMQ用紙（付表5参照）に記入させる。なお、IMQ用紙の最初の空欄に、項目(1)(4)(7)(8)には「動物」、(2)(5)(9)(10)には「植物」、(3)(6)(11)(12)には「動植物以外」を指定する。

b. 被験者：男女大学生各100名（1.ス回生）（男子：K大学、女子：K大学とN大学）

c. 分析対象：IMQ質問紙において、動物の出現するのは、(A)(B)(1)(4)(7)(8)の6項目である。出現可能な総数は6項目×ス群×100人の1,200であるが、同一人が同じ語を使う可能性が低いこと、「似ている」と「似ていない」、父親像と母親像に同じ語を使う可能性が低いことなどから被験者数200を分析の母数とみなした。母数の $\frac{1}{6}$ 即ち頻度20を基準として、IMQのポピュラーな出現反応とした。ポピ

ユラ一な反応である12匹に加えて、ブタ(18)、トラ(17)、シカ(17)を加えて、15匹の動物イメージについて分析する。

§2. S D法の資料収集

a. 尺度：筆者が以前に使用した20個の尺度を使用した。

Table 6-1 使用した尺度

1. まとまった—難然とした	11. 安定した —不安定な
2. かたい —柔らかない	12. 暗い —明るい
3. 貧弱な —豊かな	13. 弱い —強い
4. 女性的 —男性的	14. 充実した —空虚な
5. 深い —浅い	15. 不調和な —調和した
6. こせこせした—のびのびした	16. 積極的 —消極的
7. 動的 —静的	17. アブノーマルな—ノーマルな
8. 未熟な —成熟した	18. にぎやかな —さびしい
9. 開放的 —閉鎖的	19. 緊張した —くつろいだ
10. 小さい —大きい	20. 愉快な —不愉快な

(S D法によるサンドプレイ技法の研究
臨心研、1969)²¹⁹⁾

Table 6-1 は

20個の尺度を示す。実際に使用するに際しては、これらと左右、上下に入れかえた4種類の用紙を用意した。これらの尺度を使用したのは、将来、箱庭療法の研究とも関係づけるためである。またすでに、上記の尺度も十分 Osgood²⁴⁾、相良²⁵⁾らの因子と関係づけられており、妥当と考えられた。7段階評定である。

b. 概念：IMQの頻度の高いものとして選ばれた15匹の動物に、ヘビ、カエル、カバ

の3匹を加え、計18概念を評定させた。ヘビ、カエル、カバを加えたのは、夢、箱庭療法でよく出現し、ターニングポイントで重要な役割を演じている動物であるからである。

c. 被験者：箱庭療法に興味、関心をいだく成人110名。概念として同時に、IMQの「動物」「植物」「動植物以外」で頻度の高い選出された58概念について評定させた。尺度数20を考慮して、1被験者につき10概念とした。回収不能者、評定不備を除いたため、概念によって、被験者数は異なり、11～14名であった。

d. 日時：1970年11月

e. 教示：各ページの上に長方形に囲まれて、動物、植物、自然などの名前があげてあります。これらの名前からうける第一印象を下にある対形容詞で評定して下さい。各対形容詞を抜かさないように、第一印象をつけるようにして下さい。

第3節 結果と考察

§1. IMQにおける動物イメージ

IMQの6項目における出現頻度はTable 6-2である。

Table 6-2 動物像の種類と出現頻度

性 項目 反応語	Male								Female								合 計
	(A)	(B)	(1)	(4)	(7)	(8)	Σ		(A)	(B)	(1)	(4)	(7)	(8)	Σ		
サル	10	0	15	6	10	7	48		0	0	5	4	4	1	14		62
ウシ	1	0	6	3	5	5	20		2	0	16	4	6	7	35		55
ライオン	0	1	4	12	11	4	32		0	0	0	8	15	0	23		55
イヌ	2	0	2	6	8	5	23		2	0	4	7	8	9	30		53
ネズミ	3	1	7	3	2	2	18		2	0	5	4	3	11	25		43
ネコ	0	0	6	1	0	6	13		1	0	14	5	1	7	28		41
ウマ	3	0	6	1	8	7	25		0	0	1	2	8	0	11		36
ゾウ	0	0	1	8	2	2	13		0	0	3	8	6	3	20		33
イノシシ	0	0	5	1	7	0	13		1	0	2	1	6	1	11		24
クマ	0	0	3	0	7	2	12		0	0	0	1	7	1	9		21
アリ	0	1	0	2	3	5	11		0	1	0	4	2	3	10		21
キリン	1	0	4	2	1	0	8		0	0	5	6	0	1	12		20
ブタ	0	0	1	3	1	3	8		1	0	3	3	0	3	10		18
トラ	0	0	1	4	5	0	10		0	0	0	2	4	1	7		17
シカ	0	0	3	2	1	1	7		0	0	2	5	0	3	10		17
計	20	3	64	54	71	49	261		9	1	60	64	70	51	255		516

Table 6-2は、サル(62)が一番多く、ウシ(55)、ライオン(55)、イヌ(53)と続き、シカ、トラ(各17)までに15匹の動物が使用されたことを示す。各項目(1)、(4)、(7)、(8)は15匹の動物で49%~71%まで占められている。自己像、

両親像に使われる動物イメージは、極端に特定の動物に集中するのではないが、相当絞られて用いられていることがわかる。概して、身近な動物、知名度の高い動物、哺乳動物が使われている。Henley (1969)⁷⁵⁾の研究では、

「21名の大学生に、10分間に思いつく動物を連想させたところ、半分以上の被験者が思いついた動物は29匹であり、その内哺乳類は26匹で、90%に相当した。」と報告しており、この結果と一致している。多数の被験者が共通して思いつく動物は、哺乳動物であることを示している。分析理論で重視され、夢や箱庭などで、重要な役割を演じているヘビ、カエル、カバなどが入っていないことは興味深い点である。心理療法場面のような内的な世界を深く問題としない普通の状態では、哺乳類が思いつかれやすいと考えられる。自己像、両親像を示す場合には、「よい、悪い」「好き、嫌い」などの評価の感情が入り、気持ちのよいものを使うという単純な基準に従うこともあ

るだろうし、さらに、精神の発達と動物の進化とを対応させ得るならば、両種類などより、より発達した高等哺乳類が自己像、両親像のイメージとしてピッタリくるのかもしれないと思われる。

Table 6-2より、サルは女性よりも男性の被験者により多く使われており、ウシ、ネコは男性より女性の被験者により多く使われていることがわかる。また、サル(21)は男性の自己像と関係しており、ウシ(20)、ネコ(19)は女性の自己像と関係している。箱庭療法ではサルは、木の上から見ている観察者(observer ego)として用いられたり、患者自身が行動する前に、サルに偵察させ、安全をたしかめ、それから、自分が行動し出すケースなどにみられる。IMQでは、サルは、「人間に近いから」と生物学的に、単純に同一視して用いられる場合が多かった(Table 6-3参照)。

ライオン(26)、ウマ(16)、イヌ(16)、サル(14)、クマ(14)、イノシシ(13)は父親像として、イヌ(14)、

ネコ(13)、ネズミ(13)は母親像として用いられている傾向がある。ところで、家族像を動物イメージでとらえようとした三宅¹⁸⁰⁾の論文では、使われる動物の種類も違い、被験者が子供である違いもあるが、ライオンは父親像として、ウマは兄として、ネズミは妹として使用されがちである結果を報告している。IMQでは、ライオンは、「強い存在で、堂々としている。」や、攻撃的な強さだけでなく、権威をも含んだもの「百獣の王の如く強い生物」や愛情深いもの「家族をこよなく愛している。」などとして理由づけられている。ライオンは子供と大人とで同じようなイメージ化がなされていると思われる。ネズミは、IMQでは、母親像と結びつき、「よく働く」の理由づけで代表されるように、ネズミの小まわりのきく動きが生活習慣と結びついて用いられている。一方、三宅の結果は、この動きと、過度な落着きのない動きとみなし、ネズミを妹とみたりしているのだろう。また、ネズミが小さい動物

である点も妹にイメージ化される要因かもしれない。IMQでは、母親像に使われており「小さい」という属性は余り強調されていない。これは、年齢による差か。あるいはIMQの反応レベルの特徴か、ここで断定することは出来ないが、IMQの反応の使われ方では、ネズミの「小さい」という属性が無視されたことは注目したい。

A.H. Buss & A. Durkee (1957)²³⁾の研究では、父親、母親に「Loving (愛情ある)、Dominating (支配的な)、Cruel (残酷な)」の3つの形容詞を語頭につけて、動物を6分類させた結果、Lovingな母親として、雌牛、ネコなどをあげ、Dominatingな父親に、ライオン、ゾウ、雄牛などをあげている。この結果は、Table 6-8と概略一致している。Cruelなものとしては、母親像、父親像ともにワニ、ヘビ、クモなどがあげられ、分化していない。これらの動物は、父、母親像として適しているからというより、気持の悪い感情が残酷と結びつ

いて、使われているようだ。

IMQでのオピニオンな出現動物と指摘したが、どのような理由づけで使われるか検討していく。

Table 6-3 は15匹の動物イメージの理由づけの分類を示す。

Table 6-3 動物イメージの理由づけと見られ方

理由づけ 動物名	(1)		(2)		(3)		(4)		(5)		(6)		その他		P		N		中	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
サル	7	11.3	3	4.8	10	16.1	0	0	5	8.1	37	59.6	0	0	10	16.1	20	32.3	32	51.6
ウシ	2	3.6	8	14.5	8	14.5	3	5.5	2	3.6	31	56.4	1	1.8	32	58.2	21	38.2	2	3.6
ライオン	0	0	2	3.6	0	0	1	1.8	1	1.8	51	92.7	0	0	43	78.2	11	20.0	1	1.8
イヌ	1	1.9	2	3.8	5	9.4	2	3.8	3	5.7	38	71.7	2	3.8	28	52.8	20	37.7	5	9.4
ネズミ	5	11.6	5	11.6	13	30.2	0	0	2	4.7	16	37.2	2	4.7	15	34.9	19	44.2	9	20.9
ネコ	3	7.3	0	0	6	14.6	2	4.9	0	0	30	73.2	0	0	12	29.3	19	46.3	10	24.4
ウマ	13	36.1	7	19.4	2	5.6	1	2.8	0	0	13	36.1	0	0	24	66.7	4	11.1	8	22.2
ゾウ	9	27.3	1	3.0	1	3.0	3	9.1	0	0	19	57.6	0	0	23	69.7	1	3.0	9	27.3
イノシシ	2	8.3	0	0	3	12.5	0	0	1	4.2	18	75.0	0	0	9	37.5	13	54.2	2	8.3
クマ	5	23.8	2	9.5	2	9.5	1	4.8	0	0	11	52.4	0	0	12	57.1	5	23.8	4	19.0
アリ	1	4.8	0	0	11	52.4	0	0	0	0	9	42.9	0	0	19	90.5	2	9.5	0	0
キリン	18	90.0	0	0	0	0	0	0	1	5.0	1	5.0	0	0	4	20.0	0	0	16	80.0
ブタ	13	72.2	1	5.6	1	5.6	1	5.6	0	0	2	11.1	0	0	1	5.6	9	50.0	8	44.4
トラ	0	0	2	11.8	1	5.9	0	0	0	0	14	82.4	0	0	7	41.2	8	47.1	2	11.8
シカ	4	23.5	3	17.6	1	5.9	1	5.9	0	0	8	47.1	0	0	12	70.6	4	23.5	1	5.9

なお、この分類方法は、梅本、^{296~299)}河合らの発表による暫定的分類を使用した。即ち、(1)外貌(容姿、体格、服装など)、(2)身体運動、活動性、(3)行動的習慣、生活習慣、(4)雰囲気、(5)能力(知的、その他の面での成就に関する

能力)、(6)人格、性格及び(7)その他の7分類である。

外貌面でイメージ化されやすい動物は、麒麟(90.0%)、ブタ(72.2%)をはじめ、ウマ、ゾウなどである。背の高さ、太さ、外姿のよさ、大きさなどの生物学的属性がそのまま、強調されて、イメージ化されている。例えば、ブタは、「太っている」「よく肥えた顔をしている」と理由づけられ、「太さ」が強調されている。アリ、ネズミなどの小さい、細い特性が、外貌の理由づけに投影されることは少ない。これは肥満児として「太い」ことも問題にはなっているが、劣等感として人格の発達に深刻な影響を及ぼしているケースとしては「小さいことや背の低いこと」の方が多い。このように「小さい、背が低い」ことは決定的に悪い評価と結びつく。しかし「太い」ことはそれ程でもない。これがIMQの自己像の理由づけに「太い」ことは使えるが「小さい」ことは軽々しく使えなかったのだろう。

活動性、身体運動の理由づけで用いられているのは、割合は低いが、ウマ（19.4%）、シカ（17.6%）、ウシ（14.5%）が「俊敏」、「敏捷」、「のろま」などから使用されている。行動的習慣、生活習慣を示すものとしてイメージ化されているのは、アリ（52.4%）、ネズミ（30.2%）、サル、ネコ、ウシなどである。例えば、アリは、「とてもよく働く」「こまめに働く」と理由づけられていた。

零風気を示すものとしては、動物イメージでは少ない。零風気は「はてな」のように、全体的な感じの理由づけであり、植物で多く用いられることが示されている。能力の理由づけに入る動物イメージも少ない。

人格・性格を示すものとしてイメージ化されやすい動物は、ライオン（92.7%）、トラ（82.4%）、イノシシ（75.0%）、ネコ（73.2%）、イヌ（71.7%）などである。ブタ（11.1%）、キリン（5.0%）を除いて、ほとんどの動物が人格・性格を示すものとして分類される。例

えは、イノシシは、直線的な突進が、そのまま行動面では強調されず、人格・性格面に力点が移って、「より単線な一面をもっている。」として理由づけられる。父親像に多く用いられ、Negativeな面が強く、父親のガンコ、徹底さを示すものとして適しているようだ。分析理論³⁰⁾では、イノシシは、「衝動的、恐怖を知らない、大胆な力を示すもの」と「神聖な動物」として、衝動、精神の二面性をもつものとされている。IMQの理由づけでは、前者の意味合いが含まれて使用されたようである。ライオン、トラ、イノシシなどは、高い割合で、生物学的属性が、そのまま人格、性格面に投影されている動物である。動物によって、イメージ化される面が相当異なることが明らかになった。

築島(1949)³¹⁾は、象徴と客体との関係によって、階層的段階に、4分類している。その中で、類似性の条件による意味関係と、類縁的経験を引きかけとした意味関係をあげてい

る。IMQの理由づけで、例えば、キリンが外貌に、トラが人格・性格面に理由づけられたのは、キリンが類似性の意味関係で、浅いレベルのイメージ化であり、トラが類縁の意味関係で、深いレベルのイメージ化とも考えられる。

各動物がどうみられているかの判断を Positive (P) Negative (N) Neutral (中) で示したのが Table 6-3 である。この判断は、動物を好ましく、よいと思っているもの、例えば、「スマートで行動的」、「まじめ」などと (P)、動物をいやなもの、好ましくないと思っているもの、例えば、「非常に神経質」、「きたない」などと、(N) 中性的、客観的なもの、例えば、「人間」などと (中) とした。これは、以前の IMQ^{296~299)}の研究での feeling tone として考えた Positive, Negative, Neutral とはちがっている。IMQの研究に於ては、自己感情のあり方であり、この場合は、動物そのものの見られ方である。

なお、信頼性をみるために、ランダムに100個の理由づけをとり出し、筆者以外のものに、Positive、Negative、Neutralに3評定させた。100個の内、一致数は(87)であり、不一致数は、「中 \leftrightarrow N」の不一致数(5)、「中 \leftrightarrow P」の不一致数(6)、「N \leftrightarrow P」の不一致数(2)の計(13)であった。NegativeとPositiveと正反対に判断されたのが8個と非常に少なく、Neutralとの不一致が11個であり、一致数は87であることから、この判断は十分信頼出来るものである。なお不一致については、再検討して判断した。

Positiveに見られているのは、アリ(90.5%)、ライオン(78.2%)、シカ(70.6%)、ゾウ(69.7%)、ウマ(66.7%)などである。アリは「勤勉」「せっせと働いている」ともと「働きアリ」の勤勉さが強調されて、用いられている。分析理論³⁰⁾では、「踏みつぶされやすいもの」の意味があるが、「小ささ」の欠点をNegativeにとられ、IMQの理由づけと少しちがう。シカは「すばやい」「優雅」などとPosi-

tiveに理由づけられている。Negativeにみられているのは、イノシシ(54.2%)、ブタ(50.0%)、トラ(47.1%)、ネコ(46.3%)、ネズミ(44.2%)などである。ブタは、例えば、「体が太っていて、動作が鈍い」などである。ネコは「きまぐれ」「甘えんぼ」などとNegativeに理由づけられていた。トラは「攻撃的」「気が荒い」などと、トラのずるさ、獰猛さ、攻撃的特性がそのままNegativeに用いられている。緘黙児の治療中に否定的な母親像を示すためにトラの絵が描かれたことがある。^(注1)「最初イヌの顔を書いていた患者は、遊戯治療の経過とともに、イヌの顔を、目を鋭く、口をきつく、ヒゲをばやして、トラに変化させていった。」(Fig.6-1参照)これは、その子に対する母親の態度を反映していた。さらに推測すれば母親自身の内的世界が子供に対してだけでなく、すべてに対して否定的になっていたことの反映かもしれない。日常生活では母親はその患者とかわいがって、だまかかえていた。し



Fig.6-1 イヌの絵(ある緘黙児)

(注1) 筆者の未発表ケース

かし、カウンセリングがすすむにつれて、その子とつきはなすようになってきた時に、患者は、その態度に対処するかのうように、この絵を書いたのである。」



Neutral なもの

は、キリン (80.0 Fig 6-1 トラの絵(ある威嚇見))

%)、サル (51.6%)、ブタ (44.4%) などであり、外貌の理由づけ(1)に多い。サルだけは、単純な同一視の人格・性格を示す理由づけ(6)に多い。IMQの理由づけをもとにして、動物イメージと属性などから考察してきたが、次にSD法によって内包的な動物イメージをとらえる。

§2. SD法による動物イメージ

Table 6-4 は各動物間の Pearson の相関を示したものである。相関係数が .80 以上は「ゾウーウシ」「ライオーンートラ」の二組がある。「ゾウーウシ」は、プロフィールでみると、ゾウはウシより「豊かな、のびのびした、成

Table 6-4 動物間の相関マトリックス

	クマ	カエル	ゾウ	ウマ	イヌ	イノシシ	ネズミ	キリン	ブタ	トラ	アリ	ネコ	シカ	カバ	サル	ウシ	ライオン
クマ	1.00																
カエル	-.57	1.00															
ゾウ	.54	-.41	1.00														
ウマ	.06	.00	.02	1.00													
イヌ	-.36	.58	-.46	.50	1.00												
イノシシ	.20	-.24	-.51	.23	.30	1.00											
ネズミ	-.38	.45	-.78	.02	.50	.46	1.00										
キリン	.05	.24	.44	.40	.02	-.44	-.46	1.00									
ブタ	-.31	.58	.09	-.09	.32	-.20	.16	.24	1.00								
トラ	.57	-.69	.06	.39	-.20	.53	-.18	-.11	-.66	1.00							
アリ	.01	.06	-.37	-.05	.14	.07	.49	-.42	-.39	.16	1.00						
ネコ	-.13	.48	.06	-.26	.02	-.41	.13	.19	.24	-.39	.13	1.00					
シカ	.02	.33	.27	.30	.08	-.62	-.25	.66	-.07	-.09	.21	.37	1.00				
カバ	.44	-.17	.62	-.24	-.32	-.10	-.52	.35	.32	-.05	-.68	-.07	-.07	1.00			
サル	-.59	.66	-.60	.25	.77	.22	.71	-.04	.45	-.45	.13	.22	-.04	-.42	1.00		
ウシ	.52	-.17	.88	.05	-.25	-.49	-.71	.58	.18	-.06	-.33	.09	.39	.63	-.39	1.00	
ライオン	.46	-.72	.03	.37	-.02	.64	-.17	-.24	-.57	.83	.00	-.62	-.33	-.01	-.37	-.13	1.00
ヘビ	.49	-.42	-.16	-.36	-.41	.40	.13	-.38	-.44	.55	.23	.09	-.28	.02	-.32	-.26	.37

熟した、大きい、安定した、強い」など感じられる。(Fig 6-2 参照) 「貧弱な—豊かな」「こせこせした—のびのびした」「未熟な—成熟した」「閉鎖的—開放的」「小さい—大きい」「不安定な—安定した」「弱い—強い」「空虚な—充実した」の尺度に違いが大きい。ゾウはウシよりより包容力のある強大なイメージとしていだかれている。IMQでは、ウシが(2)活動性(3)生活習慣に理由づけられることとゾウが(1)外貌に理由づけられる点が異なり、両

者が(6)人格・性格と示す点では共通している。ウシは、例えば「緩慢な感じ」として、活動性でNegativeにみられて、ゾウよりNegativeが増えている。相関は高いが、プロフィールの差、IMQの使われ方、見られ方の差がゾウ、ウシのニヤンスの違いとして、とらえられている。「ライオン・トラ」の相関も高い。IMQではライオン、トラともに(6)人格・性格の理由づけで用いられるが、ライオンはPositiveに、トラはNegativeに見られている違いがあった。

相関係数が.60以上は15組の多きを数える。負の相関もあり、広く分布しているので、因子分析した。Centroid法による因子分析の結果、3因子を抽出した。Table 6-5はその結果を示す。

Centroid法による因子行列をもとにして、グラフ法で回転した因子行列はTable 6-5の右半分である。

共通性 h^2 がアリ(.30)、ネコ(.25)と低く、

抽出されていない面もあるようだが、変数としての動物が18匹であること、共通性 h^2 がトラ(.89)、ゾウ(.85)と高い値もあるのでここまでとした。

第Ⅰ因子は、カエル(.76)を最大

Table 6-5 動物の因子分析

因子 動物名	Centroid法による因子行列				回転後の因子行列			
	I	II	III	h^2	I	II	III	h^2
クマ	-.28	-.68	-.09	.55	-.46	-.50	.32	.56
カエル	.61	.67	.09	.83	.76	.36	-.33	.82
ゾウ	.36	-.80	-.28	.85	.06	-.91	.18	.86
ウマ	.09	-.11	.78	.63	.23	.26	.71	.62
イヌ	.25	.54	.57	.68	.51	.62	.16	.67
イノシシ	-.63	.20	.24	.49	-.49	.49	.14	.50
ネズミ	-.23	.85	.13	.79	.02	.83	-.34	.80
キリン	.70	-.45	.34	.81	.62	-.44	.47	.80
ブタ	.65	.33	-.28	.61	.62	-.10	-.45	.60
トラ	-.67	-.51	.43	.89	-.65	.03	.67	.87
アライ	-.39	.34	.19	.30	-.24	.51	.00	.32
ネコ	.39	.20	-.23	.25	.36	-.09	-.32	.24
シカ	.51	-.23	.37	.45	.51	-.19	.40	.46
カバ	.27	-.53	-.44	.55	.01	-.73	-.09	.54
サル	.28	.80	.31	.81	.54	.70	-.20	.82
ウシ	.53	-.71	-.17	.81	.28	-.83	.21	.81
ライオン	-.68	-.42	.40	.80	-.64	.09	.62	.80
ヘビ	-.69	-.12	-.28	.57	-.74	.00	-.11	.56

負荷量として、ヘビ(-.74)、トラ(-.65)、ライオン(-.64)、キリン(.62)、ブタ(.62)などからなる。カエル、キリンなどの優しさとヘビ、トラなどの狩猛さ、悪さを示している。これを「優しさ-どうもうさ」のグループと名づける。

第Ⅱ因子は、ゾウ(-.91)、ウシ(-.83)、ネズミ(.83)、カバ(-.73)、サル(.70)などからなる。ゾウ、ウシ、カバなどの大きさと、ネズミ、サルなどの小ささを示している。大きさの中

に、包容力をも含んでいると思われる。これを大きさのグループと名づける。第Ⅱ因子に入る大きな動物は、分析理論でいう母性像を示すとされる動物が多い。従って、この因子は「大きさ」と「包容力」といった意味合いで抽出されていると思われる。ネズミは負の負荷量が高く、この因子に入る。従って、「小さくて、包容力がない」と思われているともいえる。ネズミは、IMQでは、母親像を示すものとして用いられてはいるが、その理由はNegative (44.2%)であり、包容力といった母性性とは結びついていないと思われる。

第Ⅲ因子は、ウマ (.71)、トラ (.67)、ライオン (.62) などからなる因子である。これは、四足動物の、ダイナミックな、力強い動きを示しており、力動性のグループと名づける。

第Ⅳ因子の力動性に入る動物が、IMQの理由づけで、(2)身体運動、活動性として用いられているのは、トラ、シカ、ウマなどである。頻度が10%代でわずかであり、IMQで

は、動物の特性として、SD法でとらえられるダイナミックな、大きな動きは余り強調されないことがわかる。動物のイメージ化はSD法とIMQでは少し焦点づけられるところがちがう。さらに、SD法のイメージ化のレベルとIMQのイメージ化のレベルとのちがいが、ここに現われていると推論する。

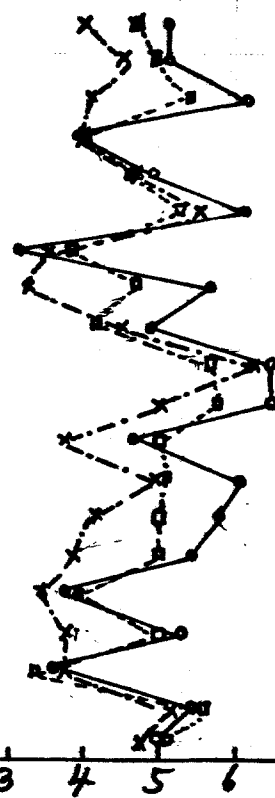
Henley (1969)²⁵⁾ は、30匹の動物をSD法で次元抽出した結果、3次元を抽出し、dimension of size (大きさの次元)、mildness vs ferocity (やさしさ—どうもうさの次元)、intimate (人間への親しみの次元) を得た。この3次元を動物の一般的な意味構造として、規定している。この結果と、本研究で得た第I、第II因子は対応している。本研究では、intimate としての分類は出てこなかった。代わりに、力動性を得た。同一動物を概念としなかった点、本研究では18匹を変数とした点で異なるが、本研究で、出てきた力動性 (ダイナミックな、力強い動き) は、動物の特性の

一つとして「動き」がある以上、一つの基準になり得ると思われるし、イメージ化の過程でも、焦点づけられる要因でもある。Henleyの3次元に加えてカ動性と動物の一般的意味構造に加える必要を感じる。

因子分析により動物をグループ化したか、各々の動物のプロフィールはFig 6-2よりFig 6-7である。

Fig 6-2より、ゾウは「まどまった、柔らかな、豊かな、のびのびした、成熟した、大きい、安定した、強い、充実した、調和した、ノーマルな、くつろいだ、愉

然とした、かたい、貧弱な、女性的、浅い、こせこせた、静的、未熟な、閉鎖的、小さい、不安定な、暗い、弱い、空虚な、不調和な、消極的、アノミカルな、さびしい、緊張した、不愉快な



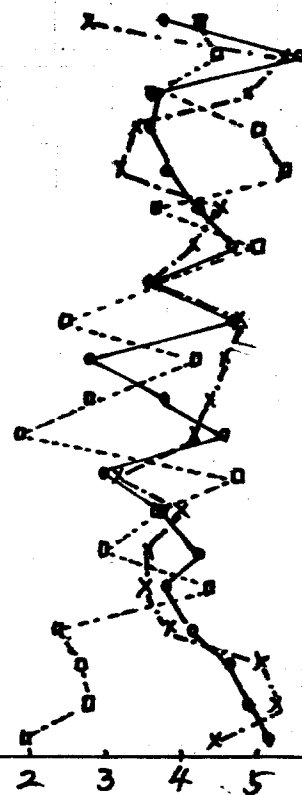
まどまた、柔らかな、豊かな、男性的、深い、のびのびした、動的、成熟した、開放的、大きい、安定した、明るい、強い、充実した、調和した、積極的、ノーマルな、にぎやかな、くつろいだ、愉快な

○—○ゾウ, □---□ウシ ×---×カバ

Fig 6-2 ゾウ・ウシ・カバのプロフィール

「快な」感じが
いだかれてお
り、肯定的で
かつ印象が強
い動物として
イメージ化さ
れている。ウ
シは、「豊かな
のびのびした
大きい、安定
した、明るい
強い、充実し

難然とた
かたい
貧弱な
女性的
浅い
こもた
神的一
未熟な
閉鎖的
小さい
不安定な
暗い
弱い
空虚な
不調和な
消極的
アナーミ
さびしい
緊張した
不愉快な



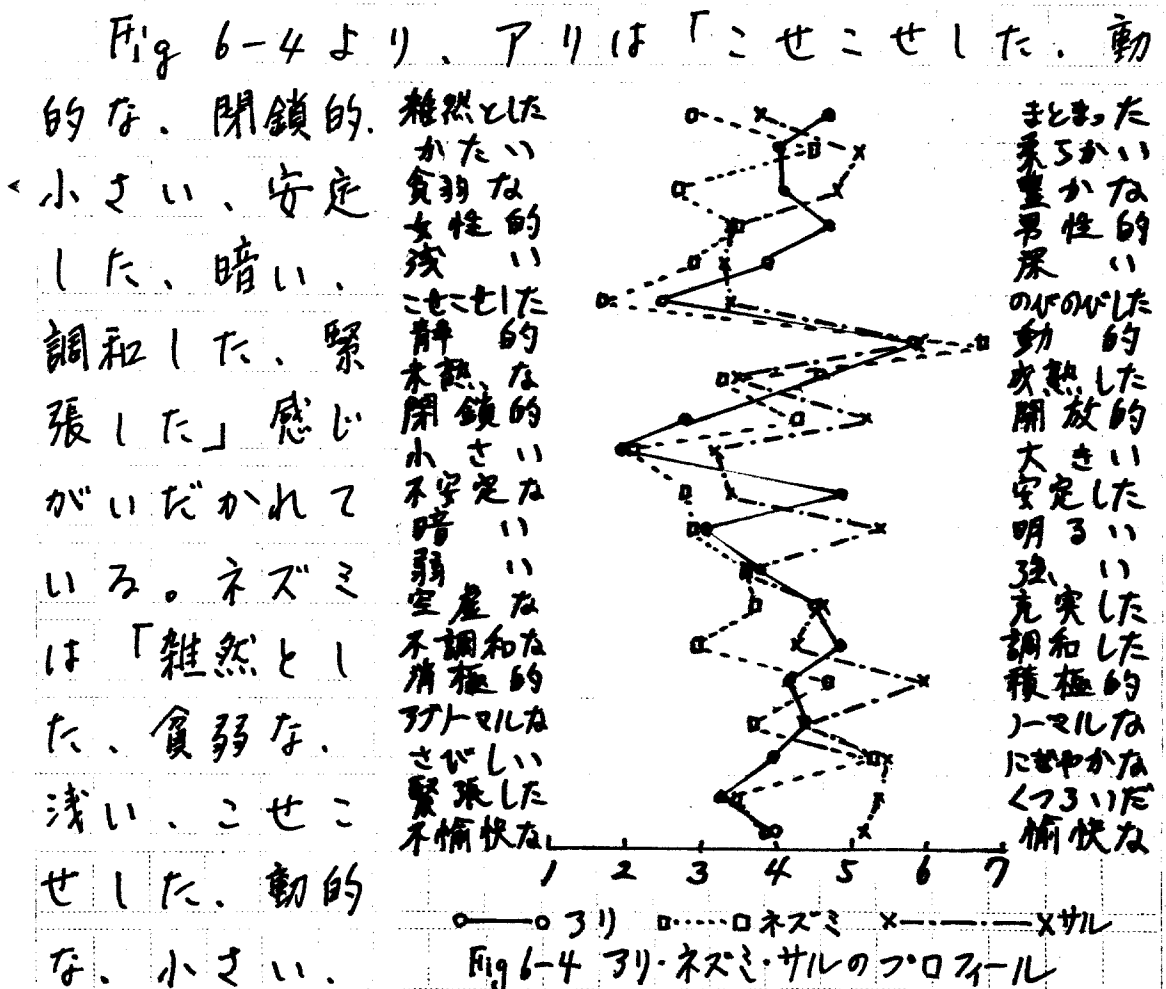
抱まった
柔らかい
豊かな
男性的
深い
のびのびした
動的
成熟した
開放的
大きい
安定した
明るい
強い
充実した
調和した
積極的
ノーマルな
にぎやかな
くつろいだ
愉快な

○—○カエル □—□ハビ ×—×ブタ
Fig 6-3 カエル・ハビ・ブタのプロフィール

た、調和した、ノーマルな、くつろいだ、愉快な」感じが
いだかれており、肯定的なイメ
ージがもたれている。カバは、「のびのびした、
未熟な、大きい、安定した、強い、くつろい
だ」感じをいだかれている。

Fig 6-3 よりカエルは「柔らかい、小さい、
弱い、愉快な」、やや「動的な、開放的な、に
ぎやかな、くつろいだ」感じがいだかれてい

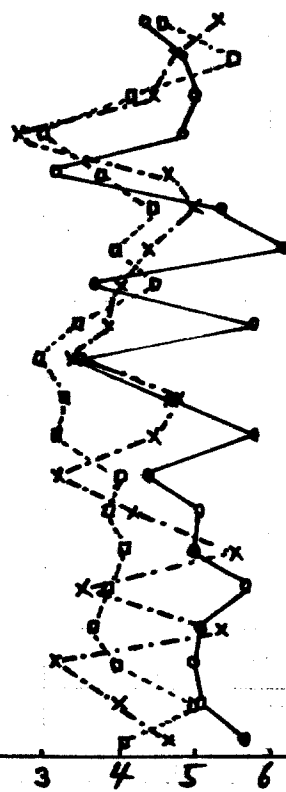
る。また、ヘビは「男性的、深い、動的、閉鎖的、不安定な、暗い、不調和な、アブノーマルな、さびしい、緊張した、不愉快な」感じがいだかれ印象深く、否定的な動物としてイメージ化されている。アタは「雑然とした、柔らかな、豊かな、浅い、弱い、にぎやかな、くつろいだ」感じがいだかれている。



不安定な、暗い、不調和な、にぎやかな」感じ
 がいだかれ、否定的な動物としてイメージ
 化されている。サルは「柔らかな、動的な、
 開放的、小さい、明るい、積極的、にぎやか
 な、くつろいだ、愉快な」感じがいだかれて
 いる。

Fig 6-5 よ
 り、イヌは「
 豊かな、のび
 のびした、動
 的、開放的、
 明るい、充実
 した、調和し
 た、積極的、
 ノーマルな、
 にぎやかな、
 くつろいだ、
 愉快な」感じ

雑然とした
 かたい
 貧弱な
 女性的
 浅い
 せこめた
 静的
 未熟な
 閉鎖的
 小さい
 不安定な
 暗い
 弱い
 空虚な
 不調和な
 消極的
 ノーマルな
 さびしい
 緊張した
 不愉快な



まとめた
 柔らかな
 豊かな
 男性的
 深い
 のびのびした
 動的
 成熟した
 開放的
 大きい
 安定した
 明るい
 強い
 充実した
 調和した
 積極的
 ノーマルな
 にぎやかな
 くつろいだ
 愉快な

○—○ イヌ □.....□ ネコ ×- - - - × シカ

Fig 6-5 イヌ・ネコ・シカのプロフィール

がいだかれており、肯定的な動物としてイメ
 ージ化されている。ネコは「柔らかな、女性

的、小さい、暗い、くつろいだ」感じがいだかれている。否定的ではないが、イヌと比べるとプロファイルで見ると左よりであり、イヌとやや対称的に感じられている。シカは「まとまった、女性的、のびのびした、弱い、調和した、ノーマルな、さびしい」感じがいだかれている。

Fig 6-6 より、キリンは「まとまった、柔

らかい、女性

的、のびのび

した、大きい、

明るい、弱い、

調和した、ノ

ーマルな、愉

快な」感じが

いだかれてい

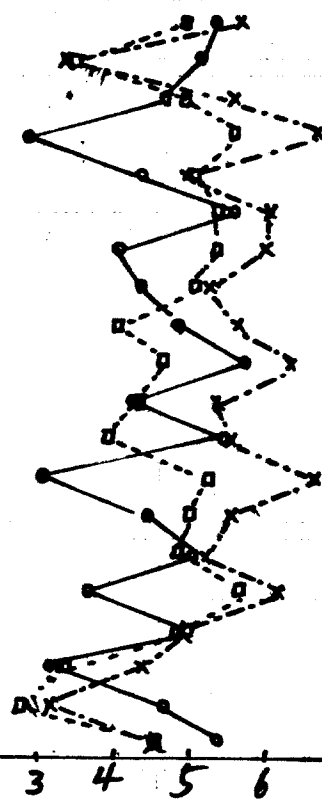
る。トラは「

まとまった、

男性的、深い、

のびのびした、

雑然とした
かたいたい
貧弱な
女性的
浅い
こせとした
静的
未熟な
閉鎖的
小さい
不安定な
暗い
弱い
空虚な
不調和な
消極的
ノーマルな
さびしい
質素した
不愉快な



まとまった
柔らかな
重なる
男性的
深い
のびのびした
動的
成熟した
開放的
大きい
安定した
明るい
強い
充実した
調和した
積極的
ノーマルな
にぎやかな
くつろいだ
愉快的な

○—○キリン □---□トラ ×---×ライオン

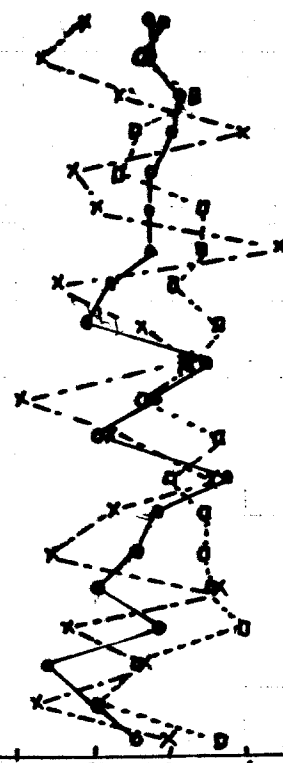
Fig 6-6 キリン・トラ・ライオンのプロファイル

動的、成熟した、強い、充実した、積極的、緊張した」感じがいだかれている。ライオンは「まとまった、豊かな、男性的、深い、のびのびした、動的、成熟した、開放的、大きい、安定した、明るい、強い、充実した、調和した、積極的」な感じがいだかれ、肯定的な動物としてイメージ化されている。その悍猛さは「緊張した」と「かたい」で示されているだけで、

イメージ化の過程では強調されていないようだ。IMQでもPositiveに理由づけられていたのと同じである。

Fig 6-7 より、クマは「

雄然とは
かたい
貧弱な
女性的
浅い
こせこせした
静的
未熟な
閉鎖的
小さい
不安定な
暗い
弱い
空虚な
不調和な
消極的
アトマルな
さびしい
緊張した
不愉快な



まとめた
柔らかな
豊かな
男性的
深い
のびのびした
動的
成熟した
開放的
大きい
安定した
明るい
強い
充実した
調和した
積極的
アトマルな
にぎやかな
くつろいだ
愉快的な

Fig 6-7 クマ・ウマ・イシのプロファイル

豊かな、男性的、大きい、強い」感じがいだかれ、やや「まとまった、柔らかな、深い、のびのびした、動的、安定した、充実した、ノーマルな」感じがいだかれ、肯定的な動物としてイメージ化されている。ウマは「まとまった、豊かな、のびのびした、動的、成熟した、開放的、大きい、明るい、強い、充実した、調和した、積極的、ノーマルな、愉快な」感じがいだかれ、肯定的である。イノシシは「男性的、動的、大きい、不安定な、強い、積極的、愉快的」感じがいだかれている。

次に、各尺度に特徴的な動物を示したのが Table 6-6 である。Table 6-6 は、各尺度の最小値と最大値を示した動物及び尺度の値が 3.0 以下か 5.00 以上の動物をあげたものである。

使われた対形容詞と動物との関係とさらに明らかにするために、対形容詞を因子分析した。Centroid法により、3 因子抽出した。対形容詞の Pearson の相関、Centroid法による

Table 6-6 各尺度における特徴的な動物

尺 度	動 物 名	尺 度	動 物 名
(1) 雑然とした まとまった	ブタ, ネズミ ライオン, キリン, シカ	(11) 不安定な 安定した	ヘビ, ネズミ ゾウ, ウシ, ライオン
(2) かた い 柔らかな	ライオン, イシシ カエル, ネコ, ブタ	(12) 暗 い 明 る い	ヘビ, ネズミ イヌ, ウマ, ライオン, キリン サル
(3) 貧弱な 豊かな	ネズミ ゾウ, ライオン, ウマ, ウシ	(13) 弱 い 強 い	カエル ライオン, ゾウ, ウマ, イシシ
(5) 浅 い 深 い	ネズミ ヘビ	(14) 空虚な 充実した	ヘビ ゾウ, ライオン, ウマ
(6) こせこせした のびのびした	ネズミ, フリ ゾウ, ライオン, キリン, カバ ウマ, トラ	(15) 不調和な 調和した	ヘビ, ネズミ シカ, ウマ, ゾウ
(7) 静 的 動 物	ゾウ ネズミ, イシシ, イヌ, ライオン サル, フリ, ウマ, トラ	(16) 消極的 積極的	カバ ライオン, サル, イシシ, イヌ トラ, ウマ
(8) 未熟な 成熟した	ネズミ, カバ ゾウ	(17) アブノーマルな ノーマルな	ヘビ ウマ, シカ
(9) 閉鎖的 開放的	ヘビ, フリ イヌ, ウマ, ライオン	(18) さびしい にぎやかな	ヘビ サル
(10) 小 さ い 大 き い	フリ, ネズミ, カエル, ネコ ゾウ, ライオン, カバ, キリン ウシ, トラ, ウマ	(19) 緊張した くつろいだ	ヘビ, トラ ウシ, ゾウ, サル
		(20) 不愉快な 愉快な	ヘビ ウマ, イヌ, キリン

(女性の-男性のはTable 6-9参照)

因子行列、グラフ法による回転後の因子行列はTable 6-7, Table 6-8に示す。

第1因子は、17.「アブノーマルな-ノーマルな」(.92)を最大負荷として、15.「不調和な-調和した」、3.「貧弱な-豊かな」、12.「暗い-明るい」、14.「空虚な-充実した」、20.「不愉快な-愉快的」などより成る。これは、Osgo-

Table 6-7 Scale 間の相関マトリックス

尺度	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)
尺度	(1)	1.00																	
(2)	-.25	1.00																	
(3)	.57	-.03	1.00																
(4)	.25	-.82	.26	1.00															
(5)	.70	-.31	.38	.36	1.00														
(6)	.62	.02	.78	.17	.55	1.00													
(7)	-.22	-.57	-.31	.50	-.41	-.51	1.00												
(8)	.76	-.20	.72	.29	.55	.56	-.23	1.00											
(9)	.04	.04	.50	.11	-.26	.50	.16	.11	1.00										
(10)	.44	-.26	.68	.38	.64	.80	-.40	.47	.36	1.00									
(11)	.54	.00	.77	.11	.43	.68	-.48	.66	.30	.56	1.00								
(12)	.35	.11	.67	.03	-.09	.61	.02	.30	.87	.37	.48	1.00							
(13)	.44	-.57	.57	.78	.58	.48	.04	.54	.18	.70	.45	.12	1.00						
(14)	.61	-.25	.89	.43	.36	.64	-.02	.78	.54	.59	.76	.65	.67	1.00					
(15)	.79	.02	.74	.02	.34	.65	-.23	.73	.37	.31	.76	.69	.21	.76	1.00				
(16)	.09	-.59	.19	.66	-.11	-.02	.79	.13	.45	.04	-.20	.35	.40	.41	.07	1.00			
(17)	.59	.06	.71	-.02	.16	.59	-.12	.62	.55	.32	.70	.78	.19	.78	.93	.14	1.00		
(18)	-.62	.06	-.14	-.02	-.83	-.34	.54	-.37	.56	-.38	-.28	.29	-.22	-.05	-.24	.44	-.04	1.00	
(19)	-.18	.78	.32	-.61	-.31	.31	-.59	-.10	.39	.09	.35	.45	-.25	.11	.20	-.41	.25	.21	1.00
(20)	.18	.17	.53	-.11	-.24	.40	-.06	.19	.78	.27	.44	.88	.01	.52	.61	.18	.76	.34	.54

241)
odのいう Evaluation にあたる尺度が多い。これを好ましい、悪いなどの評価を示す尺度として、Evaluation (評価性の因子) と名づける。第Ⅱ因子は、18, 「さびしいーにぎやかな」(.94) を最大負荷として、5, 「浅いー深い」、7, 「静的ー動的」、9, 「閉鎖的ー開放的」などより成る。これは、Osgood の Activity にあたる尺度が多く入っている。これを Activity (活動性の因子) と名づける。第Ⅲ因子は、4,

「女性的—男性的」

Table 6-8 Scaleの因子分析

(.92) を最大負荷と

して、13.「弱い—強い」、

15.「かたい—柔かい」、

16.「消極的—積極的」などより

成る。これは Osgood

の Potency にあたる

尺度が多い。これを

・ Potency (潜勢力性の因子) と名づける。

因子 尺度 番号	Centroid 法の因子行列				回転後の因子行列			
	I	II	III	h ²	I	II	III	h ²
(1)	.74	-.31	-.22	.69	.54	-.57	.25	.68
(2)	-.21	.42	-.70	.71	.17	.03	-.82	.70
(3)	.91	.14	-.05	.85	.87	-.13	.24	.83
(4)	.37	-.38	.75	.84	-.02	.00	.92	.85
(5)	.55	-.76	-.17	.91	.16	-.85	.39	.90
(6)	.86	-.08	-.19	.78	.74	-.41	.24	.77
(7)	-.24	.20	.80	.74	-.39	.62	.50	.79
(8)	.76	-.18	-.12	.62	.61	-.42	.30	.64
(9)	.51	.66	.33	.80	.67	.56	.23	.82
(10)	.76	-.32	.10	.69	.49	.42	.54	.71
(11)	.80	.06	-.32	.75	.79	-.35	.11	.76
(12)	.68	.65	.07	.89	.86	.36	.09	.88
(13)	.65	-.43	.46	.82	.25	-.28	.82	.81
(14)	.92	.16	.17	.90	.83	.04	.47	.91
(15)	.82	.24	-.34	.85	.89	-.21	-.03	.84
(16)	.21	.18	.82	.75	.08	.52	.69	.75
(17)	.78	.43	-.21	.84	.92	.01	-.02	.85
(18)	-.27	.73	.50	.86	.01	.94	.01	.88
(19)	.13	.57	-.51	.60	.49	.14	-.58	.60
(20)	.55	.69	-.03	.78	.81	.38	.06	.80

使われた尺度の意味構造は Osgood のいう因子構造と対応している。また、20個の対形容詞は抽出された3因子のどれかに、±.50以上の負荷をしているなどより、SD法の尺度として、20個の対形容詞は適していたと思われる。しかし、第I因子の負荷の高いものが11尺度に及ぶことは、尺度形成にさらに考慮する必要がある。

各因子の主なる尺度の平均と動物と対応さ

せたのが Table 6-9 Table 6-9 概念と尺度の関係

である。Evaluation は負荷量，80以上の 6 尺度（尺度番号 3, 12, 14, 15, 17, 20）と、Activity は負荷量，60以上の 3 尺度（尺度番号 5, 7, 18）と、Potency は負荷量，60以上の 4 尺度（尺度番号 2, 4, 13, 16）と平均した。ただし、(2) と (5) の尺度は他の尺度と比較すると、相関係数が負になっているので、左右を入れかえた。

因子 概念	E	A	P	女性的 男性的
クマ	4.68	3.79	4.54	5.07
カエル	4.22	4.50	3.18	3.57
ゾウ	5.39	3.27	4.16	3.93
ウマ	5.57	4.54	4.60	4.54
イヌ	5.26	5.30	4.52	4.85
イシシ	4.15	5.10	5.48	6.00
ネズミ	3.26	5.69	3.81	3.46
キリン	5.01	3.62	3.12	2.85
ブタ	4.14	4.69	3.17	3.33
トラ	4.67	3.86	5.25	5.58
ゾリ	4.14	4.61	4.15	4.67
ネコ	3.84	4.03	3.34	3.00
シカ	4.76	3.61	3.15	2.67
カバ	4.06	3.53	3.96	4.00
サル	4.74	5.33	3.94	3.33
ウシ	5.09	3.51	4.02	4.00
ライオン	5.12	4.49	6.06	6.69
ヘビ	2.70	3.43	4.41	5.00

「4」を中間として、評価性因子の高い動物は、ウマ、ゾウ、イヌ、ライオン、ウシ、キリンである。キリンは IMQ で使用された時は中性であった。(Table 6-3 参照) 他のウマ、ゾウ、イヌなどは IMQ でも肯定的な

使用であった。また、IMQでは90%までPositiveにみられていたアリは、SD法の評価性因子では、4.14と低く、それ程肯定的であるとはいえない。これは、IMQとSD法とでは、イメージ化されたアリの違った面をとり出しているためではないだろうか。評価性因子の低い動物は、ヘビ、ネズミ、ネコである。IMQで使用されたネズミもネコもNegativeにみられており、SD法の評価性因子と一致している。ヘビは、IMQの反応に余り出まないので、SD法との関係も明らかに出来なかった。Buss & Durkee (1957)²³⁾の結果では、ヘビが残酷なものの代表であるように述べているが、IMQで用いられない程評価の悪いものとも考えられる。動物によって、SD法とIMQとで、その見られ方が同じもの（ネズミ、ネコ）と異なるもの（アリ、キリン）とがあることが明らかになった。少し飛躍するが、これはイメージには層があることのひとつの証しといえないだろうか。

活動性因子の高い動物は、ネズミ、サル、イヌ、イノシシである。この因子は、こまわりのきく、チョロチョロした落着きのない動きや直線的なダイナミックな動きを意味しているようである。ネズミは、IMQでは動きが(ス)の活動性に理由づけられ、イノシシは(6)の人格・性格に理由づけられ、動きが人格化されていた。活動性因子の低い動物は、ゾウ、ヘビ、ウシ、カバ、シカ、キリンである。これらは大きさのグループに入った動物が多かった。キリンは生物学的には足の速い動物であるが、イメージ化されると、大きさが強調され、活動性因子は低くなったと思われる。

潜勢性因子の高いものは、ライオン、イノシシ、トラなどである。低いものは、キリン、シカ、ブタ、カエル、ネコなどである。力強さが潜在的な力とみられ、Potency となっているようだ。

Table 6-9 より、尺度「女性的-男性的」によつて、イメージ化された時の男性性、女

性性を動物にあてはめると、男性的なのは、ライオン>イノシシ>トラ>クマ>ヘビ等である。また、女性的なのは、シカ>キリン>ネコ>ブタ>サル>ネズミ>カエル等である。三宅⁽¹⁸⁰⁾は男性的なものとして、ライオン>クマ>トラ>ヘビ>サル>ゾウ>カバ>イヌをあげている。女性的なものとして、ネコ>ウシ>キリン>ネズミ>ブタ>シカ>カエルをあげている。Gill (1967)⁽¹⁾によれば、子供と大人に50匹の動物を男性的か女性的かに分類させたところ、男性的とされたのは、イヌ、サル、ウマ、ゾウ、クマなどであり、女性的とされたのは、アリ、ブタ、シカなどであり、73%の動物が男性的とされるという。SD法でサルが女性的な方に評定されているのを除き、三者の研究結果ともほぼ一致した結果を得ている。一般に、動物は男性的と意味づけられることが多い。

第4節 まとめ

本章では、箱庭療法で使用する玩具の動物類に注目し、動物の象徴的意味に関するいくつかの研究をまとめた。即ち、IMQとSD法の投影的質問紙によって、両質問紙における動物イメージの特徴と差異を明らかにしようと試みた。

IMQで使用する動物の種類は極端に特定の動物に集中するのではないが、サル、ウシ、ライオンなどの哺乳動物が多く使用された。動物の属性が外貌に理由づけられるものとして、麒麟、ブタ、ウシなどがあり、背の高さ、太さが強調された。しかし、アリ、ネズミなどの小さい、細い特性が外貌の理由づけに使用されることは少ない。活動性に理由づけられた動物は、シカ、ウシなどであり、「俊敏・のろま」などと使用された。行動的習慣、生活習慣と結びついた動物は、アリ、ネズミなどであり、「とてもよく動く」などと

理由づけられていた。零⁰団気を示す動物は少ない。人格、性格を示すものとしてイメージ化されやすい動物は、ライオン、トラ、イノシシなどである。Positiveにみられている動物は、アリ、ライオン、シカなどであり、Negativeにみられている動物は、イノシシ、ブタ、トラなどであり、Neutralにみられている動物は、キリン、サルなどがあり、動物像の違いが明らかになった。

S D法で評定された動物とセントロイド法で因子分析した結果、3因子が抽出された。第Ⅰ因子は、カエル、ヘビ、ライオンなどからなり、「優しさ—野猛さ」のグループ。第Ⅱ因子は、ゾウ、ウシ、カバ、ネズミなどからなり、大きさのグループ。第Ⅲ因子は、ウマ、トラ、ライオンなどからなり、力動性のグループと名づけた。また、対形容詞とセントロイド法で因子分析した結果、Osgoodと同じ3因子が抽出された。第Ⅰ因子は、「アブノーマルな—ノーマルな」「不調和な—調和した」な

どからなり、評価性の因子、第Ⅱ因子は、「さびしいーにぎやかな」「静的ー動的」などからなり、活動性の因子、第Ⅲ因子は、「女性的ー男性的」「弱いー強い」などよりなり、潜勢力性の因子と名づけた。対形容詞と動物との関係とみると、評価性因子の値が高い動物は、ウマ、ゾウ、イヌなどであり、活動性因子の高い動物は、ネズミ、サル、イノシシなどであり、潜勢力性因子の高い動物は、ライオン、トラなどである。

アリは、IMQでは母親像として使用され、Positiveにみられているが、SD法では、それ程評価性因子に高い値を示していない。この違いは、IMQが自己像、両親像として、動物をイメージ化することと求められ、SD法が設定された尺度による7段階の評定法である方法の自由度の差違によるのかもしれない。また、SD法は動物の内包的な意味を把握し、全体的な印象を測定しようとするのに対して、IMQは動物の個々の部分のイメー

ジ化であるのかもしれない。また、両方法によるイメージ化の差違は、動物イメージの多様性を示し、それに応じた人間の心での位置づけの違い、さらには、心の層のひとつの現われと考えられるかもしれない。

IMQとSD法で動物イメージを明白にしたが、イメージは個人的な要因の大きいものであることを忘れず、このような結果と治療に役立てたい。例えば、箱庭の作品に使用された動物はどのようなグループに入る動物なのか。また、話された内容を動物で比喻したら何になるかなどと考えることは、患者の話とより深く、多角的に理解することになろう。

第 7 章

作品の左右性について

第 1 節 問題と目的

我々は決まった生活空間で日常生活を営んでいる。例えば、ある定まった部屋の机、本棚、ソファの配置の中で生活している。ところが、部屋に入った時、配置変えをしていつもの場所に本棚がなく反対側にある時（たとえひとつだけの家具の移動であっても）一瞬違う部屋の感じと受け、落着きと失い、心に動揺がくる。その動揺は一瞬の時もあるし、長時間続くこともあるが、新しい配置に慣れることができ、いつの間にか心の動揺は通常収まるものである。心の動揺の程度は、性格健康度、期間など様々の要因に起因するだろうが、移動したものがどれぐらいその人にとって重要であるかにも関係していよう。また、

雛祭りにおける男雛と女雛の配置^(註)、結婚式の
 花嫁と花婿の坐る場所などは決まっている。
 これは慣例として、いくう女性が強くなっ
 ても左右が入れかわることはなく、固有の位置
 関係といえる。このように、日常生活空間で
 は配置される人及び物の関係が変化していく
 ものと、変化しない固有の位置関係とがある
 ように思われる。

また、治療では、「反転」という現象があこ
 ることがある。「反転」とは役割の交代があこ
 ることで、例えば次のようなことという。遊
 戯治療のままごと遊びで、「患者の女の子が母
 親役とし、治療者に子ども役をやらせる。あ
 る時は逆転して、患者が子ども役とし、治療
 者が母親役とする。」このような現象である。

(役割分担は普通のままごと遊びでもよくみ
 られることである)このように役割が逆転し
 たり、もとにもどったりする時、何かそこに
 意味があるようである。また、カウンセリング

(註)但し、向う右側に男雛を飾る京都式と左側に飾る東京式がある。

7では、母親が子どもの育見法の話としている時、母親が自分の母親から受けた育見への攻撃やうらみを根底に含みながら話している場合が反転と考^(注)えられる。箱庭療法では、シリーズでみると右側にあった玩具が左側に移動することがある。これらは、治療過程との関係で考えると、新しいものの出現、気分転換、枠を破ることなどその意味を理解できることが多いようである。箱庭療法の場合、「反転」で玩具の位置が動くにしても、前提として、動く前の状態、あるいは、あるもとの位置を仮定して、「そこから動いた、あるいは離れた」ことになる。ここに、箱庭療法の作品には、もとの位置があるのだろうかということと調べておく必要が出てくる。もちろん、このテーマは、玩具の置かれた領域と種類と数の問題^{54, 221)}などとしても接近できようが、ここでは、「作品の左右性」という面から問題にしたい。

(注) この場合精神分析の防衛機制の置き換えに相当する。

ところで、箱庭療法を実施していると、作品の正位置（制作者が作っている位置）から見た時、その作品がピッタリ^(注)であると感じる。また、自分の患者の作品を左右を逆にしてプロジェクトした時、すぐに「おかしい、反対だ」と気づく。それは、治療者の直観とか体感とかに依存している。（体感とは皮膚感覚をも含んで、治療者が何か落着かなくなり、そわそわするとか、背中がムズムズするなどのように身体に感じることを意味する。）このような経験は、その時々作品に固有の位置があることを示していると思われる。また、その時、治療者は何かを手がかりにしてこのように感じると思われるので、その手がかりは何であることを明確にしておく必要がある。

⁵⁹⁾ Martin Gardnerがアイゼングラスの研究を引用して、次のように述べている。「アイゼングラスは風景写真をまともにプリントしたも

(注) 「ピッタリ」の英訳は「fit」である。「よい」とか「合った」とかの意味を含んだものとは「ピッタリ」と言う。

のと、左右逆にプリントしたものとを同時に
見せて、よい方を選ばせた。すると、左右対
称風景に対してほぼ同数になるが、左右対
称でない作品は、75%が同じ向きを選ぶとい
う。これは字の方向『左から右へ読むこと』
と関係すると述べている。」また、H. ヴァイ
ル³⁰²⁾は、ハインリッヒ・ヴェルフリンの「絵画
における右と左」を引用して、絵における左
と右の役割を示そうとしている。絵と同様に、
箱庭療法の作品にも左と右の役割があるので
はないかと思い、「作品の左右性」の研究を試
みた。

「左右性」をテーマにすると、今日の心理学
で思いつくことは、脳のラテラルイティ²⁵⁷⁾である。
箱庭療法では、M. Grünwald の空間象徴理
論 (Fig 7-1 参照) を重視して、箱の上下や左
右の意味づけをしている。この時、素朴に考
えたと、左右は利き手によって意味づけが反
対になるかもしれないという疑問が生じてく
る。この点を確かめるためにも、また、利き

手に関する研究のほんの一端をも担いうるためにも、利き手による差異を目的に加えた。

以上の問題意識から、具体的には次の3点を調査目的とする。

(1) 逆位置よりも正位置で「ピッタリ感じる」傾向がみられるだろう。その時の作品の特徴は何かを考察する。対称的な作品、雑然とした作品は左右の区別はつかないであろう。

(2) 臨床経験者と非経験者で、正位置で「ピッタリ感じる」傾向に差異はあるだろうか。

(3) 左利きの人の作品および左利きの人が「ピッタリと感じる」判断に、何か右利きの人と違った傾向がみられるだろうか。

以上の3点を明らかにすることと目的として、次のような方法で調査を実施した。

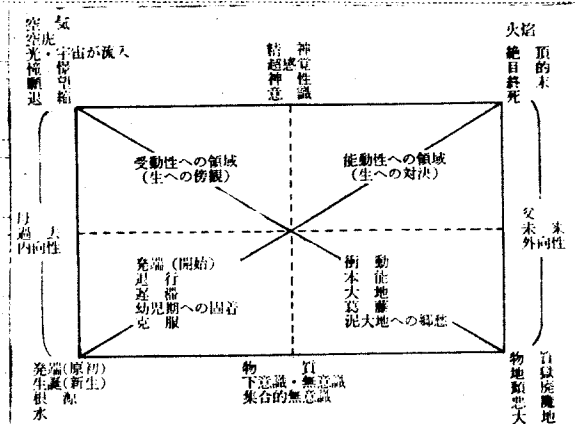


Fig 7-1. Grünwald の空間図式

第2節 方法

(1) 刺激選択：次のような点に注目して刺激作品30個を選んだ。(Fig 7-2 参照) 1回だけの作品あるいは、治療例は初期あるいは終期の作品を選ぶように心がけた。対称的な作品として4個(作品番号(Nr) 2, 16, 19, 24) 未分化な作品1個(Nr 9)、雑然とした作品1個(Nr 14)、領域の分かれている作品5個(Nr 6, 18, 20, 23, 29)、方向性を示す作品6個(Nr 3, 7, 8, 10, 22, 28)、左利きの人の作品4個(Nr 5, 17, 25, 30)、特定の玩具の位置に関する作品5個(Nr 4, 11, 13, 15, 26)、その他4個(Nr 1, 12, 21, 27)である。これらの区分は便宜的であり、例えば方向性を示す作品としてNr 15も入るなど重なるものがある。なお制作者の性別に関しては、20個の作品は男性、10個は女性によって制作されている。年齢に関しては、18個の作品は中学

Fig 7-2 刺激作品



作品番号

1



作品番号

2



作品番号

3



作品番号
4



作品番号
5



作品番号
6



作品番号

7



作品番号

8



作品番号

9

No. 237



作品番号

10



作品番号

11



作品番号

12



作品番号

13



作品番号

14



作品番号

15



作品番号
16



作品番号
17



作品番号
18



作品番号

19



作品番号

20



作品番号

21

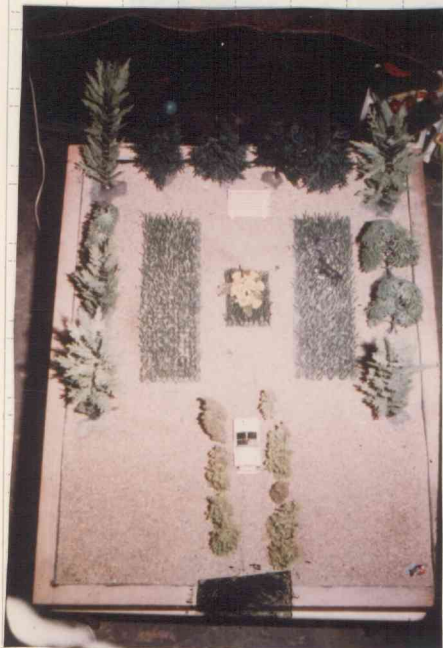


作品番号

22



作品番号 23



作品番号

24

No. 242



作品番号

25



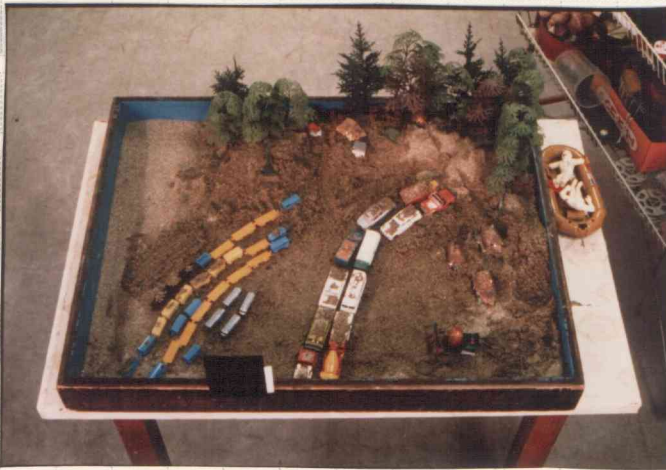
作品番号

26



作品番号

27



作品番号

28



作品番号

29



作品番号

30

生未満、12個は中学生以上であった。また、左利きとしたのは、~~左利き~~左利きが明確な人であるが、右手で文字は書ける人も含んでいる。何ももって左利きとするかの判断は困難であり、この場合両手利きといえるかもしれないがここでは右手利き以外の人という程度の意味で左利きとした。

(2)調査対象：非臨床経験群は6名；K大学とT大学、男性8名、女性4名、左利きは2名（うち男性1名、女性1名）、臨床経験者4名；男性2名、女性2名。

(3)調査日：1973年5月

(4)留意点：(1)教示「これから見せるスライドはミニチャプと砂で箱の中に自分の好きなものを作った作品です。同時に、同じ作品を左右逆にして見せます。第一印象で、どちらが「まとまった、ポップリくる、よい作品」であると思うかチェックして下さい。(2)調査用紙は付表6に示したものである。(3)提示順序は刺激作品番号順である。ただし、ランダム

ムに左側と右側に正位置で映写するようにした。正位置で映写したのは、左側15枚、右側15枚の半々である。資料収集の時、非臨床群4グループ、経験群は1名～5名の多数グループに分けていたので、提示による左右の影響はないと思われる。(4)同型のプロジェクター2台から、同時に左右を逆にして映写した。(5)提示時間は10秒～15秒にした。(6)質問がない時には玩具についての説明はしない。(7)作品以外のもの(イスや名札を塗りつぶしたものなど)は無視するよう求めた。

第3節 結果と考察

各刺激作品に対して、ピッタリと感じると判断した頻度はTable 7-1に示した通りである。概して正位置も逆位置も（正位置を左右逆にして示したもののという）区別なくピッタリと感じており、正位置でピッタリ感じるだろうという仮説は成立しなかった。左右の区別がないとすると半数になると仮定して χ^2 検定とした結果、わずかにNr2とNr14は、正位置の方がピッタリであると感じる頻度に1%水準で有意差がみられた。（ $df=1$ でNr2は $\chi^2=17.016$, Nr14は $\chi^2=12.956$ ）また、Nr1とNr3とNr10は逆位置でピッタリであると感じる頻度に10%で差がみられる。（ $df=1$ でNr1とNr3は $\chi^2=3.349$, Nr10は $\chi^2=3.817$ ）

有意差の出たNr2は対称的な作品であり、Nr14は雑然とした作品であり、どちらもむしろ左右の区別のつきにくい作品と考えていた

ものであった。Nr. 2 の作品を検討すると対称的ではあるが、魚だけがその対称性をこわしていることに気づく。正位置では、魚は円形の水路の右側と上側にあり、時計と反対まわり（左廻り）をしている。魚の位置及び左廻りの動きが正位置をヒツタリ感じた手がかかりだ、たかもしれない。ところで、ユング¹⁰³⁾の "Concerning Mandala Symbolism" の中では、(Fig 19, 20, 21, 22) 魚の動きが左向きである。ユングはこれ¹⁰³⁾を「円形における魚の左方向への動きは中心及び無意識への動き」と

Table 7-1 臨床経験の有無による「ヒツタリ」と判断した頻度

群 位置 番号	非臨床群			臨床群			非臨床 判定
	正 位置	逆 位置	検 定	正 位置	逆 位置	検 定	
1	53	83		29	13		**
2	101	35	**	19	23		**
3	53	83		12	30	*	
4	63	73		21	21		
5	76	60		20	22		
6	65	71		22	20		
7	64	72		19	23		
8	72	64		29	13		
9	67	69		21	21		
10	52	84		14	28		
11	67	69		23	19		
12	78	58		29	13		
13	61	75		18	24		
14	97	39	**	33	9	**	
15	56	80		17	25		
16	58	78		23	19		
17	76	60		30	12	*	
18	73	63		29	13		
19	57	79		28	14		**
20	65	71		11	31	*	*
21	72	64		25	17		
22	72	64		13	29		*
23	63	73		25	17		
24	60	76		21	21		
25	66	70		26	16		
26	63	73		18	24		
27	66	70		24	18		
28	79	57		26	16		
29	65	71		17	25		
30	62	74		10	32	*	

* 5% ** 1% で有意

(註) The Archetypes and The Collective Unconscious P369~P370 参照

説明している。偶然の一致かもしれないが、これは魚の象徴性から考えたら納得のいくものであり、推測の域を出ないが本調査でも魚の左廻りの動きによって何かピッタリくる正位置が決められたのではないだろうか。制作者自身も意識して左向きに魚を置いたわけではないかもしれないが、制作者にとって何か必然性を含んだものであつたろう。この点にも箱庭療法の作品のひとつの見方、手がかりがあることを示唆しているといえる。即ち、何か特異な存在、魚のような象徴性の高いものには注意を払う必要があることを示している。なお魚の象徴性については、ユングは¹⁰⁴⁾アイオンで詳しく述べている。

Nr24とNr2との作品を比較すると、前者は単に対称的であり、後者はマンドラという違いがあるけれども、対称性をこわしているのが、前者は驢馬と双眼鏡で見ている人であり、後者は魚であるという点では似ている。Nr24の正位置はどちらとも断定できない。これは

魚ほど驢馬及び人の位置がピッタリくる感じの手がかりになり得なかったためであろう。筆者の経験では、観察する人の存在は右下に位置することが多いようだが、今後事例を集積して確かめたい。また観察しているものとして、木の上の猿が置かれることもある。^(注1)

さらに左右対称のものとして刺激に取り入れた作品にNr16と19がある。Nr16は対称性をこわすものがなく、まったく判断の困難な作品である。Nr19には円形の島及びそのまわりを流れる川がありNr2と少し似ている。Nr19の作品には対称性をこわすものが舟の方向、木、家があり、魚の動きのようにひとつだけでないのでかえって判断がつきにくかったのかもしれない。概して、Nr2以外の対称的な作品は仮説通り判断が困難であった。

Nr14は雑然とした作品であるが正位置でピッタリ感じられている。これは、家が左側にあることが手がかりになったのではないかと推測する。家の位置から家の意味については、

(注1) 平崎の発表ケースなどにみられる。

岡田康 (1972)²²¹⁾ や藤井 (1976)⁵⁴⁾ はいこの場
と社会との接触の場の二つをあげているが、
この結果は左側に家が置かれており、家の対
外的な役割よりも内的な安定の場としての家
の意味が強調されたことになろう。他の玩具
が余りにも雑然と置かれているので、その中
で安定したものを求めた結果が左側の家であ
ったと思うのである。一才未分化な作品とし
てあげた Nr 9 には特徴的な玩具がないため、
正位置の判断がつきにくかったと思われる。

有意差はないが10%水準で逆位置がピック
リと感じられた作品が Nr 1 と Nr 3 と Nr 10 であ
る。Nr 1 の作品は「その他」として刺激にと
り入れたものだが、領域の拡大のテーマであ
る。治療の進展とともに、左下の柵で囲まれ
た領域が拡大すること (西村の事例¹²⁹⁾) 及び幼
稚園児の作品の特徴 (第4章参照) のひとつ
として示した。左下の囲まれた領域が中央へ
展開していくことと対応する。これらはいず
れも右側への展開であり、外界への接触、進

行的発展と考えられている。Nr1の作品が逆位置にピッタリ感じられるのは、右側に柵が開いて、右方向への展開の方がピッタリと感じるということであろう。

Nr3及びNr10の作品はNr7、8、22、28とともに方向性を示す作品として刺激に採用したものである。Nr3の作品は動物が左向きよりも右向きの方がピッタリであることを示している。動物や自動車などの流れは実際には左向きでも右向きでも可能である。左向きは退行、内的世界への動きと、右向きは進行、外的世界への動きを意味するという考えに従うとすれば、Nr3の動物は進行の方向の方がピッタリと感じられたことになる。実際のケースでは左右どちらにも動物の動きは経験され、やや左向きが多いと思うが、この結果は一般には右への動き即ち進行、外への動きがピッタリであることを意味しており、左への動きは何かピッタリこないものがあることを示唆している。従って、作品に左方向への動

きがみられる時は、何か意味がある場合が多いのではないかと思われる。

Nr 8 と Nr 28 の作品も右上への動きをピッタリと感じる方が僅少だが多い。逆に Nr 22 では左側への動きを、Nr 15 の自動車は左側への動きがピッタリと感じられている。Nr 15 の作品は自動車と道の方角性よりも五重の塔が右上にあるか左上かの問題であったかもしれないと思う。Nr 12 の作品はその他として刺激に入れたものだが、自動車は正位置で右向きである。やはり右への動きが重視されるようである。頻度には大差はないが、強いて言えば右側への動きをピッタリと感じる傾向がここでもうかがえる。しかし五重の塔のような宗教的な玩具ではこの傾向に反して、塔の左上の位置が強調されるのかもしれない。

Nr 10 の作品は逆位置でピッタリ感じられているが、これは道が左から右へ向かう方がピッタリであることとベンチで待っている人は右側の方がよいことを示していることになる。

道のつけ方は右下から左上へよりも、左下から右上への動きの方がピッタリと感じられるようだ。

Nr7の作品は正位置と逆位置の判断に余り差はないがやはり右上への方向性とトラックの右向きへの動きと、家が右上にくる方がピッタリくるようだ。青木(1976)⁹⁾は左から右への方向性は過去から未来と内的世界から外的世界への方向であると実証的に示している。一般にこの方向に道や自動車の流れがあるとピッタリと感じられるようだ。

特定の玩具の位置に関する作品Nr4、11、13、15、26には明確な正位置が本研究では決まらなかった。Nr4とNr11において、筆者は海及び船の位置に注目していたがこれらの位置は右上とはいえないようだ。Nr13は左上の神社及び右側の村と海がこのままピッタリと感じられるかと思っていたが、これも差がみられなかった。Nr15は右上の五重の塔の位置が目標を示す役をするという意味で右上にく

る方がピッタリかと思っていたが、有意差はないがむしろ塔が左上にくる方がピッタリの結果を示した。推測ながら、五重の塔のような宗教的な玩具は、グリュンワルトによると生への傍観と神性を示すという左上が奥まった場所としてピッタリくるのかもしれない。

(しかし、Nr13の神社は左上がピッタリとは判断されなかった。) そしてそこへ通ずる道として左上への道はピッタリくるのかもしれない。この道は青木⁹⁾が「アルンハイムが指摘する対角線の方角と一致する」という左上への対角線にはなっている。Nr26では家及び人の位置に注目していた。結果は(63, 73)であり、余り差がみられなかった。

その他として刺激に入れたNr21とNr27も差がみられなかった。

以下では臨床群の特徴について述べたい。正位置と逆位置とでピッタリと感じる頻度に5%以上で有意差の出た作品は、Nr3、14、17、20、30の5個であり、10%水準でみると

Nr 1, 8, 12, 18, 22の5個であり、臨床群は非臨床群の5個よりは作品の位置に一定傾向でピッタリと感じている。しかし、これも全刺激の $\frac{1}{5}$ であり、全体的にみれば、臨床群も特定の位置にピッタリと感じるとはいえない。このうち正位置がピッタリと判断された作品はNr 1, 8, 12, 14, 17, 18であり、逆位置の作品はNr 3, 20, 22, 30で、逆位置をピッタリと感じる場合もあり、仮説は成立しなかった。しかし、作品の新しい見方の手がかりを得るために、この結果を以下でもう少し詳しく調べていく。

Nr 1は10%水準($\chi^2 = 3.162$)であるが、正位置をピッタリであると感じている。すでに述べた非臨床群とは反対の結果であり、これは臨床群では柵の開きが左向きであることを認めたためであろう。両者の違いを検定すると、1%水準($df=1$ $\chi^2 = 11.683$)で有意にピッタリであると感じる位置の違いが認められる。

Nr 8 は臨床群ではピッタリとした感じと受ける位置に差が認められず、どちらの位置とも断定されなかった。しかし、非臨床群では、差がみられ、直観的に正位置とピッタリと感じ、それは魚の方向ではないかと推測した。筆者は、臨床群の方がよりこの魚に注目すると思っていたが、予測通りではなかった。この理由は、本研究だけで明らかに出来ないが、魚の方向性は一見些細なことであることを示しているのかもしれない。しかし、一見些細なことであるから重要という矛盾した臨床現象そのままのような感じでもある。両群の違いを検定した結果、1%水準 ($df=1$, $\chi^2=12.308$) で有意差がみられた。

他の対称的な刺激は仮設通りどちらとも判断のつきかねる結果であった。ただ、Nr 19 は有意な差は出なかったが、臨床群では正位置とピッタリと感じているものが多い。非臨床群と臨床群とを比較すると、ピッタリと感じるのに1%水準で有意に差があった。 ($df=1$

$$\chi^2 = 7.881)$$

Nr 3 は臨床群において逆位置がピッタリであると 5 % 水準で有意に多くのものが感じた。

($df=1$, $\chi^2=4.042$) すでに述べたように右向きの動きを重視したのではないかと思う。この傾向は他の作品 (Nr 7, 8, 10, 22, 28) にもみられ、非臨床群よりも強いと思われる。

Nr 7, 10, 28 は判断に差がないが、Nr 8 と Nr 22 は 10 % 水準 ($\chi^2=3.162$) でピッタリと感じられる傾向が認められた。これらは右上への自動車の動き、右上への道を示している。また Nr 12 はその他の作品として刺激としたものであるが、10 % 水準 ($\chi^2=3.162$) で正位置をピッタリと感じる傾向を示しており、やはり右向きの自動車の動きが手がかりになったと思われる。

Nr 22 は非臨床群と臨床群では 5 % 水準 ($df=1$, $\chi^2=6.218$) で有意に違いが認められた。これは、臨床群がモーターボートの進む方向を右側としたためであろう。臨床群は方向性

と重視しており、経験的に左向きの動きも知っているが、右向きの動きをみていこうとしているようだ。

Nr14の作品は正位置で1%水準($\chi^2=7.466$)で有意にピッタリと感じている。これは非臨床群と同じ結果を示しており、臨床群でも、雑然とした作品に正位置を与えており、仮説1は成立しなかった。すでに述べたように「家」が大きな手がかりであったと思われる。

・(コメントとして「家」の位置を注目したと書いた人があった。)

Nr17は左利きの人の作品である。これに対して臨床群では5%水準($\chi^2=4.042$)で有意に正位置がピッタリであると感じている。利き手による差はみられない。(Table 7-2 参照) この作品は大きな怪獣が4匹おり、船、自動車の乗り物が多数置かれ、雑然としているが、中央のヘビが3匹とワニが1匹右上に向っているのが印象的である。このヘビとワニの方向性が手がかりになったのかもしれない

い。

Nr 20は逆位置を5%水準 ($\chi^2=5.048$) で有意にピッタリだと感じている。これは、中央の柵で二つの領域に分けられており、正位置で左側に庭園、右側に動物とインディアンがいるがこれを逆転させた方がピッタリだと感じているのである。動物で示されたものが、内的で左側と判断されたのだろうか。非臨床群との比較では、5%水準で有意にピッタリと感じるのに差がある。($df=1$, $\chi^2=6.121$) 他の領域を示す作品として刺激に用いたNr 6、18、23、29は両群で余り差はなかった。Nr 18は臨床群で正位置でピッタリと感じるのが10%水準で傾向がみられた。Nr 18は2個の箱を使った作品で、左側に海岸、右側は町を示した作品である。臨床群は何か領域を手がかりにしたようであるが明確には現われてこなかった。

Nr 30の作品は臨床群が逆位置を5%水準 ($\chi^2=6.186$) で有意にピッタリであると感じている。これは左利きの人の作品として刺激に

採用したのだが利き手による差はみられなかつた。(Table 7-2を参照)

インディアンとカウボーイとの戦いで、軍用車や飛行機の近代的な武器も置かれたものである。これで見につくのは左側にある便器と城であり、この位置が手がかりになつたのではないかと思う。逆位置がピッタリと判断されたのだから、むしろ右側に便器、城がある方がいいのだろう。

非臨床群と臨床群との比較で感じ方に有意差が出たのはNr1, 2, 19, 20, 22の5個の作品であつた。これらに明確な傾向はみられなかつたが、

Table 7-2 利きの違いによる「ピット」と判定した頻度

作品番号	右手			左手			右左判定
	正位置	逆位置	検定	正位置	逆位置	検定	
1	49	65		4	18		
2	82	32	**	19	3		
3	44	70		9	13		
4	55	59		8	14		
5	63	51		13	9		
6	55	59		10	12		
7	57	57		7	15		
8	61	53		11	11		
9	57	57		10	12		
10	42	72	*	10	12		
11	57	57		10	12		
12	68	46		10	12		
13	51	63		10	12		
14	82	32	**	15	7		
15	42	72	*	14	8		*
16	51	63		7	15		
17	65	49		11	11		
18	61	53		12	10		
19	47	67		10	12		
20	56	58		9	13		
21	62	52		10	12		
22	58	56		14	8		
23	48	66		15	7		*
24	45	69		15	7		*
25	55	59		11	11		
26	51	63		12	10		
27	55	59		11	11		
28	63	51		16	6		
29	55	59		10	12		
30	53	61		9	13		

* 5% ** 1% で有意

臨床群の方が右方向への動きを重視している
ようであり、臨床群がグリーンワルトの図式
に従ったためであると思う。また、Nr 2 は臨
床群が非臨床群よりも魚の意味を考慮するだろ
うという考えに反した結果が出たことは、こ
の考え自体が誤りであることを示しているか
もしれない。また、むしろ、何も考えないで、
単純に、素直に感じた方が制作者の意図に合
致する場合があるという箱庭療法のひとつの
特徴なのかもしれない。これは利点であるこ
とも欠点でもあるだろう。

Table 7-2 は利き手の違いによるピッタリ
と感じた頻度を示したものである。右手群と
左手群で感じ方に有意に差がみられた作品は
Nr 15, 23, 24 の 3 個であり、いずれも 5% 水
準 ($\chi^2 = 5.466, 5.043, 6.164$) で有意差がみられ
た。これらの作品は右手利きの人の作品であ
り、どれも左手利きの人が正位置をピッタリ
と感じていた。左利きの人の作品 Nr 5, 17,
25, 30 の作品に対する感じ方に利き手による

差はなかった。有意差がみられたのは3個だけであり、利き手によつてピッタリ感じるのに差があるとはいえない。仮説3に関して特徴的な資料は得られず、これだけの結果だけでは利き手による影響はないと断定はできないが、利き手による差は余り考慮しなくてよいであろう。7"リエンワルトの図式も利き手による差を考へないで適用できそうである。もちろんさらに綿密な研究で確かめなければならぬ。

性差についてみると (Table 7-3 参照)、男女差にピッタリくる感じの違いに有意に差のある作

Table 7-3 性差による「ピタリ」と判定した頻度

性別 作品番号	男性			女性			男女 判定
	正位置	逆位置	判定	正位置	逆位置	判定	
1	29	60	*	24	23		*
2	65	24	**	36	11	**	
3	34	55		19	28		
4	39	50		24	23		
5	51	38		25	22		
6	38	51		27	20		
7	35	54		29	18		*
8	49	40		23	24		
9	42	47		25	22		
10	33	56		19	28		
11	42	47		25	22		
12	50	39		28	19		
13	38	51		23	24		
14	65	24	**	32	15		
15	40	49		16	31		
16	37	52		21	26		
17	52	37		24	23		
18	51	38		22	25		
19	38	51		19	28		
20	41	48		24	23		
21	45	44		27	20		
22	43	46		29	18		
23	37	52		26	21		
24	41	48		19	28		
25	45	44		21	26		
26	43	46		20	27		
27	44	45		22	25		
28	51	38		28	19		
29	44	45		21	26		
30	41	48		21	26		

*5% **1%水準で有意

品はNr1 ($\chi^2=4.416$)とNr7 ($\chi^2=6.181$)の2個であり、30個中2個に差が認められただけで全体的に差は認められない。Nr1もNr7も男性の作品である。男性は両方とも逆位置をピッタリと感じ、女性はNr1をどちらとも判断せず、Nr7を少差ながら、正位置でピッタリと感じている。男性はNr1、Nr7ともすでに述べた右方向を強調している感じである。また、Nr7の作品の赤い屋根の家に注目すると、この家が男性はむしろ右側の外へ、女性は左側の内へ少しでも寄ることがピッタリと感じたようであり、クレッチマー⁽⁵⁸⁾が世界テストで指摘した関心の向き（女性は内側、男性は外側）とも関係するのかもしれない。

以上仮説として述べた事柄は余り成立しなかったが、ピッタリと感じる位置と作品とを比較検討する時、作品の見方に若干の手がかりが得られたと思う。特定の玩具（家と魚）、道や自動車の方向性などは、他の玩具との有機的な関係もあるだろうが、重要であると思

われる。これらの個々の玩具についての綿密な研究をさらに積み重ねたいと思う。

第 8 章

テーマ分析—道・流れ・川の意味—

第 1 節 問題と目的

心理治療に携わっていると、足をすくませる蛇や野犬などの動物像、幼児や子ども、道を案内する若い女性、老婆などの人物像、美しい花、枯れた花、トゲのある花などの植物像などさまざまのイメージに出会う。これらのイメージが意味している内容を治療者と患者の両者で話し合い、確かめ合っていく作業が心理治療であると筆者は考えている。なぜなら、そのようなイメージは、患者の無意識にある、抑圧された、内的なものの表現であり、治療者と患者との間で、そのイメージを話し合うことにより、より意識化される。それとともに、感情をともなした、新しい意味が出現してきて、患者にイメージの意味が確認されると考えているからである。

ところで、心理療法によく現われてくるイメージの一つに、「道・流れ・川」がある。夢では、分析のプロセスが圧縮されて示されるという初回夢に、例えば、「旅をしている。上がった、下ったしながら山を越えて行くと、山小屋があり、…」とか童話⁽⁶⁹⁾では、「小鳥が道を案内する…」や「道がわからなくなつて近くの家の人に道を聞くと…」などに、道のイメージが出現している。これらは、方向性や方針や過程、道を見失った不安、苦悩などを意味しているようである。また、川に関しては、例えば、ユング⁽⁹¹⁾の示したケースの中に、「川を渡ろうとするが橋がない。そこで、浅瀬を見つけて、渡ろうとする。その時、水の中に隠れていた、大きなカニが足を挟もうとする。行けない。」や「恋人が道路から、凍っている川へ入ったが、裂け目が出来、その中に落ちていく」といった夢があり、これに対し、「川は彼女が対岸に渡ろうとするのを妨げている障害物である…

…」と解釈している。また、加藤(1974)¹¹⁹⁾は、思春期分裂病者の夢と箱庭の作品に出てきた川を「川は生成流転する人生の象徴であり、また深い所にある生命の水としての自己治癒力に関わる『死と生』の象徴である」といい、「絶えず流れ、変化し、人間を運び去っていく人生の象徴としての川」と述べている。

また、遊戯療法や絵画療法や箱庭療法の作品にも、「道・流れ・川」のイメージが示されることもある。例えば、パラレル遊びの再構成が内的世界の再構成と対応していると述べている夜尿症の滝(1966)²⁸³⁾のケースや「みち」を描くことで無意識と意識の分化、意識の首尾一貫性を示したと解説している二橋(1978)¹³⁴⁾のケースや緘黙症の箱庭の作品と「通る」というテーマから分析した大場(1978)²³⁹⁾のケースや吃音の子が箱庭で、もつれた糸のような交叉した道を漸々に整理していったケース^(注1)などがある。

注1) 筆者のケース発表

このように、「道・流れ・川」はいろいろな意味を含んだ象徴として、夢をはじめとする心理療法の中に出現してくる。これらのイメージが箱庭療法ではどのような意味を表わそうとしているのかを、整理し、明確にしようとするのが、本研究の目的である。

具体的な方法としては、筆者が手に入れることが出来た、「道・流れ・川」が作品中にみられる箱庭療法の作品と絵画から、それぞれ15個と3個の計18個の作品を抽出し、「道・流れ・川」の象徴的意味を分析した。

第2節 「道・流れ・川」の意味

§1. 道のイメージ

道の意味を調べると、次の12個ある。1.通りみち、2.わけ、3.ことわり、4.もと、5.はたき、6.てびて、7.むき（方向）、8.いきつくところを示す、9.みちのり、10.通る、11.かよう、

9. 従う、10. 神、11. 導びく、案内、12. おさめる
がある。これらと整理すると、二つにまとめ
られる。即ち、「もと」や「ことわり」や「神
」などは、老子や荘子の天地万物の原理や、
孔子や孟子の人の守るべき規範、八正道とし
ての正しい行為として、根本原理や真理を意
味する。²⁹⁾ 一方、「とおりみち」、「てだて」、「む
き」などは、神と人間とを結びつけるもの。
あるいは、死者の世界と現世との道、人間相
互の交流と結びついて、結合、発達、開発、
交流を意味する。この関係を説明して、³⁰⁾ 人が
それによつて行くためのものとして、「行く」、
「おこなう」、「おこなうための」技術、方法
などの意味が生じ、また、「依り従う」、「従う
べき法則」つまり道理の意味も生じたと説明
されている。また、交叉し、互いに交流し合
うための通路から、反対のものと結合するシ
ンボルともなる。また、回り道、バイパス、
花道、上水道、下水道など道に関係する表現
はいろいろある。これらの意味をもつ道が、

箱庭療法の作品では、どのように現われているかをみていきたい。

作品1 吃音 6才 男児

「左下側と右下側に、トラック、かソリン車、自家用車などの自動車が柵の中に押し込められている。左上には、動・植物のない、さびしい公園。右上には家が三軒ある。これをつないで、道があり、川が流れている。信号が一つ置かれている。」

この作品は、自動車が柵の中に閉じ込められて、街には動くものが何もなくて、さびしい。閉じ込められた自動車は、患者の、無意識に抑圧された、うっ積したエネルギーを示していると思う。自動車がいかに柵から出て、この道を走るかが治療過程と関係するかもしれない。また、信号が置かれているのは、患者の用心深さだろうか。あるいは、信号は道の進み方と示すものであり、治療過程を何か示唆しているのかもしれない。

作品ス 非定型精神病 スオ 男性

「木のはえた山道を大きな荷物を背負、人が歩いている。左上の行く手には、大入道が待っている。」

これは、道がテーマの絵画であり、制作者が症状消失後、ふり返って書いたものである。彼は、当時の様子と、「あの頃の私の歩んでいた道は、こんな風でした。重い荷物をしよわされて、坂道を汗水流して歩いて行くのです。行く手には、大入道がとうせんぼ⁶⁹としているのです。それでも、どうしてもこの道を行かなければならなかったのです。」と述べている。この作品は制作者の気持を象徴的に示し、問題の大きさを暗示していると思う。筆者は、この絵を見た時、グリム童話⁶⁹⁾などによく出てくる「主人公が森の中に入ると大入道が道をふさぎ、そこから事件が起っていく」話を連想した。童話では、大入道を倒すのに、超人的な力、魔法の力が発揮されるように、この患者がこの道を進むには、強かなエネ

ルギーがいったことだろう。この作品は、症状の重さ、治療の困難さを示していると思う。また、ユング⁽¹⁰⁸⁾がモートン・プリンスの事例で、「岩だらけの道は人生の象徴的表現として、夢に出てくる」と言っているように、患者の人生を表現したのかもしれない。

作品3 作品1と同一人

「砂箱の砂を全部外に出して、底をきれいに掃除し、その上に、二筋の道を作った。二本の道が左右に走っている。」

これは、一見弱々しい道である。しかし、底まで掃除したことは、今までのものをすべて拭い去って、新たに新しく道を作っていかうとしている感じを示している。このセラピーの、今後の目標の一つは、この道を大切に、強固にし、のびしていくことだろう。この作品は、作品1より5年後の治療中期頃に作られた。カルフ⁽¹¹³⁾が、道の建設をエネルギーの流れと関係づけて説明していることから考えると、作品1の閉じ込められた自動車で

示されたエネルギーが流れ始めたと考えられよう。

作品4 ノーマル 大学生 男性

「山々が連なっており、一筋の道が右上の五重塔へと続いている。左下側に、その道と一台の自動車（なお、制作者はこの自動車を自分と指摘している）が五重塔をめざして進んで行く。」（Fig7-2 作品番号は参照）

これは、ある目標が定まって、力強く進む方向が決まったことを示している感じである。しかし、目標は遠く、その道程も曲りくねった、起伏のある山道であり、制作者の歩みは容易でないだろう。さらに憶測すれば、山へ登ることは上昇を意味しており、また目標が五重塔であることから、天と地を結びつけるものとしての道に当てはまるかもしれない。神殿へ通じる道の例としては、カルブ¹³⁾の赤面恐怖の青年の作品がある。

作品5 学校恐怖症²⁰⁵⁾ 14才 男性

「中央下側からやや左上へと大きい道が続

いている。その道の上を人が歩いており、左上の家に向っている。道の左右は、田園であり、そこには、木がはえていたり、人が働いていたりする。右上にはブタやウシが飼われている。」

これは、終結時の作品であり、目標に向って行く決意の表明を示している。新しいものへ向って、確実に道を歩んでいく制作者が道の上の人で示されているのだろう。カルプ⁽¹³⁾のクリストフの事例では、新しい世界に通じる道として、やはり終結時の、「のびのびした田園の中で、バスを待っている少年」の作品を示し、「そのバスは広い世界へ彼を乗せて行ってくれるのである」と結んでいる。

以上「道」を示す作品を5個あげたが、これらは、①患者の歩みと方向性、②問題の大きさ、③歩み始め、④天と地と結ぶ道などを意味していた。

§ 8. 流れのイメージ

「流れ」とは一方向から他方向へ、あるいは、ある地点からある方向へものが移動することである。口語辞典では、「流れ」の意味は、1. 流れること、2. 流れる水、川、3. 伝わ、ていく道筋、足取、4. さすらいなどがあげられている。流れには、「時の流れ」、「煙の流れ」⁽⁴⁴⁾、「自動車の流れ」、「人の流れ」、「水の流れ」などいろいろある。ところで、何が流れるかによって、二つの場合が考えられる。一つは、例えば、「時の流れ」、「水の流れ」は、過去から未来へ、高い所から低い所へという一定方向しか流れ得ないものであり、一つは、「煙の流れ」⁽⁴⁴⁾、「自動車の流れ」のように、どの方向へも流れ得るものである。箱庭療法⁽⁴⁵⁾の作品では、水の流れ(川として次節に述べる)、動物の移動、乗り物の動き、兵隊の行進などとして表わされる。以下で、いくつかの例を示し、「流れ」の意味を考察する。

作品6 動作がのろい 9才 男児

「4匹の親ゾウと7匹の子供ゾウと3匹のトナカイが左側へと移動している。」

この作品は、カルフ⁽¹¹³⁾のジエームスの例などと同じように、左側への動物の行進を示している。彼女が、左側に向うのは無意識への動きであると説明している。このケースでは、この作品を作った後、「砂嵐だ」と言って、動物を埋める遊びをした。この遊びは、エネルギーが左側へ流れて集積し、爆発したことを示すようであった。あるいは、動物で示される本能的、衝動的なものを埋めて、コントロールできることを示したのかもしれない。

作品⁽²²⁴⁾ 嘔吐 9才 男児

「箱の中央で、世界が上下に川によって分割されている。(川が境界線となり、分離の役割をしている。) 上側の部分には、家が二軒とその家を守るように、ウマにのったカウボーイがいる。また、ブタ、ウシ、ヒツジが左側へと移動している。ニワトリもいる。柵によって守られており、門は閉されている。川

には、橋がかかっており、川の中には、カエルが5匹いる。下側の部分には、ウマにのったカウボーイが上側を見ており、攻めてきた感じもある。」(Fig 7-2 作品番号3 参照)

この作品は、作品6と違って、上側の部分だけで、左側への動物の行進が見られることが特徴の一つである。下側の部分と上側の部分とが交流し、統合するためには、柵をとり、門を開くかなければならない。この変容のためには、川にいるカエルが働かなければならないのだろう。この場合には、意識と無意識との交流であり、困難な、深いレベルの交流といえる。今は、上側の部分だけで、動物が左側へと動いている。

作品8 うつ状態 20才 女性

「中央に川があり、世界が左右に分割されている。右岸から左岸に、ヒツジ、ウシ、シマウマが移動している。兩岸には草や木がはえている。」

これは、治療中期の作品である。左側に動

物が向っているのは、作品6、7と同じであるが、異なる点は、両領域の交流を明確に感じさせる点である。

作品6、7、8は、動物の左側への動きばかりであった。経験的にみて、治療時の作品は、左側への動きが右側への動きよりも多いようである。

作品9 学校恐怖症 13才 男性

「森や山や谷をぬって、細い道を、戦車、ジープなどの軍用車が左側から右側へと行進している。」

この作品は、自動車が右側へ動いていることを示している。自動車が数珠つなぎになっていて、あたかも蛇のような感じがする。起伏のある広い森の中に、へビだけがうごめいている感じであり、孤独な、さびしいうごめきの感じでもある。ある人は、「頭と尾がない。どこから始まり、どこへ行くのかわからない。」と指摘した。これは、治療中期の作品であり、セラピーのむつかしい時期とも一致し

ていた。

「流れ」の作品は、治療中期頃によく出現し、エネルギーの流れやセラピーの動向と関係するのが多いようである。

§ 3. 川のイメージ

「かわ」は、漢字では「川」と「河」があり、小川とか大河とか形容されることもある。その意味は、山から流れ出てくる水の流れである。水は高い方から低い方へ流れる性質があり、これを妨げることはできないから、川は一定方向への流れである。川の象徴的意味をみると、³⁰⁾「川は、豊饒と土壌の進んでいく灌漑を意味し、他方、逆行できない通過とその結果から、消滅と忘却の意味となる」の二つがあるといわれている。川は付近の人間が住みつき、文化が始まった。川は水が増水し、あふれて、洪水となる。洪水ではノアの箱舟が思い出される。これは死と再生のテーマとも関係してくる。このようにみると、川は

、生のための意味と死滅への意味の二つが考えられる。童話などで出てくる「小川のささやき」のように、凝人化される特徴もある。二つの領域を分ける境界線としての役割もある。また、川に関係深いものとして、橋、舟、渦、ダムなどが考えられる。以下で、箱庭療法の作品でどのような形で川が出現するかみていきたい。

作品10³⁰⁸⁾ 分裂病 25才 女性

「うっそうとした森である。赤い屋根の家が下辺中央に置かれている。左上に小さな泉が掘られ、そこから川が流れ、蛇行して、森も分割して、右辺に注ぐ。川岸には、花が咲いており、川の途中に、大石が置かれて、流れを妨げている。川には橋もかかっている。」

これは、無意識の森の中で、生命のエネルギーを示す水が泉から流れ出したが、石でせき止められていることを示している。森の深さと流れを妨げている大石は、治療の困難さ

と示しているようである。大石をとり除き、水路づけて、エネルギーをいかに流すかが問題であろう。ユング⁽¹¹³⁾は「リビドーは川にたとえられる。障害があるとせき止められ、洪水の原因となる」と述べている。この作品は、この説明を視覚的に示したといえよう。カル⁽¹¹³⁾フもまた、グニーラの事例で、「石を川の中に置いた。流れている川が作られたということが、子供の抑圧が解かれはじめたということと指し示していたとしても、その石はなおも克服すべき障害物・・・」と川とそこに置かれた石を意味づけている。

作品⁽²⁰⁶⁾11 学校恐怖症 13才 女性

「川で世界が二つに分割されている。右上の部分には、家と木がある。左下の部分には、丘があり、小さい木が茂っている。二つの世界は橋でつながれている。」

この作品は、第1回目に作った作品であり、全体にさびしい感じがする。学校恐怖症によく出てくる分割のテーマであり、川は二つ

の世界を分ける役をしている。作品7, 8, 12などの川もこの役割をしている。

作品12 対人恐怖症 18才 女性

「川が流れている。左岸にだけ林があり、右岸には何もない。」

この作品は絵画である。これは、一方の世界だけで生活しているこの制作者を象徴的に示している。即ち、右岸に何もないのは、人と接触することと恐れるために、外的な世界、現実での生活が困難なことを示していると思う。左岸と右岸を結ぶものは何もなく、川が二つの世界を隔てている。川が結合を妨げる例としては、天の川の話が有名である。実際に、箱庭療法で、天の川を作ったケース^(注1)があった。

川がわずかに蛇行しているのは、両領域の断絶も少し緩和しているようである。川が幾何学的に、直線的に作られるか、蛇行して曲がっているか、川に何か生きものがあるか、橋がかかっているかなどで、二つの世界の断

(注1) 谷口美紀のケース

絶の程度が異なるように思う。

作品13 うつ状態 31才 男性

「川が中央で左右に走り、箱を上下の二つの部分に分割している。上側の部分には、草があり、人がえ、3人いる。川には舟もある。下側の部分には何もない。」

これは、未開拓地に川が流れ込んだ感じの作品である。文明が開けたのが川の付近からであったように、この川を中心に、何か開かれていく感じの作品である。それはあたかもこの患者の心にも川で示されるエネルギーが流れ込み、これを糧に心を拡大していくことを示しているかのようである。このケースは、このテーマが続き、終結時には、上下の部分に木も茂り、賑やかになった町が出来た。

作品14 集団不適応 6才 男児

「川が左上から箱の縁に沿って右側へとのび、箱を半周して、中央下側まである。この川は氾濫して、箱全体が水びたしであった。(写真では水が少し引いている) 陸には、い

ろいゝろな自動車がか置かれてゐる。」

これは、水の使用を許したので、文字通り、水びたしの作品となった。この洪水は、未分化な攻撃性が示されているとともに、何か根源的な状態にまで、さかのぼる必要性を暗示しているようである。

作品15 書座 スコ 男性

「左側、下側のわずかの部分が陸で、中央の部分が中の島である。左側の部分には、丘と木、下側の部分には、五重塔、木、城などがある。また、中の島にも、三重塔、木、城がある。中の島を取り囲んで流れている川は、増水して、陸にまであがってきてゐる。」

この作品は洪水の感じであり、エネルギーが流れ出したものの、少し収拾がつかず、発散的に流れていることを示していると思う。

作品16 作品1と同一人

「中央の部分に、円形の島がある。島には、白い四角のブロックで作られた上水道の建物があり、その下には、下水道が作られてい

る。下水道にはコルク栓がしてあり、流れていない。タイルが敷かれ、その上に人がいる。三角形に形づくられた柵の中には、ニワトリと人がいる。島のまわりに川が流れている。その川には、舟が一隻浮んでいる。右上には、橋があつて、陸と島を結んでいる。」

この作品は、作品1の後、1年半が経過した時に作られた。力強く作られ、患者は力を自由に出してきた感じだが、下水道にコルク栓がされていることは、エネルギーが自由に流れておらず、まだまだ問題があることを示していると思う。

作品17 作品1と同一人

「激流の中に、ボートにのった2人がある。2本のオールは流されてしまっている。渦に舟が引きこまれそうでもある。」

この作品は絵画で示された川を表わしている。治療者と患者と思われる2人が、オールを失い、どう進むべきかの方向性が決められず、自分（2人）で動かすこともできず、た

だ流されているだけの状態を示している。両者の無力さと自然の力を象徴しているのだろう。この時点で、治療の方向性と治療者の力量と仕事の大きさを再考しなければならないと思われる。これは作品1よりおよそ年半後に作られた。

作品18 下着集め 14才 男性

「左下から右上にのびている川によって、世界が二つに分割されている。川には橋がかかっており、一人の人が渡っていく。右下の部分には、舟、家、燈籠、草があり、一人の男が手を振って、渡っていく人を見送っている。左上側には、お堂、木、草がある。」

これは、終結期の作品である。一人で歩き出した患者を象徴するように、一つの世界から違う世界へと渡っていく出立のテーマを示している。

「川」は①エネルギーの流れ、②問題の大きさ、③境界線としての役割、④破壊、⑤渡河などと関係している。

第3節 まとめ

「道・流れ・川」が示されている箱庭療法の作品を中心に、「道・流れ・川」のイメージの意味を分析してきた。ここでは、テーマ研究を今後、発展させるためにも、自由に少し考察していきたい。

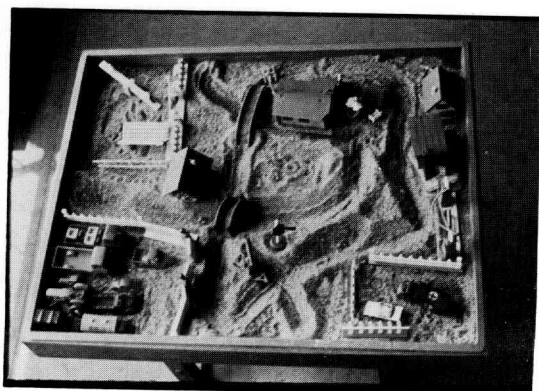
「道・流れ・川」は、1.境界線としての役割（作品7, 11, 12など）、2.生命のエネルギーが流れ出した感じ（作品10, 13）、3.進むべき方向性の決定（作品4, 5, 18など）、4.道の構築、5.洪水、6.交流などを示している。

これらのイメージは、心理療法では、フロイトのリビドー、ユングの心的エネルギーなどの水路として意味づけられる。また、石とか大入道などの障害物が置かれ、流れがせき止められ、エネルギーが停滞する様子を示すこともある。

「道・流れ・川」の作品と症状とが明確に

対応しているとは断定できないにしても、治療の初期の作品に、患者の問題の大きさ、解決の困難さなどと象徴的に示していると思われるものがあった。（作品1、2、9、10など）治療過程と関係づけてみると、治療の初期には、「未開拓地へ流れ込む川」、「川が世界を二つに分割して、両世界の交流が困難なこと」、「道や川の上に置かれた障害物」、「曲りくねった道」などが作られやすい。（作品1、2、11、12など）治療中期には、患者の不安や動揺、攻撃性などとの関係から「洪水」、「見失った方向性」、「渡河のはじまり」などが作られやすい。（作品6、7、8、14、15など）また、終結期には、「進むべき道が確立（出立）」、「渡河」などが作られやすいといえよう。（作品5、18）

作品
1



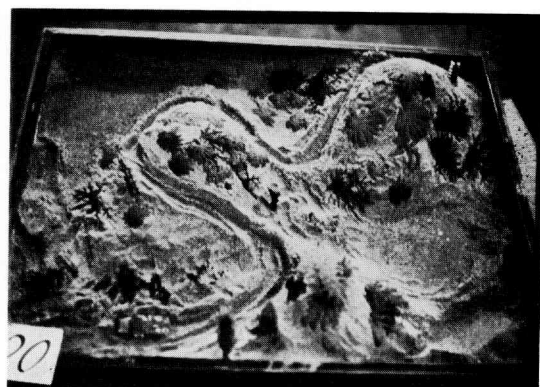
作品
2



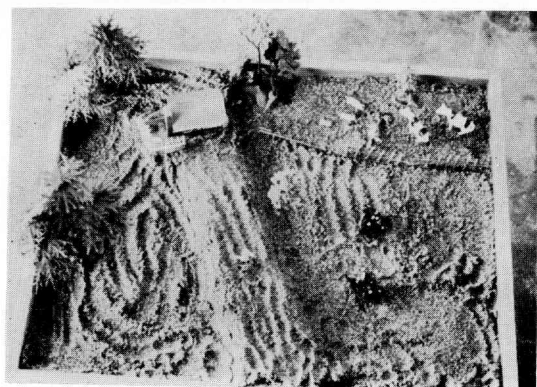
作品
3



作品
4



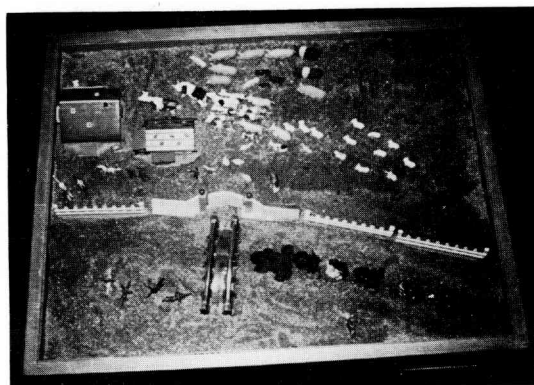
作品
5



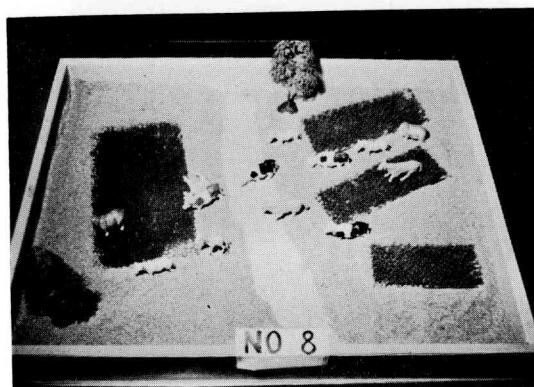
作品
6



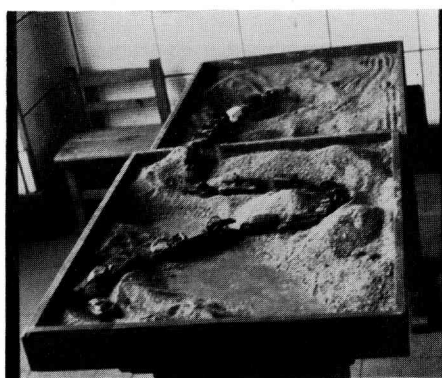
作品
7



作品
8



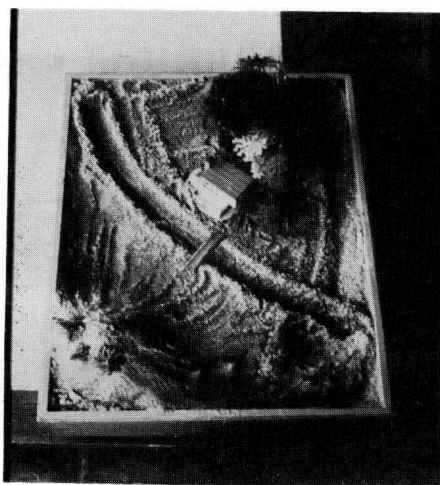
作品
9



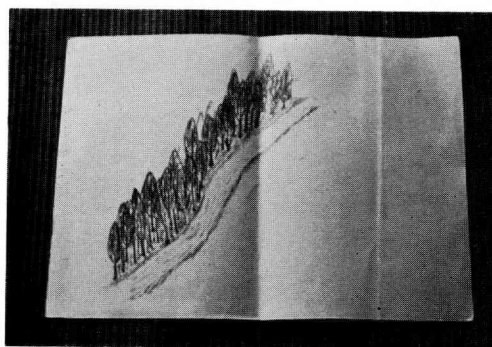
作品
10



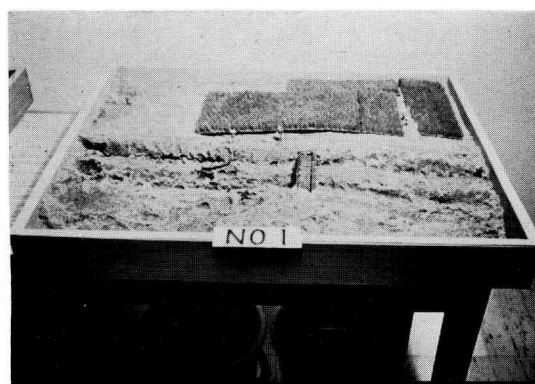
作品
11



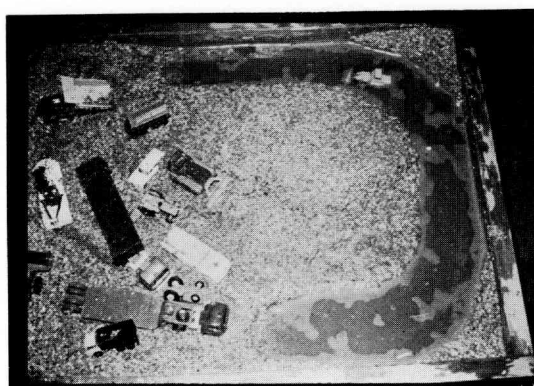
作品
12



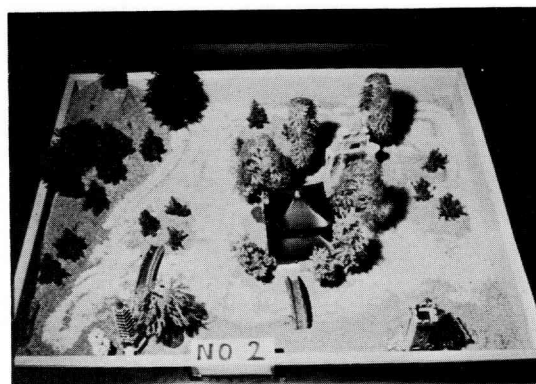
作品
13



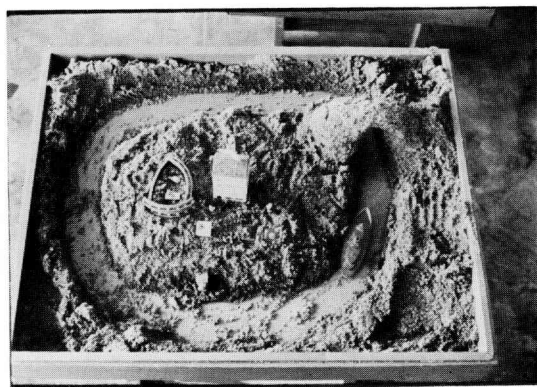
作品
14



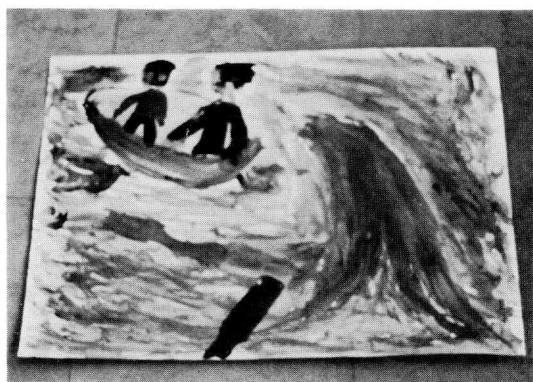
作品
15



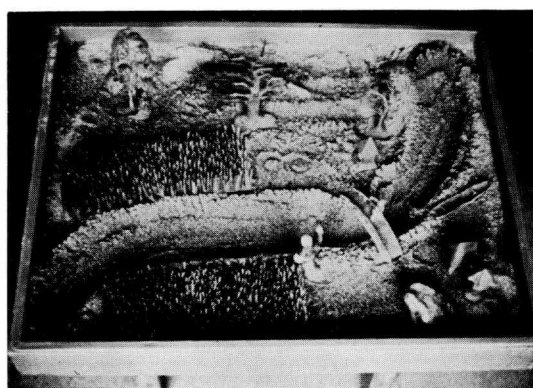
作品
16



作品
17



作品
18



第 9 章 総 括

第 1 節 本論文の要約

本論文は理論編と研究編の 2 部 8 章より成立しており、その目的は、箱庭療法とは何かと明白にすることである。

第 1 部理論編の 1 章から 3 章まででは、箱庭療法の変遷、作品の見方など箱庭の理論面について記述した。箱庭療法はユング分析心理学を背景に持つものであるが、日本では、精神分析の考えとあまり強調せず、ロジャーズ流の来談者中心的な考えをもとに実施されている。このことは、箱庭療法が、日本において過渡的な役割を果たしていることを示しているといえよう。一般に、過渡的にあらわれるものはやがて消滅してしまうが、この療法は砂を使用すること、玩具を使用した視覚像

であることなどの特徴のために心理療法の一技法として残存する療法であると思う。

心理療法は無意識と意識との関係調整であるという視点から、無意識の大切さを強調し、箱庭の作品はイメージの表現であり、象徴的で、無意識とのかかわりが強く、その個人を示す自己表象であることと強調した。これは表面的には無意識内に抑圧されたものを解放し、意識がそれと統合すれば治療が展開するという考えに基づくが、より深く考えれば、人間には自己治癒力があり、相反するものと統合し、成長し続けていく力があることと認めることであると思う。その力が何故あるかと明らかにすることは筆者の最終目標であるが、本論文においては、箱庭の作品を制作することが、自己治癒力を呼び起こし、個人が個人としての、ひとつの道を歩む過程を如実に示し、心理療法の一技法として有効であることと記述した。

第2部研究編の4章から8章までは、箱庭

療法とは何かを明白にするための基礎的研究である。

第4章では、年齢差による作品の特徴及び制作時間、初発時間などの統計的特徴を明らかにした。例えば、制作時間は大体20分前後であり、高群が一番長く、小6群が一番短かった。また、制作し始めるのには30秒以上を要し、年齢とともに砂に触れる人が増え、作品の高さは高くなっていく傾向があった。使用玩具の特徴としては、植物類は年齢とともに多く使用され、乗り物類は小3群では多く使用されるが、小6群から減少するなどが明らかになった。

また、各群の作品の特徴として、幼群の作品は、整理されていない、雑然とした感じで、玩具が羅列的に置かれる傾向がある。小3群は、玩具を吟味して置き、テーマを考えて制作しているようであり、まとまりがある。男子は戦いのテーマが、女子は町のテーマが多い。小6群では、男子はジャングルと戦いの

テーマが、女子は家と町のテーマが多くなり、概して、貧困な作品が多かった。中ス群では、男子は動物に関するテーマが多く、女子は小6群と同様に町と家のテーマが多い。高群では、森のテーマが多いので、森の開拓されている程度に注目し、その程度に応じて、作品の分類を試みた。大群では、テーマが多彩になる。

第5章では、印象を中心に作品を分析し、箱庭療法の診断性に言及した。例えば、作品を制作する所要時間は、正常群が異常群より長くかかり、また、砂を堀り下げる程度はより深く、砂に接触する人数は多い。使用された玩具の数は、正常群が異常群より多いなどの診断のサインを得た。

S D法によって、6次元（動的統合型、動的非統合可能型、硬直型、貧困型、静的統合型、積極的防衛型）が抽出された。その結果正常群は、動的統合型のグループに、異常群は積極的防衛型のグループに属する作品が多

いことがわかった。他の次元のグループでは、テーマなどを考慮することによって、やはり診断性は高まると思われる。また、対形容詞については、4次元（統合性、充実性、力量性、柔軟性）が抽出され、正常群は各次元に異常群より高い値を示すことが明らかになった。

第6章では、IMQとSD法の投影的質問紙によって、両質問紙における動物イメージの特徴と差違を明白にした。キリンのように動物の属性が外貌に理由づけられるものと、ライオンのように、人格・性格に理由づけられるものがある。また、ライオンのようにPositiveにみられているものと、トラ、イノシシのようにNegativeにみられているものがあるなどの動物像の違いが明白になった。

次に、SD法で評定された動物をセントロイド法で因子分析した結果、3因子（「優しさ-悍猛さ」、大きさ、力動性）が抽出された。また、対形容詞をセントロイド法で因子分析

した結果、Osgoodと同じ3因子（評価性、活動性、潜勢力性）が抽出された。評価性因子の値が高い動物は、ウマ、ゾウ、イヌなどであり、活動性因子の高い動物は、ネズミ、サル、イノシシなどであり、潜勢力性因子の高い動物には、ライオン、トラなどがあることが明らかになった。

第7章では、箱庭の作品がどのような手がかりをもとに把握されているのかも明白にするために、作品の左右性について研究した。仮設は①逆位置よりも正位置で「ピッタリ感じる」傾向があるだろう。対称的な作品、雑然とした作品は左右の区別がつかないであろう。②左利きの人と右利きの人とで、作品の判断に違いがみられるだろう。仮設はすべて成立せず、作品に固有の位置があるとはいえなかった。しかし、作品を把握する手がかりとしては、特定の玩具（魚、家）が重要な役割を演じる場合がある。また、左から右への方向性も重視されているなどの結果を得た。

第8章では、テーマ分析のひとつとして、道、流れ、川が作られた作品について分析した。「道」は①患者の歩みと方向性、②問題の大きさ、③歩み始め、④天と地を結ぶ道などという意味していた。「流れ」は治療中期頃によく出現し、治療の動向と関係しており、エネルギーの流れと関係づけられるように思われる。「川」は①エネルギーの流れ、②問題の大きさ、③境界線としての役割、④破壊、⑤出立（渡河）などに関係している。

以上の5つの研究によって、箱庭療法の作品はどのようなものであるかを明白にしてきたが、これらの研究で十分であるというわけではない。次節では、残された課題について述べたい。

第2節 今後の課題

本論文で触れられなかった、今後の課題について述べ、本論文の終りとしたい。

1. 本論文の研究は、制作し終った作品についての分析であったが、制作中についての分析は皆無であった。制作中の制作者の心の動きが大切であり、これこそが箱庭療法の核心でもあるから、制作過程の研究は今後の重要な課題である。しかし、治療を中心と考え、かつ制作者の心の動きも大切に考えると、その過程中に、実証的な、第三者的な刺激を加味することには、制作を歪曲する怖れもあり、微妙な、困難な問題があるのも事実である。

2. 本論文の研究を補うものとして、年齢差を狭くすること及び各層の被験者を増加すること（大群の女子も必要）、動物だけでなく、植物などの個々の玩具についてのイメージ研究、自己像、分割のテーマ、攻撃などのテーマ研究が考えられる。また、この療法と投影

法や質問紙法などの性格検査との関係、診断別による作品の特徴の有無などの研究が必要である。

3. 本論文の基礎的研究は、横断的方法が中心であり、縦断的方法がなされていない。横断的方法による研究によって、箱庭療法とは何かを総合的に把握することが出来たが、箱庭の作品が個人的なものである以上、縦断的方法による研究が必要である。ただ、この場合、種々の困難がともなう。例えば、十数年間にわたって被験者を追跡し続けることは困難である。^{注)}これに代わるものとして、治療事例が考えられる。これは短期間であるが、一連の過程を示すものであり、かつ箱庭療法が治療技法である以上必要な方法である。ただ、本論文は基礎的研究を中心にしてまとめたので、治療事例には触れなかった。臨床心理学にとって、事例研究は重要な方法である。

注) 筆者は自分の子どもであるが4年間(3才～6才)に渡り、縦断的に作品を収集しつつある。また、文献上2人の3人について、7年後の箱庭の作品を収集している。

今後、本論文の続きとして事例編を考えていきたい。

4.以上本論文で触れられなか、た問題のいくつかについて述べたが、それにもかかわらず、箱庭療法には把握されない未知数が残る。そこに、この療法の利点と欠点があり、かつ、魅力があるといえる。筆者は、今後さらにユング分析心理学に基づき、日本的な思想を加味しながら、箱庭療法とは何かを明白にしつつ、また、この療法をもとに、心理治療について考えていきたい。そこには、人間の成長力の不思議さを感じられ人間の心、人間性、そして、「人間とは何か」の問題を考察し続けていく素材があると思う。それらは患者と接触する中から生まれてくるものであることは言うまでもない。

参 考 文 献

1. 阿部余四郎他, 1953, 生物学大系, 中山書店
2. 秋山幹男, 1974, 幼児のサンドプレイー使用玩具による検討一, 日本心理学会第38回大会発表論文集, 530-531
3. シ, 1976 幼児のサンドプレイ(2)ーカテゴリー別にみた初回作品の玩具分析ー, 日本心理学会第40回大会発表論文集, 1033-1034
4. シ, 1977, 幼児のサンドプレイ(3)ー「全体的な感じ」の評定ー, 日本心学会第41回大会発表論文集, 1006-1007
5. 秋山達子, 1970, サンドプレイテクニック(箱庭療法)について(1)~(4), 幼児と教育, 69, 5~83
6. Allen, F.H. 黒丸正四郎訳, 1955, 問題児の心理療法, みすず書房
7. Allen, R.M., 1958 Personality Assessment Procedures, Harper & Brothers, New York,
8. 青木健次, 1976(a), 強迫症状を持つ少年の箱庭療法, 臨床心理事例研究, 3, 95-103, 京都大学教育学部心理教育相談室紀要

9. 青木健次, 1976(16), 空間象徴の実証的研究—Grünwaldの図式について—, 日本心理学会第40回大会発表論文集, 1029-1030
10. シ, 1977 強迫症状を持つ少年の箱庭療法(続), 臨床心理事例研究, 4, 74-83
京都大学教育学部心理教育相談室紀要
11. シ, 1978 恐怖の中の思春期—強迫神経症の高校生—, 臨床心理事例研究, 5, 47-56, 京都大学教育学部心理教育相談室紀要
12. 東 英明, 1967, 幼児におけるMosaicの反応様式—その精神発達の側面について—, 児童精神医学とその近接領域, 8, 4, 311-322
13. 馬場礼子, 1975, 登校を拒否する児童の—事例, 研究紀要, 7, 20-32, 宝塚市立教育研究所
14. シ, 1977, ある登園拒否児の事例, 研究紀要, 12, 54-71, 宝塚市立教育研究所
15. Bellak, L. 1958, Psychoanalytic Concepts and Principle Discernible in Projective Personality Tests; II. Psychoanalytical Principles Discernible in Projective Testing, Amer. J. Orthopsychiatry, 28, 42-46
16. Binswanger, L. 新海安彦, 宮本忠雄, 木村 敏訳 1959, 精神分裂病, 升々書房,
17. Boorstin, D.J. 1961 The Image, Harper & Row Publishers
18. Boss, M. 三好郁男訳 高態性高血圧の精神療法, 藤沢薬品工業株式会社

19. Bowyer, R. 1959 The Importance of Sand in the World
Technique: An Experiment, Brit. J. Educ. Psychol.
29, 162-164
20. " 1970 The Lowenfeld World Technique,
Pergamon Press
21. " and Gillies, J. 1972 The Social and
Emotional Adjustment of Deaf and Partially Deaf
Children, Brit. J. Educ. Psychol. 42, 3, 305-308
22. Buhler, C. 1952 Brief Reports: National Differences
in "World Test" Projection Patterns, J. Proj.
Tech., 16, 42-55
23. Buss, A.H. & Durkee, A. 1957 The Association of
Animals with Familial Figures, J. Proj. Tech.,
21, 366-371
24. Caillois, R. 塚崎幹夫訳, 1976, 反对称一右
と左の弁証法一, 思索社
25. Campbell, D.T. 1957 A Typology of Tests, Projective
and Otherwise, J. Consul. Psychol., 21, 207-210
26. Carek, D.J. 高野清純他訳, 1974, 児童心理
療法の原理, 日本文化科学社
27. Carol, H.A. & Robert, B.A. Research and Clinical
Applications of the Doll-Play Interview,
28. Castle, R.L.V. & Spicher, R., 1964 A Semantic
Differential Investigation of Colour on the Holtzman
J. Proj. Tech. 28, 491-498

29. 中国学芸大辞典, 1959, 東京元々社
30. Cirlot, J.E. 1962 A Dictionary of Symbols, Routledge
& Kegan Paul
31. Corsallis, M.C. & Beale, I.L. 白井常他訳, 1978,
左と右の心理学—からだの左右と心理—, 紀伊国屋書店
32. Coyne, L. & Holzman, P.S. 1966 Three Equivalent Forms
of a Semantic Differential Inventory, Educ. Psychol.
Measurem. 26, 665-674
33. Cronbach, L.J. 1961 Essentials of Psychological
Testing, second edition, A Harper International
Edition 3-64, 501-504
34. Dorken, H. 1952 The Mosaic Test; Review, J. Proj.
Tech. 16, 287-296
35. / 1954 The Reliability and Validity of
Spontaneous Finger Painting, J. Proj. Tech. 18,
169-182
36. / 1956 The Mosaic Test: A Second Review,
J. Proj. Tech., 20, 164-171
37. Edinger, E.F., 1972 Ego and Archetype, G.P. Putman's
Sons, New York
38. Eickloff, L.F.W. 1952 Dreams in Sand, J. Ment.
Sci. 98, 235-243

39. Eliade, M. 堀一郎訳, 1963, 永遠回帰の神話祖型と反復-未来社
40. 江見佳俊, 1964 Rorschach反応の投影性に関する研究-投影形式とその特徴-, 臨床心理, 3, 62-70
41. Erikson, E.H. 1950 Childhood and Society, Penguin Books
42. Eyans, R.I. 1964, Conversations with Carl Jung and Reactions from Ernest Jones, van Nostrand Reinhold Company 浪花博, 岡田康伸訳, 1978, 無意識の探求 誠信書房
43. Fink, E. 石原達二訳, 1976, 遊戯の存在論-幸福のオプシス 誠信書房
44. Fordham, M. 1969 Children as Individuals, Hodder and Soughton, 浪花博, 岡田康伸訳, 1976, 子どもの成長とイメージ, 誠信書房
45. Frank, L.K. 1939 Projective Methods for the Study of Personality, J. Psychol. 8, 389-413
46. / 1960 Toward a Projective Psychology, J. Proj. Tech. 24, 246-253
47. Freud, A. 外林大作訳, 1958, 自我と防衛, 誠信書房
48. / 北見芳雄訳, 1961, 思童分析, 誠信書房
49. Freud, S. 丸井清泰訳, 1953, 精神分析入門<上×下> フロイト選集才2巻, 日本教文社
50. / 高橋義孝訳, 1954, 夢判断, 日本教文社

51. Freud, S. 懸田克躬, 高橋義孝他訳, 1973, ある5歳男児の恐怖症分析, フロイト著作集, 5, 173-275
52. Fordham, F. 佐伯禎明訳, 1963~64, ユングの深層心理学入門(1~12), 人間の科学
53. 藤井しのぶ 1976(a) 子どもの箱庭表現とその変化, 京都大学教育学部修士論文
54. 藤井しのぶ, 河合幸雄, 1976(b) 箱庭の空間象徴的理解, 日本心理学会第40回大会発表論文集, 1027-1028
55. 藤井しのぶ 1977 箱庭に現われた破壊から建設への過程, 日本心理学会第41回大会発表論文集, 1002-1003
56. 藤岡喜愛 1964 ロールシャッハテストによるパーソナリティ像試論, 人文学報, 20, 82-99
57. 藤岡喜愛, 米山俊直監修, 1972. イメージの世界, Energy, 9, 4.
58. 船越智行 1974 小学校高学年児における登校拒否について—慢性化した登校拒否事例—, 教育相談(VIII), 研究紀要第100集, 23-28, 横浜市教育センター
59. Gardner, M. 坪井忠二訳, 1971, 自然界における

左と右，紀伊國屋書房

60. Garfield, S.L. 1946 Clinical Values of Projective Techniques in an Army Hospital, J. Clin. Psychol. 2, 88-91
61. Gill, W.S. 1967 Animal Content in the Rorschach, J. Proj. Tech. & Person. Assess. 31, 49-56
62. Gillies, J. 1975 Personality and Adjustment in Deaf Children, Brit. J. Proj. Psychol. and Person. 20 I 33-34
63. Ginott, H.G. 1961 Play Therapy; The Initial Session, Amer. J. Psychotherapy, 15, 73-88
64. “ 中村悦子訳，1965，児童集団心理療法—その理論と実践—，新書館
65. Goldfried, M.R. 1963(a) The Connotative Meaning of Some Animal Symbols for College Students, J. Proj. Tech., 27, 60-67
66. Goldfried, M.R., 1963(b) Age as a Variable in the Connotative Perceptions of Some Animal Symbols, J. Proj. Tech., 27, 171-180
67. Green, R.F. & Goldfried, M.R. 1965, On the Bipolarity of Semantic Space, Psychol. Monographs General & Applied, 79, 1-31
68. Grigg, A.E. 1959, A Validity Study of the Semantic Differential Technique, J. Clin. Psychol., 15, 179-181

69. Grimm, J. & Grimm, W. 金田鬼一訳 1954 グリム童話
岩波文庫

70. Groesbeck, C. J. 1975 The Archetypal Image of the
Wounded Healer, J. Analyt. Psychol. 20, 2, 122-145

71. Harlow, H.F. 浜田寿美男訳 1978 愛のなりたち
ミネルヴァ書房

72. Hastings, J. 1961 Encyclopedia of Religion & Ethics,
4th., Edinburgh T & T Glark

73. Haworth, M.R. 外林大作訳 1969 児童の心理
療法 I, II, 誠信書房

74. Henry, E. & Rotter, J.B. 1956, Situational Influences
on Rorschach Responses, J. Consult. Psychol. 20,
457-462

75. Henley, N.M. 1969, A Psychological Study of the S
Semantics of Animal Terms, J. verb. lear. verb. behav.
8, 176-184

76. 樋口和彦, 1978, ユング心理学の世界, 創元社

77. 姫路市立教育研究所, 1973. 箱庭療法の立
場から—教育相談に関する研究—, 研究報告
73号, 50-63

78. 平沢 一, 1966, 軽症うつ病の臨床と予後, 医学書院

79. 芳賀 純, 1959, Ch.E. Osgood の "Semantic
Differential" について, 計量言語学, 10, 10-24

80. 本間 恭子 1973 かんもく児を持つ母子のカウンセリング経過, 研究紀要34, 61-80, 豊中市立教育研究所
81. " 1977 幼児のカウンセリングからの発見—幼児の自我発達についての考察—, 研究紀要44, 23-40, 豊中市立教育研究所
82. Huizinga, J., 高橋英夫訳 1963 ホモ・ルデンス, 中央公論社
83. Hulse, W.C. 1952 Childhood Conflict Expressed Through Family Drawings, J. Proj. Tech., 16, 66-79
84. Hunt, W.A. 1946 The Future of Diagnostic Testing in Clinical Psychology, J. Clin. Psychol., 2, 311-317
85. 伊部光子 1976 箱庭療法による試み—緘黙児の事例について—, 研究紀要71, 141-150, 福井県教育研究所
86. 一谷 理地 1968 樹木画テストの研究—KochのBaum testにおける発達の検討—, 京都教育大学紀要, 33, 47-68
87. 出井 淑子 1968 ロールシャッハ法による思童期における自我機能の発達過程の分析, 京都大学教育学部紀要, 14, 100-121
88. 池田 貢 1971 箱庭療法にみられる自我の発達過程—学校恐怖症の心理と治療—, 長野県教育センター研究年報 5, 61-70
89. 生田 純子, 星野 義夫 1976 教育相談に関する研究—箱庭療法を中心とした事例分析, 研究報告5004, 名古屋市教育館
90. 井村 恒郎他 1966 心理テスト—異常心理学

講座オ2巻 みすず書房

91. 井上義治 1970 幼稚園児M子の治療過程
カウンセリングセンター紀要4, 1-20, 京都市教育
委員会
92. シ 1971 ある学校恐怖症児の遊戯
治療, カウンセリングセンター研究紀要5, 16-36, 京都
市教育委員会
93. シ 1972 授業を乱す落着のない男児
の心理治療の事例, カウンセリングセンター研究紀要6,
51-76, 京都市教育委員会
94. シ 1977 吃音を訴える高校生の事例
カウンセリングセンター研究紀要8, 16-38, 京都市教
育委員会
95. 板垣栄子他 1974 集団不適応児A子の治療
過程(1)-遊戯治療および箱庭治療をとおして-
研究紀要, 77-83, 秋田県教育センター
96. 岩堂美智子他 1970 箱庭療法に関する基
礎的研究, 大阪市立大学家政学部紀要, 18, 183-192
97. Jung, E. 1972, Animus and Anima, Spring Publications
98. Jung, C.G. 1940, The Integration of the Personality
Lowe and Brydone (Printers) Limited London
99. Jung, C.G. 1953, Two Essays on Analytical Psychology
C.W. 7, Routledge & Kegan Paul
100. Jung, C.G. 1953, Psychology and Alchemy, C.W. 12,
Routledge & Kegan Paul 池田秘一, 鎌田道生訳, 1976
心理学と錬金術, 人文書院
101. Jung, C.G. 1954, The Practice of Psychotherapy, C.W.

I6, 3-75, I39-I6I, Routledge & Kegan Paul

102. Jung, C.G. 高橋義孝訳 1957 人間のタイプ・ユング
著作集1, 日本教文社

103. 〃 1959, The Archetypes and the Collective
Unconscious, C.W. 9-1 Routledge & Kegan Paul

104. 〃 1959, Aion, C.W. 9-2, Routledge & Kegan
Paul

105. 〃 1960, The Structure and The Dynamics of the
Psyche, C.W. 8, Routledge & Kegan Paul

106. 〃 1964, The Development of Personality, C.W.
17, Bollingen Foundation

107. 〃 1967, Alchemical Studies, C.W. 13
Bollingen Foundation

108. 〃 1961, Freud and Psychoanalysis, C.W. 4,
56- 73, 83- 226, Routledge & Kegan Paul

109. 〃 浜川輝枝訳 1970, 人間心理と宗教
日本教文社

110. 〃 & Pauli, W. 河合幸雄, 村上陽一郎訳, 1976
自然現象と心の構造, 海鳴社

111. Kalff, D. 1957, The Significance of the Hare in
Reyard the Fox, J. Analyt. Psychol. 2, 183-193

112. 〃 1966(A) The Archetype as a Healing Factor
Psychologia, 9, 177-184

113. 〃 1966(B) Sandspiel, Rascher Verlag Zurich

114. 金谷美津江, 太刀川トシ, 1974 箱庭療法
の研究—紹介と実践を通して—, 研究報告集56
19-28, 桐生市立教育研究所
115. 笠原 嘉 1967 内因性精神病の発病に直接
前駆する「心的要因」について, 精神医学, 9,
403-412
116. 〃 1968 精神医学における人間学の
方法, 精神医学, 10, 5-38
117. 片口安史 1960 心理診断法詳説—ロール
シャッハテスト—, 牧書店
118. 加藤清, 藤縄 昭 1967 絵画療法における
創造と表現の病理, 精神医学, 9, 5, 60-66
119. 加藤清, 吉本干鶴子 1974 思春期分裂病
の箱庭療法をめぐる象徴的実現(1), 芸術療法. 5. 29-34
120. 加藤正英 1962 臨床心理学とその科学性
臨床心理, 1. 1-2
121. 河合隼雄, 高橋史郎, 1962 遊戯療法の前
後に施行したロールシャッハ法に言語連想法を
使用した例, ロールシャッハ研究, 5, 168-179
122. 河合隼雄 1963 ユング派の分析について
臨床心理 2, 105-112
123. 〃 1964 ロールシャッハ・テクニック入門
ダイヤモンド社

124. 河合昇雄 1966 箱庭療法 (Sand-Play Technique) - 技法と治療的意義について - カンセリングセンター紀要 2. 1-9. 京都市教育委員会
125. 〃 1967 Sand Play Technique, 臨床心理学の進歩, 97-107
126. 〃 1967 ユング心理学入門 培風館
127. 〃 他 1969 箱庭療法入門, 誠信書房
128. 〃 1971 コンプレックス 岩波新書
129. 〃 1971 イメージについて, 成瀬悟策編「イメージ」催眠シンポジウムⅡ, 203-219 誠信書房
130. 〃 1971 箱庭療法Ⅰ, Ⅱ, 児童心理 25, 14, 12号
131. 〃 1973 箱庭療法における自我像の表現, 日本心理学会第37回大会発表論文集, 50-51
132. 〃 1977 無意識の構造, 中央公論社
133. 〃 1978 ユングの生涯, オニ文明社
134. 〃 二橋茂樹 1978 遊戯療法, 現代精神医学大系, 第5巻 精神科治療学Ⅰ 304-318 中山書店
135. 河田祐子 1977 ある場面緘黙児の遊戯治療 - 緘黙世界の理解に向けて - 臨床心理事例研究 4, 145-152, 京大教心理教育相談室紀要

136. 河田祐子 1978 ある思春期を迎えた少女との面接過程, 臨床心理事例研究 5, 121-128
京大教心理教育相談室紀要
137. Kelley, G.A. 1955, The Psychology of Personal Constructs, Vol. I A Theory of Personality, W.W. Norton & Company,
138. 木村晴子他 1971 箱庭療法に関する基礎的研究(その2)-知的優秀児の箱庭表現をめぐって- 大市大家政学部紀要 19, 217-227
139. 木村晴子他 1972 箱庭療法に関する基礎的研究(その3)-3・4・5才児の箱庭- 大市大家政学部紀要 20, 175-184
140. 木村晴子 1972 幼児のサンドプレイに関する実験的研究, 日本保育学会第25回大会研究発表論文集, 1601
141. 木村晴子 1973 箱庭のみかたに関する実験的研究-特にセラピストの特性との関連において-, 大市大家政学部修士論文
142. " 1973 箱庭のみかたに関する実験的研究(1)セラピストのグルーピングの試み 日心学第37回大会発表論文集 46-47
143. " 1974 中学生の「箱庭」の諸相に関する一考察, 日心学第38回大会発表論文集 664-665
144. " 1975 箱庭のみかたに関する実験的研究(3)作品へのコメントをめぐって, 日心学第39回大会発表論文集, 460
145. " 他 1975 自閉症児の箱庭療法の実態, 山松實文編著 自閉症児の治療教育, 317-357, 岩崎学術出版社

146. 木村晴子, 国田康伸, 1976 箱庭療法に関する実験的研究—ロールシャッハテストとの関連において—
日心学第40回大会発表論文集, 1031-1032
147. 木村 駿 1964 TAT診断法入門, 誠信書房
148. 北野良美, 北村美知子 1975 大学生の箱庭に関する実験的研究—親子関係・生育調査との関連において, 大阪樟蔭女子大学卒論
149. 北沢高子, 宮本ふみ子 1977 高年令者の箱庭作品について (I), (II), 日心学第41回大会発表論文集 996-999
150. 北山 進 1964 臨床心理診断過程に関する二, 三の考察, 臨床心理, 3, 233-238
151. Klein, M. 1927, Criminal Tendencies in Normal Children, Brit. J. Med. Psychol. 7, 177-192
152. // 1961, Narrative of a Child Analysis, The Hogarth Press
153. 〃 松本善男訳 1975 羨望と感謝—無意識の源泉について, みすず書房
154. Klopfer, B. et. al. 1954, Developments in the Rorschach Technique, Vol. I Technique and Theory Harcourt, Brace & World
155. Klopfer, B. 1961, C.G. Jung—1875-1961— J. Proj. Tech. 25, 250-251
156. Koch, C. 林勝造他訳 1970 バウムテスト—樹木画による人格診断法—, 日本文化科学社

157. 児玉 省 1963 臨床心理学の概念と問題点
臨床心理 2, 1-2
158. Kretchmer, E. 相場 均 訳, 1964, 体格と性格
—体質の問題と心気質の学説によせる研究, 文光堂
159. 倉石 精一 1966 最近の臨床心理学におけ
るいくつかの研究課題—1960~1966, 教育心
理学年報
160. 黒田 知篤 1964 臨床的直観と心理検査
—病院臨床におけるテストについて—, 臨床
心理, 3, 239-243
161. Lindzey, G. & Hall, C.S., 1965, Theories of Per-
sonality: Primary Sources and Research, John
Wiley & Sons, I-104
162. Lovaas, O.I. 1961, Effect of Exposure to Symbolic
Aggression on Aggressive Behavior, Child Develop.
32, 37-44
163. " 1961, Interaction Between Verbal and
Nonverbal Behavior, Child Develop. 32, 329-336
164. " et. al., 1965, Experimental Procedures
for Analyzing the Interaction of Symbolic Social
Simuli and Children's Behavior, Child Develop.
36, 237-247
165. Lowenfeld, M.F. 1931, A New Approach to the Problem
of Psychoneurosis in Childhood, Brit. J. Med. Psychol.
Psychol., II, 194-227
166. " 1939, The World Pictures of Children
Brit. J. Med. Psychol. 18, 65-101

167. Lowenfeld, M. 1950, The Nature and Use of Lowenfeld World Technique in Work with Children and Adults, J. Psychol., 30, 325- 331
168. 〃 1952, The Lowenfeld Mosaic Test, J. Proj. Tech. 16, 200-202
169. Lowenfeld, V. 竹内清他訳 1963 美術による人間形成, 黎明書房
170. Maher, B. & Martin, A. 1954, Mosaic Productions in Cerebro-arteriosclerosis, J. Consult. Psychol. 18, 40-42
171. 牧 康夫 1958 津島さんの「臨床心理学の科学的意義」について, 心理学評論, 2, 160-168
172. 〃 1962 フロイド理論の解釈について, 臨床心理, 4, 3-16
173. 正木正, 倉石精一, 黒丸正四郎共編, 1956, 臨床・診断—教育心理学実習, 同学社
174. McClelland, D.C. 長島 貞夫訳, 1958, フロイトとハル—科学的心理学の先駆者—, 3ヶ月カ-ナ. 4. 80-90
175. Meier, C.A. 1959, Projection, transference and the subject-object relation in psychology, J. Analyt. Psychol. 4, I 21-34
176. 三木 三ヤ 1977 自己への道 黎明書房
177. Mills, D.H. 1965 The Research Use of Projective Techniques; A Seventeen Year Servey, J. Proj. Tech. 29, 513-515

178. Miron, M.S. 1961, The Influence of Instruction Modification upon Test-Retest Reliabilities of the Semantic Differential, Edu. Psychol. Meas. II, 883-1
179. 三浦他 1975 情緒障害児に関する事例的研究(II), 研究集録8, 教育相談編, 23-28, 32-43, 新潟県立教育センター
180. 三宅俊子 1969 家族像を中心にみた動物イメージ—Sand Playの基礎的研究—, 京都大学教育学部卒論
181. 宮城音弥 1954 臨床心理学の領域と方法, 心理学講座, 7. 3-11, 中山書店
182. 宮城音弥, 多田道太郎監修, 1968, 遊び, Energy, 5, 3
183. 三好郁男 五才の少年の恐怖症(ハンス症例)
184. Mordkoff, A.M. 1963, An Empirical Test of the Functional Antonym of Semantic Differential Scales J. Verbal Learning & Verbal Behavior 2, 504-508
185. 森本博他 1957 連想法と Semantic Differential法とによる意味関係の研究, 教育心理研究, 4, 131-137
186. 森田福一他 1967 底なし沼を町に…生氣をとりもとしたT君, 研究資料22, 豊中市教育研究所
187. “ 1968 登校拒否児が登校するとき(Kairos)とそのときの心の布置に関する一考察 研究紀要28. 1-20, 豊中市教育研究所
188. “ 1969 箱庭及び遊戯表現を

通してみた子どもの成長, 研究報告資料23-30,
豊中市教育研究所

189. 森田福一他 1970 箱庭療法・遊戯療法
にみられる自己治療 (self-healing) の象徴 (Symbol) と治療終結へのある見通しについて, 研究
紀要32, 37-90, 豊中市教育研究所

190. " 1973 登校拒否児 (中学生)
の心理治療事例—"死と再生"のテーマを中心
に—, 研究紀要34, 83-117, 豊中市教育研究所

191. 森田福一 1974 箱庭療法・遊戯療法に
みられる心的エネルギー変容の諸相, 日心学
才38回大会発表論文集, 660-661

192. 森田琢美 1971 攻撃感情の激しい児童
の治療過程, カウンセリングセンター研究紀要
5, 1-15, 京都市教育委員会

193. 本明 寛 1954 性格診断法 心理学講
座, 7, 3-62, 中山書店

194. Moylan, J., Shaw, J. & Appleman, W. 1960, Passive
and Aggressive Responses to the Rorschach by
Passive-Aggressive Personalities and Paranoid
Schizophrenia, J. Proj. Tech., 24, 17-20

195. 村田千恵 1977 人になじみにくい男児の
事例, 研究紀要12, 72-80, 宝塚市立教育
研究所

196. Murstein, B. I., 1965, Handbook of Projective
Techniques, Basic Books, I-162

197. 長沢哲史他 1968 学校恐怖症の研究,
臨床心理学の進歩, 63-77, 誠信書房
198. Nagelberg, L. & Spotnitz, H. 1958, Strengthening
the Ego through the Release of Frustration-
Aggression, Amer. J. Orthopsychol. 28, 794-801
199. 中井久夫 1970 精神分裂病者の精神療
法における描画の使用, 芸術療法 2,
78-89
200. 中村良之助 1966 Sand Play および Play
Therapy に表現された攻撃感情の変化につ
いて—K 児の治療過程の研究 カウンセリングセンター
研究紀要 2, 59-100, 京都市教育委員会
201. シ 1969 学校恐怖症児 A の治
療過程において表現された心像の変化に
ついて, カウンセリングセンター研究紀要 3, 24-42, 京都市
教育委員会
202. 中村知子 1975 発達遅滞を主訴とする
幼児の遊戯治療事例, 研究紀要 7, 33-42
宝塚市立教育研究所
203. 中西明子 1975 教育相談症例報告, 研
究集録 20, 59-76, 芦屋市立教育研究所
204. 並河信子 1963 現代のカウンセリングとエー
ルの教育論との比較—遊戯療法を中心に—
幼児の教育, 62, 44-51
205. 浪花 博 1966 強迫症状を呈する登校
拒否中学生との治療過程, カウンセリングセンター
研究紀要 2, 118-132, 京都市教育委員会

206. 浪花 博 1969 学校恐怖症女子中学生
の治療過程, カウンセリングセンター研究紀要3
43-64, 京都市教育委員会
207. " 1972 心因性緘黙の心理機制
と治療, カウンセリングセンター研究紀要6,
77-98, 京都市教育委員会
208. " 1975 箱庭療法におけるイニ
シエーションの表現, 日心学第39回大会発表
論文集, 458
209. " 1977 人が見えて困るという症状を
もつ症例, 河合雄雄編著 心理療法の実際,
28-56, 誠信書房
210. Napoli, P.J. 1946, Finger Painting and Personality
Diagnosis, Genetic Psychology Monographs, 34, 129
-231
211. Neumann, E. 1955, The Great Mother, Routledge &
Kegan Paul
212. " 1964, The Origins and History of
Consciousness, Bollingen Foundation
213. " 1973, The Child—Structure and Dynamics
of the Nascent Personality, Hodder and Stoughton
214. 日本を知る事典 1971 社会思想社
215. 西村洲衛男 1966 Sand-Play による表現の
諸側面, カウンセリングセンター紀要2, 10-43, 京都市
教育委員会
216. 野崎守英 1979 道—近世日本の思想—東京大学出版会
217. 荻野恒一 1961 心理療法における治療者

—患者関係—現存在分析の立場から—,
精神分析研究, 7, 36-38

218. 小倉 清 1966 遊戯療法 児童精神医学とその近接領域 7, 172-185
219. 岡田康伸 1969 S D 法によるサントフレイ技法の研究, 臨床心理学研究 8, 3, 151-163
220. 〃 1971 イメージに関する研究—動物イメージに関する—研究—, 京都大学学生懇話室紀要 1, 66-81
221. 〃 1972 サントフレイ技法の研究—領域に関する—研究—, 京都大学教育学部紀要, 18, 231-244
222. 〃, 東山紘久 1972 「箱庭療法」理解のための試験的研究, 青少年問題研究 21, 44-62
223. 岡田康伸 1972 箱庭療法について, 青少年問題研究, 21, 67-77
224. 〃 1973 遊戯療法のプロセス理解(Ⅰ), 倉石精一編, 臨床心理学実習, 256-264, 誠信書房
225. 〃, 木村晴子 1973 箱庭療法に関する試験的研究—左右性について—, 日心学才37回大会発表論文集, 48-49
226. 〃 1974 6才少女の遊戯治療過程の報告—遊びに関する—考察—, 天理大学学報 91, 58-77

227. 岡田康伸, 木村晴子 1974 箱庭療法に関する実験的研究—宗教的玩具の位置について—, 日心学才38回大会発表論文集, 662-663
228. “ “ 1975 高校生の「箱庭」に関する実験的研究—制作者のタイプとの連関において—, 日心学才39回大会発表論文集, 459
229. “ 1976 道・流れ・川の意味—箱庭療法作品を中心に—, 天理大学学報 102, 62-75
230. “ 河合年雄 1976 箱庭療法に関する実験的研究—発達の側面を中心に—, 日心学才40回大会発表論文集, 1035-1036
231. “ 1977 ミルク・ウン・血—テンカシ症児の遊戯治療, 河合年雄編著, 心理療法の実際, 247-274, 誠信書房
232. 岡田洋子 1962 幼児における情緒障害診断の試み—ワールド・テストによる—, 東洋英和女学院短期大学論集 1, 31-49
233. 岡野静二 1977 イメージとは何か, 相川書店
234. 小比木啓吾 1971 現代精神分析I, II, 誠信書房
235. 大場 登 1976 子供の心理療法過程に現われた“家族の変化”イメージ—「箱庭」表現の分析を通して—, 日心学才40回大会発表論文集, 1025-1026
236. “ 1978 子供の心理療法過程に現われる“鍵テーマ”の研究—箱庭・遊戯・描画写真の分析を通して—, 日心学才42回大会発表論文集, 1136-1137

237. 大場 登 1978 箱庭・遊戯・描画表現
を媒体とする小児神経症者の心理療法過程
—“通る”テーマと“自我発達”のテーマをめぐって
芸術療法 9, 59-70
238. 大石 弘 1977 精神遅滞児の箱庭表現
にみられる特徴, 日心学第41回大会発表論文集
1008-1009
239. 大谷不二雄 1966 チック症状の強い
M・O児の治療過程, カンセリングセンター研究
紀要2, 京都市教育委員会
240. Osgood, C. E. & Suci, G.J., 1952, A Measure of
Relation Determined by both Mean Difference and
Profile Information, Psychol. Bull. 49, 251-263
241. // et. al., 1957 The Measurement of
Meaning, Univ. of Illinois Press,
242. Pestalozzi, J. H.; 長田新他訳 1960, 幼児教育の
喜簡, ペスタロッツ全集13, 141-286, 平凡社
243. Piaget, J. 大伴茂訳, 1967, 遊びの心理学, 黎明書房161-277
244. Rabin, A.L., 1961, Devising Projective Methods for
Personality Research, J. Proj. Tech. 25, 6-10
245. Robertson, M.H. 1957, Scoring Intelligence of the
Lowenfeld Mosaic Test, J. Consul. Psychol. 21,
418-
246. Rogers, C.R., 1957, Necessary and Sufficient
Conditions of Therapeutic Personality Change,
J. Consult. Psychol., 21, 95-103
247. // 友田不二男編訳, 1966, サイコセラピー
Rogers 全集3, 297-312, 岩崎学術出版社

248. Ross, B.M. & Levy, N.; 1960, A Comparison of Adjective Antonyms by Simple Card-Pattern Formation J. Psychol. 49, 133-137
249. Rotter, J.; 1953, Clinical Methods; Psychodiagnostics Ann. Rev. Psychol. 4, 295-316
250. " 託摩武俊訳, 1966, 臨床心理学, 岩波書店
251. Rousseau, J.J., 永杉喜輔他訳, 1965, エミール, 玉川大学出版
252. Rozenzweig, S.; 1951, Idiodynamics in Personality Theory with Special Reference to Projective Methods Psychol. Rev. 58, 213-223
253. Sagara, M., et. al., 1961, A Study on the Semantic Structure of Japanese Language by the Semantic Differential Method, Jap. Psychol. Research, 3, 146-156
254. 境 裕子 1977 ある小学校1年生女児の事例, 研究紀要12, 1-8, 宝塚市立教育研究所
255. " 1977 箱庭療法に関する基礎的研究—セラピストの態度について—, 日心学第41回大会発表論文集, 1004-1005
256. 佐治守夫 1962 治療的コミュニケーションと
いうことについて, 臨床心理, 1, 17-21
257. 佐久間章他 1978 ラテラリティについて,
シンポジウム, 日心学第42回大会発表論文集, S101-S109
258. 佐藤和夫 1964 Leonard Berkouty; Aggression
; A Social Psychological Analysis, McGraw-Hill
1962, 臨床心理3, 244-249 (文献紹介)

259. 佐藤他 1976 情緒障害児に関する事例的研究(Ⅲ) 教育相談に関する研究, 研究報告 6号, 15-23, 32-38, 新潟県立教育センター
260. Schaffer, R. 1954, Psychoanalytic Interpretation in Rorschach Testing—Theory and Application—Grune & Stratton, I-62
261. Sears, R.R., 1947, Influence of Methodological Factors on Doll Play Performance, Child Develop. 27, 190-197
262. Seman, C.B., 1957, Use of the Semantic Differential with Lobotomized Psychotics, J. Consul. Psychol. 21, 264-
263. 霜田静志 1956 精神分析と教育 精神分析研究 3, 16-21
264. シンホジウム 1962 臨床心理場面におけるテストの有効性とその限界について, 臨床心理, 1, 27-45
265. シ 1968 児童精神医学の臨床における心理テストの効用と限界, 児童精神医学とその近接領域, 9, 56-66
266. 心理学事典 1957 平凡社
267. 白井信政他 1976 箱庭療法の一事例, 心身障害児教育の実践的研究, 研究紀要 42集, 11-19, 徳島県教育研究センター
268. 空井健三編 1979 臨床心理学 有斐閣
269. Sorokins, A., 上田潤二訳, 1956, テストマニヤ アメリカナ, 2, 31-43

270. Stewart, U. & Leland, L., 1952, American Versus English Mosaics, J. Proj. Tech., 16 246-248
271. " " & Strieter, E., 1961, Mosaic Patterns of Eighth Grade Children, J. Proj. Tech., 25, 73-79
272. Storr, A. 岡崎康一訳, 1976, 創造のダイナミックス, 昌文社
273. " 河合隼雄訳, 1978, ユング, 岩波現代選書
274. 菅 俊夫, 流玉治郎, 1972, 登校拒否児の治療過程の分析—箱庭療法を中心に—, 小児の精神と神経, 12, 1, 25-29
275. Sullivan, H.S., 1954, The Psychiatric Interview, C.W.I., 3-27, Norton
276. 多田俊文 1973 イメージの心理(1)(2), 児童心理, 27, 9.10, 181-199, 173-194
277. 高橋 巖 19 宗教美術と現代, 117-120
278. 高橋紀子 1977 ある集団不適応児の事例「チックと放屁」, 研究紀要, 12, 21-37, 宝塚市立教育研究所
279. 高橋雅春 1967 描画テスト診断法—HTPテスト—, 文教書院
280. 高野清純 1972 遊戯療法の理論と技術 日本文化科学社

281. 武田真一他 1917 日本玩具集, 芸艸堂
282. 武田義彦 1975 落ちつきのない男児の事例
研究紀要, 12, 38-53, 宝塚市立教育研究所
283. 滝 幸子他 1966 夜尿症中学生の治療
過程, カウンセリングセンター研究紀要2, 101-117
木都市教育委員会
284. 詫摩武俊編 1967 性格の理論 1-57.
誠信書房
285. 田中靖政 1964 意味の測定と情緒的意
味体系に関する研究, 心理学評論, 8, 27-69
286. 鑑 幹八郎 1962 児童心理療法の発展(1)
青少年問題研究, 2, 1-15
287. " 1963 " (2)
フロイトの「ハンスの症例」を中心として—, 青少年
問題研究, 4, 60-69
288. " 1964 " (3)
フク・ヘルムートの児童分析をめぐって—, 青少年
問題研究, 6, 33-49
289. 寺崎光男 1972 気が弱く、依存的な男児の
遊戯治療の事例, カウンセリングセンター研究紀要
6, 19-50
290. 哲学辞典 1971 平凡社
291. 豊郷寿雄他 1974 箱庭療法にみられる心の
表現とその心理機制, 教育研究紀要34,
109-118, 愛媛県教育センター

292. 坪内順子 1976 さまざまな診断名を付け
られた家出少女の事例, 精神療法, 2, 4,
50-58
293. 梅尾祥雲 1927 曼荼羅の研究, 高野山
大学出版部
294. Tyler, ., 高田洋一郎訳, 1966, テストと測定, 岩波書店
295. 上田正昭 1974 道の古代史, 淡交社
296. 梅本堯夫他 1969 IMQによる自己像把握
のこころみ, 日心学才33回大会発表論文集
297. " 1969 IMQによる両親像分析
のこころみ, 日教心学才11回大会発表論文集
298. " 1970 IMQによる反応語の
分析, 日教心学才12回大会発表論文集
299. " 1972 IMQの作成の試み,
京都大学教育学部紀要, 18, 154-170
300. 梅本堯夫 19 幼児の心理とあそび,
音楽教育研究, 82-89
301. Warren, T.N., 1959, Stability— Characteristics
of the Semantic Differential, Amer. J. Psychol.
72, 581-584
302. weyl, H., 遠山啓訳 1970, シンメトリー, 紀伊屋書店
303. Wicks, F.G., 19 , The Inner World of Childhood
Appleton-Century-Crofts, 1-51

304. woolf, H. & Garson, L., 1953, Some Approaches to the Problem of Evaluation of Mental Ability with the Mosaic Test, Amer. J. Orthopsychiat., 23, 732-739
305. 山松 質文他 1968 フレイセラピイの実
際, 臨床心理学の進歩, 238-269
306. 山 中 康 裕 1970 ダウシ症児に対する精神
療法的接近, 名市大医誌 21, 3, 214-224
307. " 1970 学校緘黙症児の治療とその
《ここ3》の変容の過程について—Sand Spiel
(Kaltz) および絵画のユング的分析を通して—,
名市大医誌 21, 2, 175-189
308. " 1971 精神療法的創造療法過
程にみられる象徴表現について—Sand Spiel
の精神医学への導入を中心に—, 名市大医誌
21, 4, 747-775
309. " 1978 少年期のここ3, 中央公論社
310. 山 下 勲 1964 ウェルトテストに関する
方法論的研究, 広島大学教育学部紀要, 13,
145-155
311. 山 内 光 哉 1965 臨床心理学における「実
存的」分析療法について, 臨床心理, 4,
110-115
312. 安 村 重 己 1968 箱庭療法について—精
神薄弱児の理解を深めるために—, 教育研
究ジャーナル, 16, 5-8
313. " 1969 箱庭療法による治療過

程の分析—精神薄弱児の事例について—
研究紀要, 107-5, 96-123, 大阪市教育研究所

314. 矢田部達郎・1956 心理テストについて
哲学研究, 39, 291-308

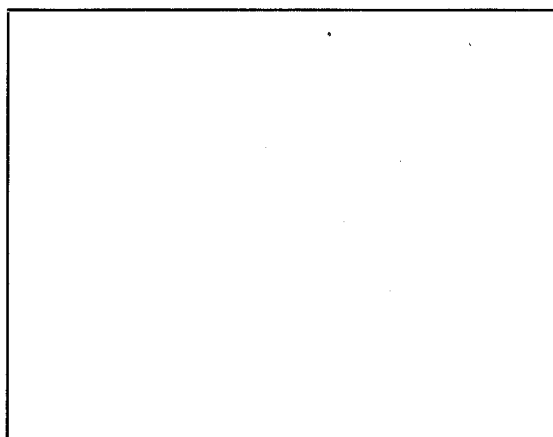
315. “ 1958 科学論からみたテスト
の意義, 心理学評論, 2, 303-306

316. 築島謙三 1950 象徴の考察, 心研 20,
1, 30-38

付 表

付表1. 記録用紙の例: 治療用
SANDPLAY RECORD

Name:	Age:	Sex:	No.
Profession:		Diagnosis:	
Date:	Photo No.	Therapist:	
Sandplay			



記録用紙 研究用①

Y 記録用紙

NO

Ⅲ. 高さ
最高

最低

Ⅳ. 時間

Ⅴ. 態度

Ⅵ. テーマ, テスターの感じ考え

Ⅶ. Y・G テスト

D	C	I	N	O

型
土

Ⅷ. Baum テスト

付表2 箱庭療法記録用紙 研究用②
 NO() Sand Play 記録用紙 ()年()月()日
 氏名()男・女()才

I. 玩具の種類及び数

人	男の人 おにいさん インディアン 人間 人間	女の人 おばあさん 騎馬隊 人間 人間	男の子 お兄さん(男) トランプ 仮面ライダー トランプ	女の子 お姉さん(女) パンダ パンダ パンダ	赤坊 兵隊 ロボコン ロボコン	田舎の人 兵士
動物	野獣:ライオン シムウマ カンガルー 家畜:牛 馬 ニワトリ 所生類:ハ虫類 カエル その他:クモ 昆虫	ライオン トラ カバ (シロ)クマ 豚 羊 水鳥 ヘビ カニ 魚	ザウ シカ ゴリラ ロバ 犬 猫 ワニ トカゲ カメ	キリン サル サイ		
植物	大木:(お)プラ 中木:葉のなる木 小木 草 花壇 花 花	ヤシ 枯木 もみじ ヤシ 枯木 もみじ	クス 枯木 もみじ	枯木 もみじ		
建造物	家(西洋 水車小屋 橋 家具(いす ベッド 遊具(おろんこ 門 その他(石 具 テーブル 鏡台 すべり台 交通標識 タイル バス 救急車 シャベルカー ヘリコプター オートバイ 飛行機 船	日本 神社 とりに とうろく	教会 城 五重塔 風車			
乗り物	自動車 消防車 救急車 モーターボート	トラック トラクター 電車	バス 救急車 シャベルカー ヘリコプター	オートバイ 飛行機 船		

II. 所要時間() 初発時間() 最初の玩具()
 III. 高さ()cm 最低()cm 砂(限る, 限らない)
 IV. テーマ

V. 自らの好きな所

VI. 印象, 制作process. 態度

足りない玩具:

VII. タイプテスト

外	内	分	非合	外思	外感情	外色	外感覚	内思	内感情	内色	内感覚	内直

VIII. Y-Gテスト

D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S

IX. 領域

付表3. 質問紙

340

以下の質問に答えて下さい。

Ⅰ. もっと他に欲しいと思ったものはありませんか。欲しいものを書いて下さい。

Ⅱ. 自分の作ったものについて簡単に説明して下さい。(主題とか物語)

名前 _____

\dot{A}

--

非常に
かなり
やや
^{どうも}やや
かなり
非常に

- | | | |
|----------|--|-------|
| 1 まとま | | 雑然とした |
| 2 かた | | 柔らかな |
| 3 貧弱な | | 豊かな |
| 4 女性的 | | 男性的 |
| 5 深い | | 浅い |
| 6 こせこせ | | のびのび |
| 7 動的 | | 静的 |
| 8 未熟な | | 成熟な |
| 9 開放的 | | 閉鎖的 |
| 10 小さい | | 大きい |
| 11 安定した | | 不安定な |
| 12 暗い | | 明るい |
| 13 弱い | | 強い |
| 14 充実した | | 空虚な |
| 15 不調和な | | 調和した |
| 16 積極的 | | 消極的 |
| 17 アガーマル | | ノーマルな |
| 18 にぎやかな | | さびしい |
| 19 緊張した | | くつろいだ |
| 20 愉快な | | 不愉快な |

B

	非常に かなり やや ない		かなり やや ある	非常に
1 深い				浅い
2 アブノーマルな				ノーマルな
3 かたい				柔らかい
4 暗い				明るい
5 愉快な				不愉快な
6 小さい				大きい
7 緊張した				くつろいだ
8 未熟な				成熟な
9 安定した				不安定な
10 弱い				強い
11 積極的				消極的
12 にぎやかな				さびしい
13 開放的				閉鎖的
14 充実した				空虚な
15 不調和な				調和した
16 こせこせした				のびのびした
17 貧弱な				豊かな
18 動的				静的
19 まとまた				雑然としている
20 女性的				男性的

付表4 SD法調査用紙C

343

--

	非常に	かなり	やや	さほど	やや	かなり	非常に	
1 空虚な								充実した
2 靜 的								動 的
3 豊 かな								貧 弱 な
4 明 る い								暗 い
5 雑然といる								まとまった
6 消 極 的								積 極 的
7 成 熟 な								未 熟 な
8 男 性 的								女 性 的
9 不愉快な								愉快な
10 閉 鎖 的								開 放 的
11 一 人 間 的								アブノーマルな
12 大 き い								小 さ い
13 のびのびした								こせこせした
14 調和した								不調和な
15 浅 い								深 い
16 くつろいだ								緊張した
17 柔らかい								かたい
18 さびしい								にぎやかな
19 不安定な								安定した
20 強 い								弱 い

付表5 IMQ用紙

昭和 年 月 日 実施

学校名		小高 中大	がくねん 学年		くみ 組		番号		なまえ 氏名		男 女
-----	--	----------	------------	--	---------	--	----	--	-----------	--	--------

昭和 年 月 日生

A わたくしは に似ているようです。それはわたくしが だからです。B わたくしは に似たいとおもう。それは だからです。

1. わたくしは [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは わたくしが [] だからです。

2. わたくしは [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは わたくしが [] だからです。

3. わたくしは [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは わたくしが [] だからです。

4. わたくしは [] にたとえると
 [] には似ていません。
 それは わたくしが [] からです。

5. わたくしは [] にたとえると
 [] には似ていません。
 それは わたくしが [] からです。

6. わたくしは [] にたとえると
 [] には似ていません。
 それは わたくしが [] からです。

7. わたくしの父は [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは 父が [] だからです。

8. わたくしの母は [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは 母が [] だからです。

9. わたくしの父は [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは 父が [] だからです。

10. わたくしの母は [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは 母が [] だからです。

11. わたくしの父は [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは 父が [] だからです。

12. わたくしの母は [] にたとえると
 [] に似ているようです。
 それは 母が [] だからです。

付表6 左右性研究の調査用紙
調査用紙

346

氏名 _____ (男 女) 年齢 _____ (右利き 左利き)

○ 臨床経験 _____ 年 _____ ヶ月 (おおよそ結構)

左側は1, 右側は2へ○印をつけて下さい

スライド No.	答	
1	1	2
2	1	2
3	1	2
4	1	2
5	1	2
6	1	2
7	1	2
8	1	2
9	1	2
10	1	2
11	1	2
12	1	2
13	1	2
14	1	2
15	1	2

スライド No.	答	
16	1	2
17	1	2
18	1	2
19	1	2
20	1	2
21	1	2
22	1	2
23	1	2
24	1	2
25	1	2
26	1	2
27	1	2
28	1	2
29	1	2
30	1	2